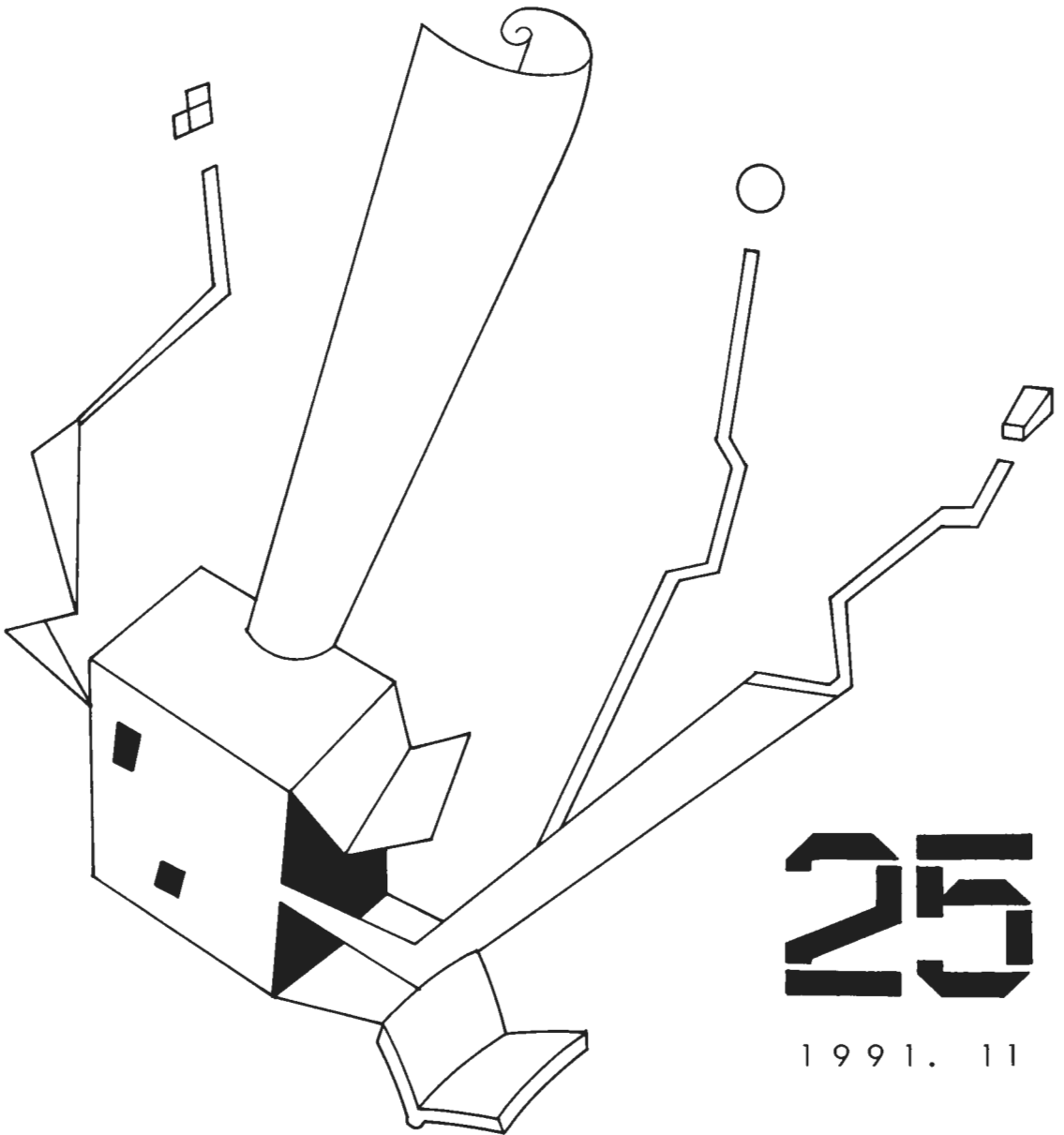


ISSN 0913-0705

# KUJIC



# 25

1991. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

＜特集＞ 湘南藤沢メディアセンター

1…………湘南藤沢メディアセンター所長就任に当たって	高橋潤二郎
3…………メディアセンターは一日にして成らず	原田悟
7…………メディアセンター棟の紹介	種田昭彦
10…………SFCのコンピュータ環境	小林啓樹
13…………FAINSの紹介	金子康樹
18…………ライブラリー・サービスの現状と展望	松本和子
21…………メディアセンターに期待すること ——日本関係外国語文献コレクション——	梅垣理郎
22…………CNSサービスの概要と展望	持田裕人
24…………メディアセンターにおける教材開発サービス ならびにAV製作機能について	木下和彦
26…………メディアセンターに期待すること	楠本博之
28…………SFC学生の雑感など	一ノ瀬和之 宮武博文

29…………珠玉の名盤＜ティールーム＞	遠山元道
30…………情報センター職員研修について——研修委員会「情報センター 職員研修ニーズ調査」アンケート結果から——	宮入暁子
34…………魅せられて……!?＜スタッフルーム＞	柴野麻里子
35…………組織とライブラリアン——UCLAの図書館で働いて——	館田鶴子

——KULICのノウハウ——

40…………三田情報センターにおける新刊和書のpH値測定結果	風間茂彦
42…………三田及び日吉情報センターにおける CD-ROMサービスについて	石原智子 宮崎康子
47…………医学情報センターにおけるCD-ROMの利用	市古みどり 南野典子
50…………日吉情報センターにおける ライブラリー・オリエンテーション	柳晴美
52…………医学部史料について	永崎由紀子

55…………当世学生気質＜スタッフルーム＞	河野江津子
56…………国立大学複写料金支払いについて	玉井裕子
58…………慶應義塾大学展示会に際して＜ティールーム＞	丸善株式会社 広報宣伝部
59…………続・広重東海道五十三次錦絵を読む	白石克

＜資料＞

68…………研究・教育情報センターに関する書誌	
68…………スタッフによる論文発表・研究発表	
71…………年次統計要覧＜平成2年度＞	
表紙裏…Charles Amni Cutter: Library Systematizer	渋川雅俊
76…………編集後記	＜表紙＞ 石井真由美
	＜カット＞ 石井真由美・大橋史子

## 特集 湘南藤沢メディアセンター

### 湘南藤沢メディアセンター所長 就任に当たって

たか はし じゅんじろう  
高 橋 潤二郎  
(湘南藤沢メディアセンター所長)  
(環境情報学部教授)

湘南藤沢キャンパスの新学部発足以来、一年余が過ぎ、太郎坂の並木が美しく紅葉する秋を迎えました。旅人の池には、今冬も、今年にひきつづき多数の鴨が飛来することが期待され、あたりの風景もそれなりの落ち着きをみせるようになってきました。

何よりも心強く感ずることは、学生諸君が、この新しいキャンパスの施設だけでなく、理念や制度に対しても、いち早く適応してのびのびと生活していることです。早朝9時から夜10時の最終バスまで、彼らは広大なキャンパスのあちこちにちらばって多様なキャンパスライフを楽しんでいます。Ω館の階段教室、語学用の小教室、コンピュータ教室、体育館、学生ラウンジや学生ルームなど、そうした学生達の集まる「場所」はたくさんありますが、何と言っても中心となるのは、メディアセンターではないでしょうか。

メディアセンターは、その名称が示すように、単なる図書館ではありません。図書館、AVスタジオ、計算機センターという3つの機能が合体した新しいコンセプトにもとづく情報施設です。

情報化の進展、特に電子メディアの発達が従来のプリントメディア中心の図書館を根底から変えてしまう、といった予言は、既に何年も前から専門家の間では一種の常識となっていました。事実、J. Cabeceiras は、1978年“Multimedia library”を刊行し、従来のプリントマテリアルに片寄っていたライブラリー機能が拡大し非プリントマテリアルをもカヴァーするようになる」と述べています。同書は1982年に改訂版がだされましたが、その中

で、次の8項目が非プリントマテリアルとして挙げられています。

①映画 ②写真(フィルム、スライド) ③レコード、テープ、CD ④TV映像(ビデオ) ⑤プログラム学習教材 ⑥地図 ⑦モデル(模型)、リアル(実物)、シミュレーションゲーム ⑧マイクロフィルム

これらは、いずれも情報メディアとしては、おなじみのものであり、図書館があらゆる情報を収集し管理するものである限り、こうした非プリントマテリアルを収集の対象とすることは当然のことでしょう。現在多くの図書館がこの方向へと進んでおり、その結果「図書館」という呼称では片付けられない機能や内容をもつようになってきています。現実には多くの図書館が「情報センター」と名のりはじめているのは、このためだと言えましょう。

実は、Cabeceiras は今年7月、前述の“Multimedia library”の改訂第3版をだしており、私はまだ入手しておりませんが、その中でどのようなライブラリー像を描いているか、興味のあるところです。

こうした図書館のマルチメディア化は、現実の社会の動向を反映したもので、実際にわれわれの得る情報は、新聞雑誌、書籍といったプリントメディアから、映画、テレビ、レコード、CDといった非プリントメディアへと大きく転換しつつあります。文字による情報伝達の歴史は古く、文字の習熟は知識人にとって必要不可欠であります。これは2つの側面、「読む」と「書く」ことを含んでいます。さらに前者は音読のような狭義の「読み」と「解釈」に分けられ、このうち、「解釈」の方が「読み」に比べてはるかに難しい。同様に、後者も狭義の「書き」と「表現」に分けられ、自己の考えを適切に表現することは、単に書くことより一層の技量を必要とします。こう考えると、リテラシーとは、極めて高度な技術だと言えましょう。従来の教育制度が、小学校から大

学院まで、専らこの意味でのリテラシーの習得を目的としてきたことは当然と言わねばなりません。

現在のマルチメディア化の動向は、こうしたリテラシーが単に文字-活字だけでなく、他の映像や音像といったモード、テレビや CD といったメディアにも要請され始めたことを意味しています。こうした新しいモード-メディアは、「視る」、「聴く」というレベルに留まっている限り、確かに文字-活字に比べ、イーザアクセスできるかもしれません。しかし、リテラシーに解釈や表現まで含めるとなると、そう簡単ではなく、それなりの技量を必要とすることになります。特に重視しなければならないことは、こうした AV メディアへのリテラシーを高める教育が一部を除いてほとんどなされていない事実です。

今回、湘南藤沢キャンパスのメディアセンターに AV スタジオを設置したのは、このような考えのもとづくものです。メディアセンターは、単なる情報の消費の場ではなく、生産の場でもあるところに特長があり、マルチメディア対象のハイリテラシー習得の場であることを目的としているのです。

こうした図書館の変化とともに計算機センターも大きくその機能を変えてきました。この点まず指摘しておかなければならないことは、コンピュータが単に計算だけでなく、さまざまな情報処理に用いられるようになったこと、その結果計算機センターがあらゆる組織を運営する上で不可欠の情報処理支援システムとしての役割を果たすようになってきたことです。他方、IC、LSI の開発による小型化を通じてパソコンが出現し、短期間にオフィス、工場はもちろん家庭にも普及してきました。ここで注意しなければならないことは、その容量拡大とともに PC そのものの能力が変わってきたことでしょう。8ビットのパソコンは、まさに計算機でしたが、16ビットになると文書処理や編集ができるワープロになり、さらに32ビットになるとコンピュータ・グラフィクスやミュージックと言った絵画や音楽の創作ツールに変身します。しかも、こうした PC は単体として機能するだけ

でなく、デジタル化した電話線に接続することで、コミュニケーション手段ともなりえます。PC は相互に結合されることで群体としても機能することになったわけです。

こうした群体としての PC の出現は、まずコミュニケーションネットワークを作っておいて、そこにさまざまな機能を持ったワークステーションを連結するという発想をもたらすことになります。現在、湘南藤沢キャンパスにある CNS (キャンパス・ネットワーク・システム) は、まさにこうした構想を実現した、いわば将来日本全国、或いは世界にはりめぐらされる ISDN をキャンパス内に構築したものと言ってよいでしょう。しかも、こうしたシステムは一見多数の機器類 (キーボードやディスプレイ、プリンターなど) と配線のみから構成されているようにみえますが、その中には、膨大な情報がソフトウェアやデータベースとして蓄積されており、これらを利用することによってさまざまな情報を生産することができます。その意味で、研究、教育活動の支援システムといえるわけです。

以上述べてきたことから、今回、われわれが図書館、AV スタジオ、計算機センターという3つの機能をひとつの施設に並置した意図がおわかりいただけるのではないかと思います。現在のところ、これら機能は「並置」の段階に留まっておりますが、これを可及的すみやかに「融合」したい、これが私どもの夢であり願いであることを述べて、御挨拶にしたいと思います。



## メディアセンターは一日にして成らず

はら だ さとる  
原 田 悟  
(湘南藤沢メディアセンター)  
担当課長

## I. メディアセンター構想の原点

慶應義塾が新しく開設した2学部（総合政策、環境情報）は、研究・教育の基盤として積極的にコンピュータを活用することを特徴としている。湘南藤沢キャンパス（以下SFCと称す）では、このコンピュータ活用の日常化を電子文房具という言葉でいい表している。現実の本誌において諸氏が後述するコンピュータ諸環境を、学生・教職員は自由に利用している。メディアセンター構想の原点はこのあたりにあるのだろうと考える。

昨今の大学をとりまく情報関連環境は、内的には図書館業務のコンピュータ化、コンピュータ運用の専門集団としての計算センターの形成、コンピュータネットワークの整備、外的なものとして情報メディアの多様化を促進するコンピュータ技術の急速な進歩等々が挙げられる。これら諸要素を総合的に捉えれば、新キャンパスを開設するに当たっての「情報メディアを統合した情報サービス機関の設置」という考えは新キャンパスの具備する機能の一つとしては大きな意味を持ち得たものと想像できる。またそこでは、従来の図書館と計算センターを統合した組織としてメディアセンターを想起したとしても不自然ではなかったと考えられる。

現在、メディアセンターは図書館機能、計算センター機能同居のもとに、下記4項目を主營業務として動き始めている。

- 1). 研究・教育関連情報の収集・処理・提供に関する業務
- 2). 情報関連システムの整備・運用に関する業務
- 3). 教材開発およびマルチメディア環境を活用した教育活動の支援に関する業務

- 4). 研究活動の支援および研究助成に関する業務

けだし、メディアセンターの動きは遅々としたものであり統合には程遠い状態であることは否めない。

## II. アイディア即実践による苦悩

通常新しい仕事を展開する場合、次のようなプロセスを踏むものと考えられる。

a) アイディアの想起, b) 想起されたアイディアに基づくイメージのデザイン, c) デザインされたイメージに基づくスキーマデザイン, d) スキーマデザインに基づく実施計画, e) 実践及びそれと並行した評価行動, f) 計画の修正も含めたゴールへの接近。

このプロセスを明記したのにはそれなりの意味がある。つまりメディアセンターの新設に当たって多角的な議論がなされ、かつその上で計画が策定されたのか否かの判断をしたいと考えているからである。それは将来に向けたものとして必要不可欠と思われるからである。

反省を込めて言えば、諸般の事情により、メディアセンターの新設においては上記のプロセスに当てはめてみた場合、アイディア即実施計画であった。SFC開設に至る諸々の実施計画の議論の中で、時間等様々な制約があったにしても、特に議論希薄なものの一つがメディアセンター構想ではなかったかと感ずる。

アイディアが想起され、イメージデザインをする過程では、少なくとも思考の中で「概念化」に向けた作業がなされなければならないし、概念の構築に当たっては当然その概念の構成要素が認識されなければならない。スキーマデザインの段階に至っては実現の可能性の確保を前提としたフィージビリティ、特にメディアセンター構想においては技術予測も踏まえたスキルについての検討を済ませておかなければならないはずである。そして実施計画の策定に当たっては人、金、物に渡る検討を必要とし、特に技術・技能については、この段階で人にシフトした計画を立てるか金にシフ

トした計画にするかの覚悟を決めておかなければならないはずである。

メディアセンター構想の構築プロセスにおいては、ほとんど基本的とも言える前述部分が欠落していたように思う。

### Ⅲ. メディアセンター構想の実施案作りに向けた段階での問題点

先に述べた種々の事柄は、過去の単なる反省ではなく、将来に向けて不足部分を補い、まずメディアセンター始動の手始めに短期間で基盤部分だけでも整備したいという意欲の現れと理解して頂きたい。

さて、メディアセンターの確立に向けては、現段階で解決しておかなければならない4つの問題があると考えている。

#### 1). SFC の情報環境（文化）の正確な認識

SFC はコンピュータネットワークを軸にコミュニケーションが成立しているし、電子文房具の呼称でもわかる通りコンピュータはノート、鉛筆、電卓、電話の延長線上で日常的に使われている。学生・教職員のほぼ全員が日常的にコンピュータを利用している環境は日本の中では類を見ないものであろう。またコンピュータ環境に限定して言えば、SFC はメインフレームによる集中処理環境ではなく、ワークステーションのネットワークによる分散処理環境である。分散環境を一口で言えば、ユーザーの自由度の極めて高い利用環境であって、集権的運用には不向きであり、ユーザー本位の分権化が徹底される傾向にあるものと理解される。

これら SFC の環境を総じて論ずれば、情報関連機関として想定したメディアセンターの固有な情報活動をはるかに越えたユーザーの情報活動が、分権的に（自由度が極めて高い所で）行われているのである。情報活動において、いわゆるセンターの機能とは一体どういった形態になるのか議論することが必要であろう。過去の経験的判断・価値観からは見えない世界であると言って差し支えない。

現段階においては SFC には二つの価値観と一つのギャップがあるといえよう。

- a). 教員を中心とした研究室規模の分散環境のレベルの尺度で SFC 全体（ワークステーション 500 台以上の分散環境）を考えるとしよう傾向を生む価値観
- b). SFC の環境では従来型の集権的運用は無理と知りながらも、オープンシステム型の運用方法・手段を信頼できず、ある種の不安と集権的運用にノスタルジアを感じる傾向を生む価値観

そして、上記 a). b). の谷間でどうするのか未だ見えない運用範囲に心を痛めているグループの価値観である。

#### 2). 自己完結的なアイディアの修正

SFC の環境認識はメディアセンターのアイディアが想起された時点では全く認識されていなかったものと言える。図書システムも含め極めてオープン化した SFC 及びメディアセンターをとりまく環境においては、従来型の図書館等の意思決定のように半ば自己完結的にできる環境ではなくなってきた。こういった中ではセンターは何を以って業務とするのかといった確信が揺らぐものである。システムに搭載するソフトウェアについても「予算」に基づいて導入したもの以外は完全に掌握することはほとんど無理であるというのがこの世界の理解である。UNIX ソフトウェアの多くがパブリックドメインであることがこのことに拍車をかけているが、それ自体は情報環境の進展を促進こそすれ阻害要因にはならないことを考えれば、従来の「管理・運営」的価値観を修正し、オープンシステムに対応したメディアセンター構想を再構築しなければならない。このことも急務である。

#### 3). メディアセンターの機能概念の構築とスキーマデザイン

1). 2). を踏まえたメディアセンター構想を具体化しなければならない。それは一つにシステム概念の構築であり、そのためには基本的な構成要素を抽出し認定しなければならない。構

成要素の認定はとりも直さずメディアセンターの具備すべき機能を認定することであり、かつ、そこで認定される機能は技術が予見できる具体的なものであるべきである。図書館機能、計算センター機能といった抽象的包括概念の域を一緒にブレイクダウンしなければならない。なぜならば、最下位単立機能の統合化過程を一度は通過しなければ、求める「システム」の「形」が見えてこないからである。その「形」に再度イメージをオーバーラップさせながら議論を繰り返すことによって構成概念を成熟させなければならない。

一口に言って「オープンシステム環境下で情報メディアを統合的にサービスする」ということは、どのような機能をどのように統合（システム化）しようというのか。現時点では機能面でも、それに付随するスキル面でも緻密な議論がなされていない。概念構築からスキーマデザインまで一貫した議論が必要である。

反面、この考えとは若干違ったところで、オープンシステム化を極大化し、メディアセンターの機能をインフラストラクチャーの保守のみに限定する考え方もとれないことはない。

この場合は教育支援関連機能の最低ラインをSFCの責任において設定しなければならない。なぜならば情報関連技術は個々人の差が大きいからである。このこととは別にオープン化を極大にすることの一つの欠点は、ある意味でマネジメントの極小化であり、ほとんど「経営指標」が塾として把握できなくなることが予想され、放任に陥る危険性があることである。

#### 4). 職員の意識改革

現在メディアセンターには3系統の職員がいる。つまり従来の図書館系の職員と計算センター系の職員、そしてメディアセンター発足後に採用された職員である。職員は総じて頭では従来の二つのセンターの同居ではなく、メディアセンター構想の下に統合された組織の職員であるべきだとの自覚はあるものの、先程から述べて来たようにメディアセンターのあるべき姿がデ

ザイン未了の現状において、メディアセンターを志向するよりは、むしろ従来の出身母体の思考様式のうちに留まる傾向が強いことは否めない。逆に脱脚することの方が困難なのかもしれない。

この原因は二つある。一つは創設期であることもあって、図書関連業務とコンピュータ関連業務を立ち上げることで手一杯であること、二つ目は、メディアセンターの新たな試みとしての映像、音像関連情報のシステム化において、その技術認識及びサービス環境構築の必要性の理解が、学部の意気込み程にメディアセンター職員に心象化されないことによるものと思われる。

映像、音像、イメージ情報等とテキスト情報の融合化が技術的に定着し、業務としてのステータスが確立すれば、自ずと職員の意識も変わるかもしれない。

#### IV. メディアセンター回顧と展望

今、メディアセンターにとって一番必要なことは、アイデアとしての業務概念を実態あるものにするることである。そのためには、メディアセンター職員及びSFC教員を交えた密度の濃い議論を展開する必要がある。またそれと並行して、基本コンセプトともいえる「情報メディアを統合した情報サービスシステムを構築する」ことに必要な技術の検証もしていかなければならない。このことをベースとして、日常の業務をこなすことが今後の展望につながるものと考えている。

最後にメディアセンターが開設以来手掛けた仕事の一部と今年度後半から次年度にかけての業務計画を紹介することによって、ゆっくりではあるが着実に構想の具体化に努力していることもお伝えしたい。なぜならばこれをお伝えすることによって、本文に示した内容が単なる苦悩ではなく、真摯に大きな目標に向かって戦っている集団の「汗」として理解して頂けると考えるからである。

“メディアセンター的”な仕事をピックアップして紹介することにする。

### 1). メインフレームとワークステーションの統合

図書館向きの話題で言えば、メインフレーム搭載の図書システムをワークステーションから LAN を介した検索を可能にした。現在図書システムから延滞者リストを抽出し、ファイル転送で UNIX メールで延滞者に督促するシステムを構築中。

### 2). データベースシステムの構築に着手

図書データベースの他に、統計データベース等もネットワーク上で稼働するに至った。また操作マニュアルも一部オンライン化した。今後の課題はデータベースの増強とクリアリング機能の整備である。

現在ネットワーク上に搭載されているデータベースは5つであるが、将来は研究者のミニデータベースも含めた展開を考えている。

### 3). 文書処理の統合

現在 SFC で稼働している文書処理ソフトウェアで作成された文書を統合的に扱えることを計画。具体的には Latex, Nemacs, Jstar, OASYS, 一太郎等の相互乗り入れを可能にす

ることであり、既に市販分、SFC 開発分も含めて一部はシステム化している。2). の操作マニュアルのオンライン化はこのシステムによる。

文書処理のシステム化、統合的教材開発機能の補助的手段の確立を目論んだものである。

### 4). 文書とイメージの統合

Jstar, AS-Documents を仲介として、SFC の基盤文書処理ソフト Latex で作成されたテキストとイメージ情報の統合を目論む。

これは出版・印刷を予定する教材開発の基本的技術として位置付けている。

その他手掛けられているものについては鋭意努力を傾注することを予定している。しかしながら仕事の総ボリューム及び既存機関に比し、破格に大きな「技術要求」への対応を考えると一朝一夕に事が運ばないことも事実である。

ただひたすら、頑張るのみである。

最後の最後にここに述べた諸般の事情をご理解頂き、新設メディアセンターに対するご指導ご鞭撻を甘えを捨てた上で重ねてお願いするものである。

## KOSMOS の誕生

今年度運用を開始した慶應義塾大学全塾統合図書館システムの呼称が KOSMOS に決まりました。この呼び名は、KEIO UNIVERSITY SYSTEM OF MULTIMEDIA ONLINE SERVICES を省略化したものですが、一方ではギリシャ語の ΚΟΣΜΟΣ をローマ字表記した名前でもあります。

ΚΟΣΜΟΣ とはギリシャ哲学で、もともと秩序あるいは調和のとれた状態を意味しました。そこから調和した世界そのもの、更には宇宙へと意味が広がった言葉で、英語の COSMOS の語源ともなりました。

また、秋桜(コスモス)と書くと、その字の

通りに秋に可憐な花を咲かせる植物ですが、群生した光景はやさしさと同時に力強さを感じさせます。花言葉は、純真(まごころ)とありません。

「マルチメディア」、「調和」、「宇宙」、「まごころ」、このように KOSMOS は、21世紀へとつなぐ情報センターの活動基盤となるシステムを目指して命名されたものです。

KOSMOS はまだ産声をあげたばかりです。今後は、より一層充実したサービスを提供するよう成長を遂げていくことが大切だと考えています。



メディアセンター棟の紹介



種 田 昭 彦

(湘南藤沢メディアセンター)

I. はじめに

僕は戸越公園に住んでいるネコのペン吉。今日のはるばる藤沢の片田舎(おっと、失礼!)までSFCのメディア

センターを見学に来たんだ。

「こんにちは、ペン吉君。今日は遠いところ御苦労さまです。ご覧の通り、SFCは大変自然に恵まれた環境にあります。」

自然にめぐまれているって! 物は言いようだね〜。まっ、とにかくメディアセンターとやらを早く案内してよ。

「メディアセンターはSFCの大学ゾーンのほぼ中央に位置し教職員や学生達が利用しやすい場所にあります。建物は地上三階、地下一階で総面積は7,054m<sup>2</sup>、総閲覧席数は814です。ではさっそくメディアセンターを御案内いたしましょう。」

II. メディアセンター棟の紹介

(1) 1階オープン・エリア

この二重の自動ドアを抜けてと、おや、どうし



1階 入館ゲート

てこんなところに駅の自動改札口が……。

「ペン吉君、これは入館ゲートと言って、メディアセンターへの入館のチェックをIDカードによって自動的に行っているんですよ。君の言うとおりに、機能的には駅の自動改札口と同じですね。」

フーン、ここがオープン・エリアなのか。AV機材や端末機がいっぱいあるけど何をするとところなの。

「オープン・エリアでは語学学習用のワークステーションを始め、約150台のワークステーションが置かれており、AVラウンジではビデオ、CDや語学学習用テープ等を自由にご利用することができます。また、ラウンジでは新聞や最新の週刊誌を閲覧することができます。入館ゲート横のカウンターではコンピュータに関する相談を受け付けたり、夜間の資料の貸出・返却等の手続きを行っています。そ



1階 語学学習セッション

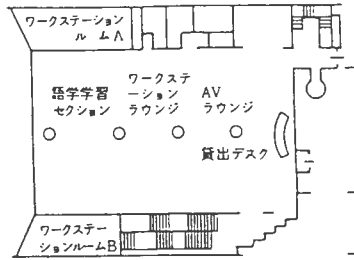


1階 ラウンジ

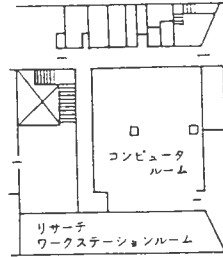


1階

オープン・エリア

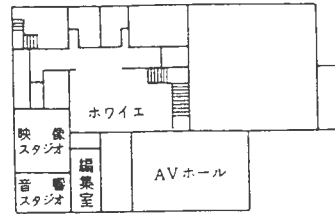


リサーチ・エリア



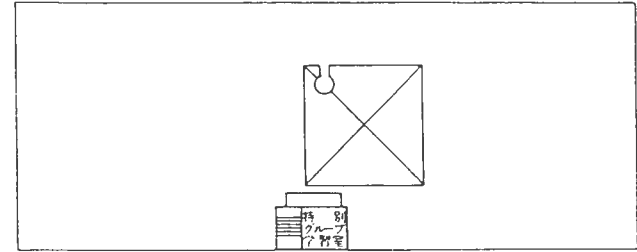
地階

スタジオ・エリア



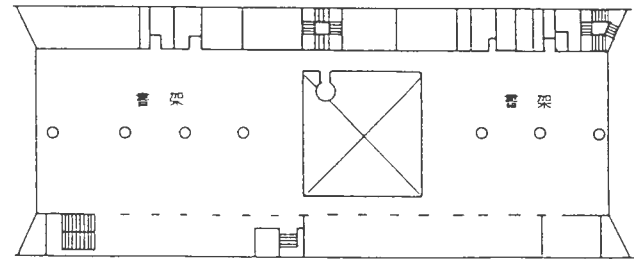
4階

ビスタ・ルーム



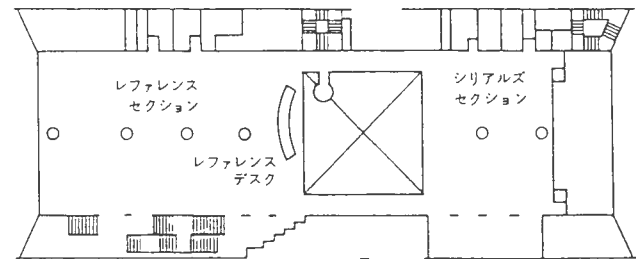
3階

ライブラリー・エリア, グループ学習室



2階

ライブラリー・エリア



μ館 (メディアセンター)



1階 貸出デスク

れでは次は二階にまいりましょう。」

(2) 2階ライブラリー・エリア

ライブラリー・エリアか、やっと図書館らしいところにやって来たって感じだよ。ここはどのような構造になっているの。

「ライブラリー・エリアは南側のレファレンス・セクションと北側のシリアルズ・セクション

とからなっています。レファレンス・セクションには百科事典や語学辞書、専門事典、索引、文献目録などの参考図書が置かれています。また、レファレンス・カウンターを設けており、文献に関する質問の受け答え、文献の取り寄せ等を行っています。平日5時までの資料の貸出・返却も受け付けます。他に研究者閲覧室、一般閲覧席、ラウンジ、コピー室があります。シリアルズ・セクションには新聞、雑誌、白書、年鑑、統計、法令、判例等が置かれています。また、マイクロ・リーダー・ルームにおいてマイクロフィルムに収録された資料の閲覧とコピーが自由にできます。」

二階のライブラリー・エリアは色々な事を調べるのに便利なところなんだね。また、北側の奥にある事務室にお兄さんたちはいるんだよね。それじゃ、次は三階を案内してよ。

(3) 3階ライブラリー・エリア



2階 レファレンスセクション



3階 書架

うわー、本がいっぱいあるよ。これがいわゆる開架式書庫というやつだね。

「三階ライブラリー・エリアは図書が置かれたフロアです。図書を自由に閲覧することができます。ここには、グループでディスカッションをしながら資料を利用することのできる三つのグループ学習室があります。閲覧席も多数用意されており、落ち着いた気持ちで勉強に励むことができます。また、ここにもコピー室があります。」

そうだね、図書館は静かなのが一番だね。あれっ、



2階 レファレンスデスク



3階 閲覧席

メディアセンターは三階建てのはずなのに、あそこに上にあがる階段があるよ。

(4) 4階ビスタ・ルーム

「屋上部分にあるビスタ・ルームに行くための階段です。ビスタ・ルームはグループ学習室のひとつですが、他と違うのは予約制だということです。」

見晴らしも最高だし絨毯もふかふかだし、ちょっと優雅な気分だね。

あっ、そうそう、さっき入口の反対側にもうひとつ入口があったけどあれは何なの。

「はいはい、それでは図書館部門はこれくらいにして、次にメディアセンターのもうひとつの顔であるコンピュータ部門の御案内をいたしましょう。再び、一階まで降りますよ。」

(5) 1階リサーチ・エリア

うわー、なんだかガラス箱の中に機械がつまっているという感じだね。

「リサーチ・エリアは他のキャンパスで言うと計算センターの役割を果たしているところです。IBM と富士通のメインフレーム（大型計算機）や研究用ワークステーションが置かれています。研究用エリアのため誰もが自由に利用できるわけではありません。入退出はIDカードでのチェックがあります。それでは、最後に特殊な部分である地下一階に参りましょう。」

(6) 地下1階スタジオ・エリア

ちょっと、映画館のロビーという雰囲気だね。

「このフロアはスタジオ・エリアといって、授業や講演会、映画会などの催し物が行われるAVホールや、将来CATVの番組制作・コンピュータミュージックの制作等に使われる映像・音響・編集スタジオがあります。これらはすべて予約制になっています。」

Ⅲ. さいごに

「これで一通りメディアセンター棟を見て回ったわけですが、どうでしょうか。」

どうも、ありがとう。メディアセンターというものが、よ〜く分かったよ。それに、外見は簡素なのに中はすごく立派な設備が整っていて、びっくりしたよ。

じゃあ、今日は本当にありがとう。また、遊びに来るね。バイバイ。ニャ〜オ。

MEDIA CENTER.



SFC のコンピュータ環境

こばやし けいじゅ  
小林 啓樹

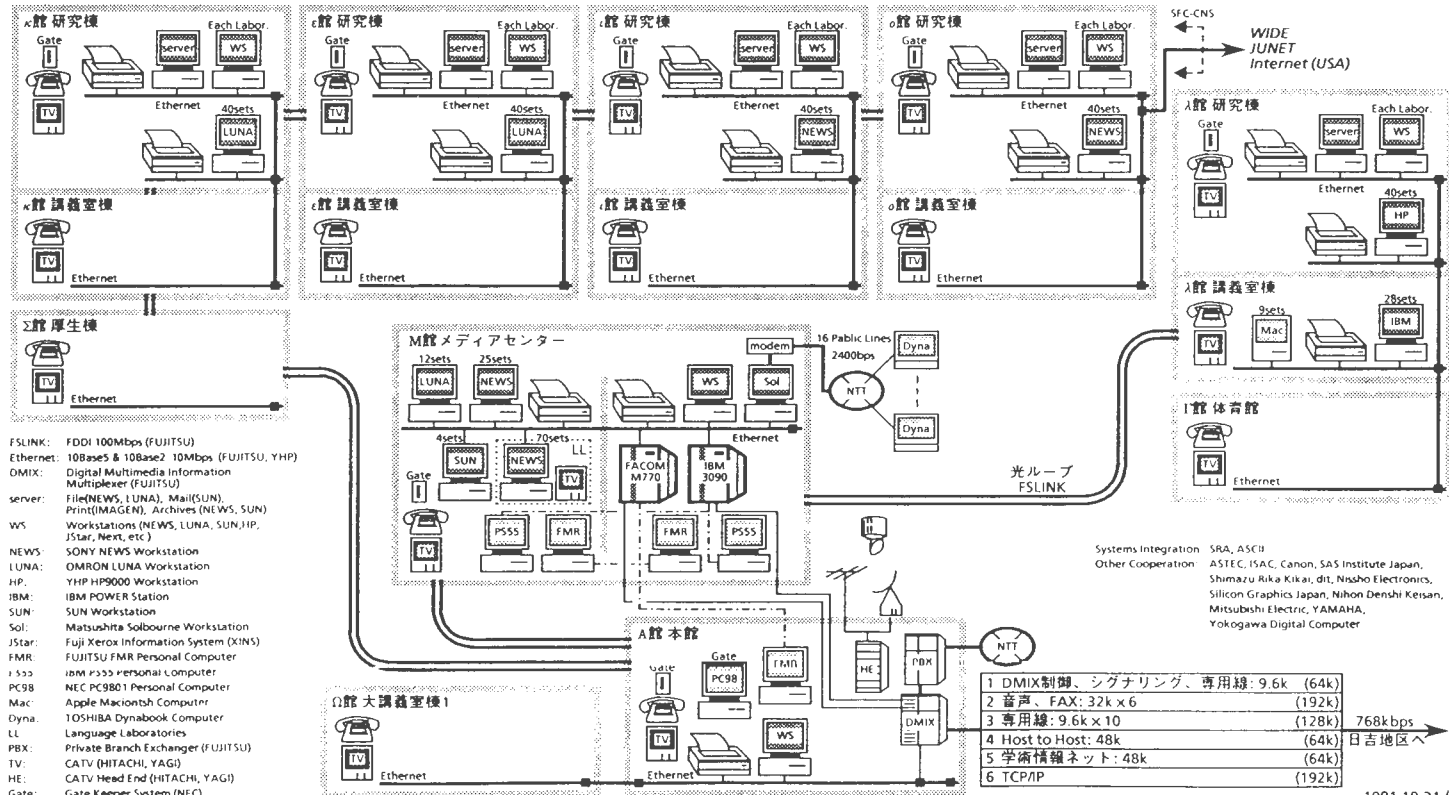
(湘南藤沢メディアセンター)  
課長代理

I. はじめに

早いもので、湘南藤沢キャンパス（以下 SFC と略す）が開設してから1年半を迎えました。塾内外の期待を背に両学部長を始め教職員一丸となり、新キャンパスの構築に邁進してきたわけですが、まだまだ第一歩を踏み出したばかりで、いろいろな面でこれからと言う所でしょうか。

しかし、開設当初から国内では勿論、ネットワークでは最先端のアメリカでもあまり多くの例を見ないと言われる UNIX（基本ソフトウェアのひとつ）をベースとした大規模なキャンパスネットワークシステム（以下 CNS と略す）を基盤として様々な試みが行われています。その一つとしては、両学部の1年生が全員履修する情報処理言語 I が挙

## ■ 湘南藤沢キャンパス・キャンパスネットワークシステム (SFC-CNS) 構成図



---

げられます。その中でもネットワークの特徴を最大限に活用した、電子メール、電子掲示板の習得はその試みの代表と言っても良く、電子情報をコントロールすることがSFCのキャンパスライフの一部となってきています。

さらに、ワークステーションに搭載した教材での語学教育もドイツ語を皮切りに、韓国語、フランス語と精力的に拡大してきています。また、来るべき21世紀の花形となるであろうコンピュータアート、コンピュータミュージックの分野、マルチメディア教材の開発と止まる所を知らないように、新キャンパスを舞台に着実にこれらの成果をあげて行くでしょう。

## II. SFC-CNS の概要

「ネットワークありき」まさにSFC-CNSをそう表現するのが良いかと思えます。分散環境を実現するための情報の伝送路(情報ケーブル)は、電気ケーブル、音声ケーブルと同じように建物と一体となった形で敷設されています。

高速の光ケーブル(100 Mbps)が建屋間を結び基幹LANとして位置付けられています。各建屋内では上下に(例えば1階から最上階までという意味)Thick Ethernet(10BASE5)ケーブルがEPSを通して貫き、各フロアはそこから分岐してThin Ethernet(10BASE2)ケーブルが隅々の個室にまで行き渡っています。Thin Ethernetの先端が、いわゆる情報コンセントと言われる形式で各部屋に見えています。この情報コンセントにワークステーションを接続しCNSに入ることになります。

大型汎用コンピュータ(メインフレーム)を利用する場合と異なる最大の点は、各個人が作業する場所がただのキーボードとディスプレイの組み合わせの端末(それ自体何もしない)ではなく、それぞれのワークステーションが主役であるということです。すなわち、分散環境(分散システム)と称される所以です。

CNSに接続が可能なワークステーションは、一定の約束事(Protocol)がサポートされている

機種であれば、基本的に大丈夫ということになります。SFCではこの接続のProtocolにTCP/IP(Transmission Control Protocol/Internet Protocol)を標準として採用しています。一定の規格に合ったものであれば、電気コンセントの先どのような形態の電気器具を取り付けても良いというと同様であると理解して頂ければ良いと思います。

各ワークステーションは高速のCPU(演算装置)を持ち、マルチタスク処理(例えば統計処理を行いながら電子メールのやりとりを行う等複数の仕事が同時に可能)や、マルチユーザ処理(ネットワークを介し1台のワークステーションを同時に複数の利用者が利用できる)を行います。ですから、必要な資源(ハードウェア、ソフトウェア)をネットワークで何処からでも利用することが可能となるわけです。

ただし、分散環境とはいえ利用者が特定のワークステーションの記憶装置に情報を蓄積すると、何時も決まった機器(場所)でなければ作業がしづらくなるということになります。特に学生は、その都度異なる場所でワークステーションを利用するのが前提となります。従って、サーバという概念が必要となりますが、SFCでは、利用者のアカウント(個人情報)、プログラムやデータ、電子メール等を集中的に管理しCNSに接続されているどのワークステーションからでも同じ環境で利用できるようになっています。

ここで、SFCに設置されている機器について簡単に説明したいと思います。現在約450台強のワークステーションと2台のメインフレーム、10数台のパソコン(Macintosh)が導入されています。大まかな内訳は教育用(特別教室)に約240台、メディアセンターのオープンエリアに約100台、研究用として約110台、事務用に約10台となっています。ワークステーションの機種は様々で、いわゆるマルチベンダすなわち複数のメーカーの製品を組み合わせる方式を採用しており、各メーカーの得意な所を集結した恰好となっています(運用・管理は非常に大変ですが)。

ハードウェアメーカーだけでも、ソニー、富士ゼロックス、オムロン、富士通、IBM、サンマイクロシステムズ、YHP、ディアイティ、島津理化器械、シリコングラフィックス、三菱、ヤマハ、キャノン、デジタルコンピュータ、日立、東芝が参加しており、ソフトウェアハウス等を加えると23社を数えます。ただし、教育用はあまり多くの機種が混在すると問題もあり、ソニー、オムロン、YHPのワークステーションを主に使用しています。

また、約半数の学生が所持しているラップトップコンピュータ（ノートブックパソコン）をCNSに接続するための受け口も2種類用意されています。1つはキャンパス内に設置されているラップトップ教室で90台（30台分×3教室）の接続が可能です。もう1つは16回線分の電話回線の受け口で、自宅等からの接続が可能です。この利用は盛んで通常時間帯は勿論、深夜でも数本は利用されている状態で、回線数の増設が必要となってきた状態です。SFCでのラップトップコンピュータは、時間と場所にとらわれずに利用が可能であることから、補助的な機材としてキャンパスが推奨しており、主にレポート作成（文書処理：スタンドアロンでも可）、遠隔地からの電子メールの読み書き等に利用されています。

最後にSFCにおけるメインフレームの役割について少々触れてみたいと思います。SFCには一般利用のためのメインフレーム専用端末は存在しません。全て研究室に設置されているワークステーションからCNSを介して利用することになります。メディアセンター内にIBM 3090-17Jと富士通M-770/10が導入されていますが、その主な分担で見ると、IBM 3090はSFCの研究・教育上有効なデータベースの構築、アプリケーションの搭載が予定されておりCNSへのデータベースサーバとしての位置付けとなります。一方M-770は三田、日吉地区の大学計算センター設置メインフレームとキャンパス間ネットワークで結合されており、全塾統合図書システムの搭載による全キャンパスへの図書情報サーバとしての機能、事務シ

ステムでの他キャンパス連動機としての機能と役割を担うこととなります。

### Ⅲ. おわりに

冒頭で述べたように、SFCは様々な試みに挑戦し毎日が言わば開拓の連続であると思います。これは、単に新しいキャンパスであるがゆえの宿命というよりも、他の模倣ではない独自の良いものを創り出そうという気概がキャンパス内にあふれている現れであると思います。CNSについてもSFCの研究・教育がより充実したものとなっていくよう、そのバックボーンとして育ていかなければなりません。SFCの卒業生が社会の中心で活躍する日を励みにCNSの運用に係わるものとして微力ながら尽力したいと思っています。なお、本稿ではCNSの概要に止まりましたが、各部分の詳細は湘南藤沢メディアセンターにお問い合わせ下さい。

## FAINSの紹介

かねこやすき  
金子康樹

（湘南藤沢メディアセンター）

### Ⅰ. はじめに

湘南藤沢メディアセンターでは、キャンパス開設以来、IBM総合図書館システム（Dortmund, Leuven and Waseda Library Information System）を慶應義塾用にカスタマイズしたFAINS（Fujisawa Academic Information Network System）という名称のオンライン・トータル・システムを用いて、図書館業務処理を行っている。本稿では、このFAINSシステムの機能の概略を説明し、将来展望について若干述べてみたい。

### Ⅱ. システムの概要

#### (1) システム構成

図1は、現在のシステム構成図である。ホストマシンは、IBM 3090-17Jで、主記憶容量は、64MBである。ソフトウェアは、VM、SPの配下で、

MVS/ESA と MVS/370 という2つのオペレーティング・システムが動いており、このうち MVS/370 上で FAINS 本番用、テスト用、そして、学術情報センターとの接続のための ACIS/GW という3つの CICS が稼働している。

FAINS に接続している端末は、業務用として15台、利用者検索用として13台が稼働している。またこれ以外に、三田情報センター整理課に業務用端末が5台設置されていて、専用回線（9600 bps）でメディアセンター内のホストと接続されている。

外部との接続については、東京大学の大型計算機センター経由で、学術情報センターと接続されている。回線は、東大まで専用回線（9600bps）で接続し、そこから N-1 ネットに入っている。

#### (2) 導入の経緯

さて、ここで FAINS 導入の経緯について簡単にふれておきたい。

そもそも IBM 総合図書館システムはドイツの Dortmund 大学で開発されたものである。これに、利用者用機能・逐次刊行物管理機能を、ベルギーの Leuven 大学で追加したものが、世界的に DOBIS/LIBIS System と呼ばれるものである。

これに、早稲田大学と日本 IBM 社が共同で、日本語機能を追加した。これは、DOBIS/E と我が国で一般的に呼ばれているシステムであるが、その後、IBM と早稲田大学がそれぞれ独自に機能を追加した結果、IBM 社の提供する DOBIS/E と、早稲田大学の WINE との間にやや乖離が見え始めているというのが現状である。

湘南藤沢メディアセンターでは、このうち、WINE を導入することを決定した。そこで、早稲田大学の全面的な協力のもとに、キャンパス開設直前の、1989年12月～翌年3月までの間、WINE の慶應義塾大学版へのカスタマイズを行った。主な変更点は、

- ・マップの修正
- ・コードテーブルの修正
- ・コンバージョンソフトの修正

などであった。この修正作業の後、創設時の図書

データ（約5万5千件）をロードした。以上は、すべて早稲田大学のマシン環境を借りて行った作業である。

さて、キャンパス開設と同時に、早稲田大学にて作成した環境・データを、湘南藤沢キャンパス（この時点におけるマシンは、IBM 9377であった）に移行したわけであるが、入学式を数日後に控えた中での作業であったため、担当者全員がかなり張り詰めた空気を味わったことは、まだ記憶に鮮明である。

### Ⅲ. FAINS の機能

#### (1) 収書業務

現在、メディアセンターに於ける発注業務は、書店が行うのが殆どである。業務担当者は、まずゲートウェー機能を使って学術情報センターにアクセスし、選書リストにあるデータを検索する。学術情報センターのファイルでヒットすれば、これを FAINS にダウンロードする。ヒット率は、8～9割程度であり、このデータを使うことによって、書誌作成の手間がかなり軽減されている。

さて、次に担当者は、FAINS の収書業務機能を使って、メディアセンターの所蔵を確認する。ここで、所蔵している、または発注中である、という重複チェックが容易に行える。重複していないことが判った資料については、学情データを利用して発注データを作成する。また、複本購入の場合には、既存の書誌を利用して発注データを作成する。この様に、できる限り発注時から完成に近い書誌を維持することによって様々なトラブルを減らす様になっている。また、書誌の流用ということに関して、DOBIS/E には書誌プールという機能がある。これは、JAPAN-MARC 等の書誌を蓄積しておき、発注や目録等でその書誌を利用する機能であるが、メディアセンターでは現在この機能は利用していない。発注票は、レポート出力機能があり、バッチ処理で翌朝に前日分を打ち出している。

現物が到着すると、受入業務を行うことになるが、これは検収後に受入冊数・配架場所等を選択



IBM 3090-17J Main Memory:64MB Ext. Memory:64MB

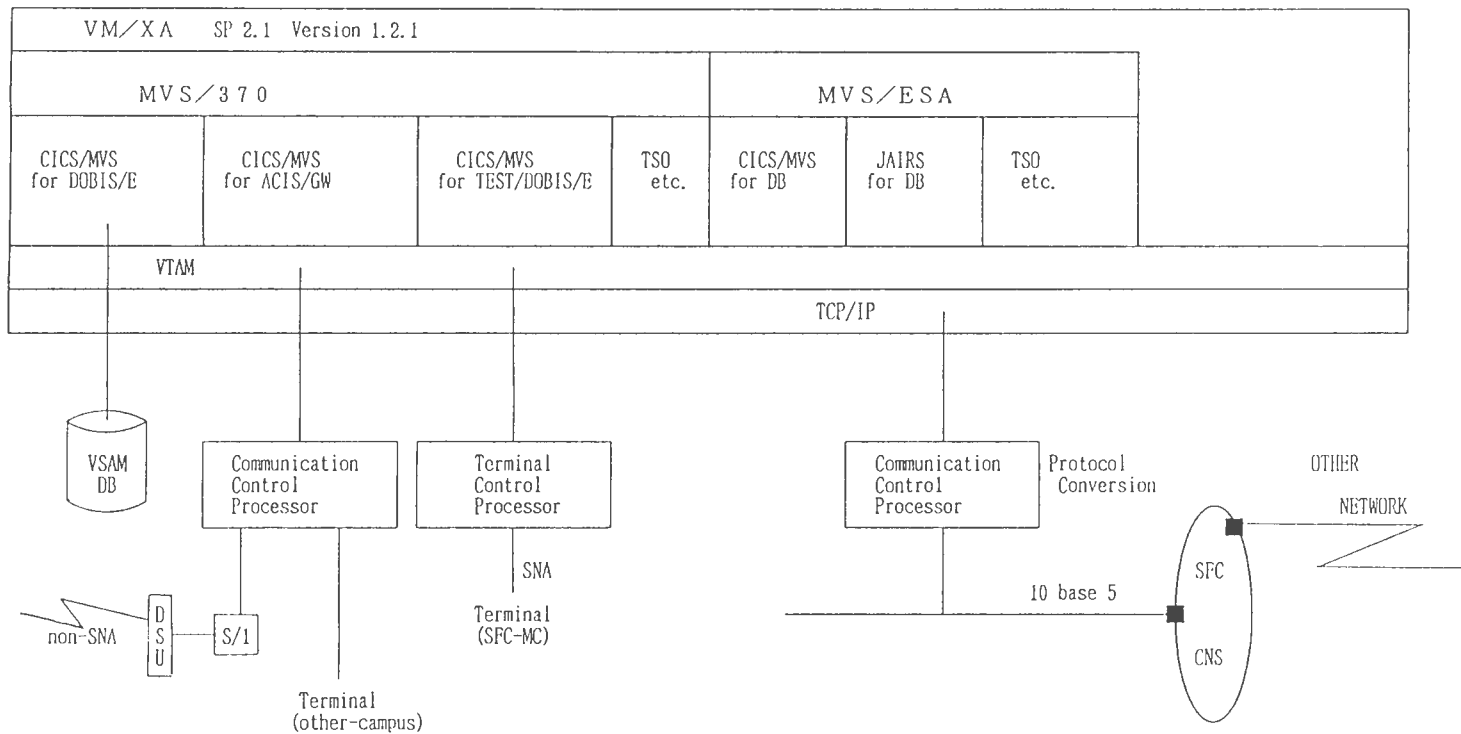


図 1:IBM 3090-17J システム構成図

し、登録番号を付与する作業である。受入作業には、現物の受入と請求書の受入がある。請求書が到着した段階で、請求書情報を入力し、それが請求書支払処理を行うと初めて予算に反映する。したがって、請求書支払処理を行わない限り、実際の支払予算が明確に把握できないのであるが、この請求書支払処理が、発注ファイル・業者ファイル・請求書ファイル・予算ファイルを全件に渡って操作するため、かなり処理時間がかかる。我が国に多く見られる様な単年度会計制度をとっている機関には、かなり重たい作業と言えよう。

#### (2) 目録業務

受入の済んだ資料は、目録作業へと回される。発注時に書誌データがある程度作成されているので目録作業は、その修正ということになる。所蔵データもこの段階で付けられる。メディアセンターでは、簡略木寺式の請求記号を採用しているが、この為には請求記号内の著者記号の著者名を必ず確認する必要がある。同一分類番号のなかの資料が数多くある場合には、面倒な作業となる。

FAINS における書誌データは、ドキュメントファイルとアクセスポイントファイルに大別され、ドキュメントファイルには、書誌番号・固定長データ・注記データなどが記録され、著者名や書名などのフィールドには、アクセスポイントファイルのデータのポインタが記されている。書名・著者名・件名・出版者・分類番号・ISBN・全国書誌番号等は、全てアクセスポイントとなっている。従って、著者名等は、アクセスポイントファイルにすでに存在していればそれを使用すれば良く、自動的に典拠ファイルとしての機能がある程度果たすことになるのだが（相互参照機能等もあるので、典拠としての機能は満たされる）、学情からのデータのコンバージョンプログラムに問題があり、同一著者が泣き分けられることがままあり、これの修正に労力をとられるというのが現状である。

#### (3) 逐次刊行物業務

逐次刊行物の書誌は、図書と同様にできる。発注は、タイトルごとに発注データをおこすことになる。但し、大部分の和雑誌などは、請求が毎月

あるため、この場合には毎月発注作業を行うことになる。

チェック・イン作業は、各雑誌タイトルごとに刊行パターンを登録できるようになっていて、このパターンを基に、システムが次号のデータを自動的に作成してくれる。これによって、チェック・イン作業は、機械的に処理できる。

製本処理も、各タイトル毎に製本管理データを登録して、製本準備リストを基に製本作業を行う。また、業者から納品された製本雑誌を受け入れると、自動的に製本単位レコードが作成され、各号データは消去される。

#### (4) 蔵書管理（閲覧業務）

貸出は、利用者の種別と配架場所ごとに貸出期間・制限冊数などが設定できるようになっている。但し、現在メディアセンターでは、貸出冊数に上限は設けていない。貸出作業自体は単純で、IDカードの利用者 ID（バーコード・OCR 共可）をスキャナーで読み、その後図書の BOOK-ID をやはりスキャナーで読む。一度に 9 冊まで処理できるようになっている。返却は、BOOK-ID をスキャナーで読むだけである。

さて、この蔵書管理業務は、他地区で使用している CIRSYS にくらべると、柔軟すぎるくらいがある。例えば、返却時に、違う人の借りた図書もまとめて処理できるため、延滞料金を徴収する際に、誰が借りているかを一々確認する必要が生ずる可能性もある。また、何らかの事情で、返却処理されないままの図書が書棚にあった場合、それを他の人が貸出にきた時には、貸出中であった、ということはおかしくても誰が借りていたかは判らなくなってしまう。この辺りのタイミングがかなり使いにくいというのが正直な感想である。

#### (5) OPAC 機能

湘南藤沢キャンパスでは、UNIX によるキャンパス・ネットワークを構築しており、学生達は、ワークステーションを利用して情報を処理・活用している。したがって、コンピュータに対する取り組みは積極的であり、FAINS 端末も柔軟に使いこなしている。ユーザーフレンドリーな UNIX

X マシンを巧みに操る彼らにとって、FAINS は、マン・マシンインタフェースの悪いシステムと写っている様である。特に、入力モードを意識しながら操作するというのは、非常に煩わしいと感じている様である。

#### IV. FAINS の管理について

つきに、FAINS を利用していく上で必要な様々な作業について若干述べておきたい。

##### (1) リオーガナイズ作業

FAINS は、非常に検索時のレスポンスが速い、という点に特徴がある。この速さを実現しているのは、FAINS のファイル編成が VSAM 方式であることに起因しているが、VSAM であるが故に管理に手がかかるということもある。それが「リオーガナイズ」である。VSAM ファイルの中にデータがある程度増加すると、物理ブロックのオーバーフロー領域が大きくなってレスポンスが悪くなったり、また、制御域ごとの空き制御インターバルが減少し、ファイルがあふれる危険性がでてくる。そのため、時々ファイルのオーバーフローを減らし、空き制御インターバルを均一化する必要がある。これが「リオーガナイズ」作業である。現在、登録書誌数は約8万件であるが、この書誌をリオーガナイズするのに、約5時間という時間を要する。検索の代替手段の無い現状では、開館時間中にこの作業を行うことは難しい実情にあり、職員が、深夜まで作業することもある。

##### (2) バックアップ作業

現在、FAINS のバックアップは、毎日行っているが、障害時に、元の状態を復元するのに、最も有効な手段は前述のリオーガナイズである。そのため、リオーガナイズに使用できる形でバックアップをとる必要がある。したがって、現在メディアセンターでは、アンロード形式のバックアップを取っているが、これに要する時間は、約1時間である。契約オペレータが日々行っているのだが、これも多大な労力と言えよう。

#### V. FAINS の CNS からの利用

ところで、前にも述べたが、湘南藤沢キャンパスには UNIX によるネットワークが構築されている。各研究室や、キャンパス内の至る所にワークステーションが設置され、それらはすべて、ネットワークでつながれている。従って、FAINS システムをネットワークに接続するということは、研究室等からの蔵書検索のためには必須の条件である。

そこで昨年来、教員・メディアセンター・日本 IBM が共同で、FAINS の UNIX 対応を進めて来た。IBM のホストマシンに UNIX のワークステーションからアクセスするためには、IBM の通信プロトコルである SNA と UNIX 系の通信プロトコルである TCP/IP との信号を受け渡しする必要がある。従来、tn3270 というエミュレータが、UNIX 上にあり、この機能を果たしているのだが、これは日本語サポートしていない。従って、今回の開発は、漢字対応の tn3270 を作成することにある。これが出来ることによって、研究室からのアクセスは勿論、自宅からの検索も可能となるものである。この KULIC が発行される頃には、本格稼働しているはずである。

#### VI. FAINS から KOSMOS へ

さて、最後に現在全塾で開発中の KOSMOS システムへの移行について触れておこう。

KOSMOS システムが完成した時には、FAINS 上で構築しているデータを移行することになるが、問題となることが幾つかある。

一つは、データ移行に関することである。FAINS には、他のシステムとのデータ交換のための DMARC OUT という機能があり、これを用いることによって、FAINS 上の書誌・所蔵・発注などのデータは全て、抽出することができる。しかし、このデータは MAB1 と呼ばれる、ドイツの MARC に準拠しており、これは LC-MARC や JAPAN-MARC とは、かなり性質の異なるものである。これを KOSMOS 側のデータフォーマットに変換するためには、かなり慎重に行う必

要があると言えよう。

二つめの問題点は、FAINS 上で実現した、研究室等からの検索を如何に実現するかである。サービス機能を低下させることなく移行するためには、技術的にクリアしなければならない問題が数多く残されている。

もう一つの問題は、移行のタイミングである。現在の環境化で、予算管理や、貸出等のデータが常に動いているため、その移行に関しては、綿密な調整を図る必要があるといえよう。

こうした諸問題を解決するためには、館員の詳細な打ち合わせは必須であり、安易な妥協は許されないと考えられる。

## ライブラリー・サービスの現状と展望

まつもと かず こ  
松 本 和 子  
(湘南藤沢メディアセンター)  
係主任

### 3

#### I. 始めに

メディアセンターは、従来の計算センター、情報センター機能と新たに教材開発機能の3つを担う組織としてスタートした。新しい教育コンセプトと新しいコンピュータ環境を研究、教育の場に生かしその中心となるのがメディアセンターの長期的ビジョンである。

実際に担当するスタッフがメディアセンターの仕事に取りかかったのは、新学部開設の約1年前である。これは決して十分な準備期間ではなかったように思う。全塾図書館システムの開発が並行して湘南藤沢の仕事に大きく食い込み、数少ないスタッフで2つの大きなプロジェクトをこなしていくのは大変なことである。まして母屋の建築については現在のスタッフが関知する以前に殆どが決定され、大幅な改善が出来ない状況で不満を抱きながら準備を進めるのは楽しい仕事ではなかった。

しかし、計算センター系の職員数の少なさと、従来のメインフレームから UNIX によるキャン

パスネットワークの構築、管理へという大幅な変更があったことと、全く新しい教材開発という2つの部門に比べれば、情報センター系の仕事というのは、過去のノウハウが現場にすぐ反映できるというメリットがあったわけで、その点では現在のメディアセンターの図書館機能の稼働状況をみると、反省しなければならない点もかなりあると思われる。

#### II. テクニカル・サービス

テクニカルについては、選書、発注・受入、目録・装備の3点について述べようと思う。

##### (1) 選書

選書はカタログによる選書が中心で、見計らいやブランクオーダーは殆ど行われていない。新刊書の選書は定期的に回覧を行っている。尚当センターの蔵書は、文部省の設立基準を満たすために主に三田情報センターの課長クラスで選書された資料と三田からの移管資料である約6万冊がそのメインとなっている。ただし年鑑、白書、統計等が一般書に選定当時の2、3年分が混ざっているだけで継続購入されていなかったり、洋雑誌は1984年以降についてマイクロで購入したが、和雑誌は1989年以降のものしかないといった状況で、とても研究・教育に充分であるとはいえなかった。そこで、平成2年度には一般書架からの年鑑、白書、統計を抜き出して、別書架に動かす作業を行い、平成3年度に引き継いでこれらのいわゆる逐次刊行物の継続購入分の検討、バックナンバーの補充を重点的に行ってきた。

選書基準は価格的に単価5万円以上のものについてはセンター内の選定会で、30万円以上のものは教員を含めた図書委員会で検討することになっている。

また指定図書や、教科書、湘南藤沢所属教員の著作についても網羅的に収集することが決められている。教員著作については1部を寄贈、1部を購入という形で2部をメディアセンターに備えたいと考えている。

湘南藤沢の研究・教育のサポートをする基本コ

レクションの更なる充実に加え「日本関係外国語文献コレクション」, 「SFC 発マルチメディア・アーカイブ」(いずれも仮称)といったコレクションを創っていく予定である。「マルチメディア・アーカイブ」は、コンピュータ・グラフィック、コンピュータ・ミュージックといったものを含めSFCの研究者、学生によって制作される作品、教材について収集・保存することを目指している。

### (2) 発注・受入

FAINSによる機械化により、従来の仮納品書の添付の代わりに、書店が直接発注・受入データをFAINSに入力する体制を取っている。このため取り引きを希望する書店は専用のスタッフを派遣してFAINSへの入力作業を行わなくてはならない。目録データは学術情報センターからの流用データが殆どで、オリジナルカタログが必要なものは、書店が作成したデータを専任がチェックする形になる。なお重複調査も書店が行っている。予算管理の面では発注金額に上限があるので、発注時点でのチェックは簡単だが、支払いについては絶版あるいは年度越しのデータの管理など十分にできないため、請求書の金額を手計算で計算するといった作業が行われてきている。これはいずれ全塾図書館システムへ移行することがわかっており、わざわざFAINSシステムに修正を加えることは無駄なので若干の修正があってもこのままの状態であろう。現時点で専任のスタッフを派遣している書店は4つほどしかない。他の書店からの購入分については専任が発注・受入を行っているが、数は多くないし、係員の数からいっても他書店との取引を拡げることは負担となりかねない。全塾図書館システムが稼働すると他地区で取引のある書店にオリエンテーション等が行われるであろうから、取引書店の数も増える事だろう。

### (3) 目録・装備

目録は発注時点でその作業の殆どが終了しており、目録はその点検と、分類と請求記号の付与が中心となる。現在この作業は専任職員と、書店への委嘱でまかなっている。目録基準を整備しながら目録を作成しているが、創設時の目録にはいわ

ゆる「ゴミ掃除」の必要なデータが多い。しかしここでも過去に遡る作業には手の回らない状態である。「気持ちのワルイ」データに目をつぶって目録はとられているのである。装備・配架については、非常勤嘱託と書店への委託、或いはメディアセンターで働く数名の学生アルバイトが担当している。尚三田情報センターからの移管資料については書架管理を一本化するため請求記号を変更している。今年度中には完了の予定である。

### Ⅲ. パブリック・サービス

湘南藤沢はパブリック経験者がいないわけではないが、それらの人材の殆どがシステム開発にまわってしまっている。他のスタッフは人員が少ないことから、各自の仕事の区切りが曖昧でパブリックもテクニカルもこなしていかなければならない。このことと建築上事務室から離れた2つのカウンターを維持しなくてはならないことがサービスの散漫化、部内の意思決定や情報流通の停滞も招いている。利用者からは対応の不手際、遅さについて不満の声が大きい。なんとかサービスを軌道に乗せるように、個人の努力も勿論必要だが、組織、人事の両面での根本的な改善が望まれる。ここでは閲覧・貸出、レファレンス、24時間開館、藤沢市民図書館との相互協力の4点について紹介したい。

#### (1) 閲覧・貸出

全面開架であることは勿論であるが、メディアセンターの図書館部門は建物の2、3階部分を占めるだけで、収容冊数も中規模の公共図書館並である。しかし従来の閲覧機能に加えてスタジオという新しい機能を持つことになった。現在はスタジオの利用のコントロールをするに止まっているが、将来的には機械操作指導などの人的援助も行っていかなければならないだろう。またオープン・エリアの語学学習セクションは、パブリック・スペースでありながら授業が行われている。授業の前には利用者の追い出しも行わなければならない。ワークステーションの数は学生1人に1台あるわけではなく、パブリック・スペースにあるものへ

---

の利用頻度はとても高い。利用者にメディアセンターを使ってほしいが、授業の時には出て行ってほしいという矛盾は追い出しを余計辛い仕事にしている。

## (2) レファレンス・サービス

新学期は、引っ越しがぎりぎりまで延びたためオリエンテーションの準備は十分にできなかった。湘南藤沢は春、秋両学期に新入生を受け入れる。彼ら全員に対して行われるオリエンテーションでは、メディアセンターも10分程の時間を貰い簡単な紹介をしている。それに加えて、春学期の始めには1週間ほど、センター内ツアーとFAINSのガイダンスを実施した。専門課程が本格化する平成4年からは、研究会単位への専攻に応じてのガイダンス等を実施したいところだ。

通常のレファレンス・カウンターへの質問はまだあまり多くない。宿題の多いキャンパスではあるが、資料が指定されていたり、グループ学習を勧められているため友達同士で相談しながらという光景が良く見受けられる。まだレファレンスの利用法を学生が知らないこともその原因の一つだろう。

レファレンス利用法等を知らせるためにも「資料検索法」のような授業にこちらが協力をしていない(できない)のは残念なことで、授業への協力が取れる体制作りが望まれる。またコンピュータ資源を生かして、ジェネラル・レファレンスならエキスパート・システムの考案も検討しなければならないだろう。これが実現すれば、専任はサブジェクト・ライブラリアンとして、SFCの研究・教育に役立つ選書や、学生への利用指導に力を注ぐことができるであろうし、根本的サービスの底上げも可能である。加えてCAIなどの開発にセンター職員が参画できるようになると面白いことになると思う。

## (3) 24時間開館

SFCは、24時間キャンパスを謳っている。これは事前に届けを出せば、24時間キャンパスに残留して良いということで、全てのサービスが利用できるというわけではないし、いつ来てもすぐ使

えるというわけではない。事務室も食堂も閉まっている。キャンパスの中には仮眠する場所もない。今のところレポート提出のため遅くまでコンピュータを利用するのが目的だ。メディアセンターは建築上24時間開館を想定しているが、夜間出入口にはブックディテクションがない、カウンターに施錠が出来ない等無人で開けるには問題が多い。しかし有人で開けるとなると人の手当てが難しく、利用者の安全の確保、経済性も含め、実現までにはいろいろな調査、研究が必要であろう。

利用者のマナーが残念ながら決して良いとは言えないため24時間開館を躊躇してしまうのも、貴重なコンピュータ、資料を管理する者にとって仕方のないことではないだろうか。

## (4) 藤沢市民図書館との相互協力

SFCの理念の中に地元との共存、開かれたキャンパスが謳われている。キャンパス内公園の公開、七夕祭、運動会等の地元住民参加のイベントが行われている。その一環として藤沢市民図書館との相互協力が進められている。検索端末を相互に置き、お互いの利用者が資料の検索を自由にでき、連絡車により館間貸出しを行う相互協力と、藤沢市民のメディアセンター利用を認める2つの形態で行われる。メディアセンター利用に関しては、研究機関に属さない市民で研究目的を持ち、メディアセンターの蔵書を理解し、規則を遵守してくれる方に、利用券(IDカード)を発行してその期限内であればメディアセンターを自由に利用してもらうものである。もちろん、SFCの利用者の利用が優先され、試験期等は利用を断ることを了解事項としているし、他キャンパスの図書館の利用は含まれていない。

メディアセンターは、その蔵書が充分でないことから、他大学との相互協力も積極的に行っていくつもりである。現在のところは、他キャンパスの図書館、早稲田大学との相互協力で90%以上がまかなえているが、借りるばかりといったのが現状である。

藤沢市民図書館は、分館もあわせれば57万冊というコレクションを持っており、教養課程の学生

をかかえる SFC としてはこの相互協力もこちらからの借りが多くなるのではないだろうか。

#### IV. 終わりに

走りながら考えるのは、日本人にとって簡単なことではない。それもただ真っ直ぐ走るのではなく、色々な障害が予想しないところで待ち受けているし、ゴールもよく見えない。漠然とした理想と希望が頼みの綱だが、今は苦しいから、歩みが遅くなる。大きな理想をここでもう一度企画書に書き直し、計画を練り直すことも必要ではないだろうか。メディアセンターのライブラリーサービスを早く多くの利用者に享受してもらい、良い評価がもらえるようにしたいと願っている。

### メディアセンターに期待すること

#### —日本関係外国語文献コレクション—

うめ がき みち お  
梅 垣 理 郎  
(総合政策学部教授)

SFC が開校してから 2 年目、今は学生・教職員を問わず、開校当初のいわば「躁」の状態が徐々に冷めつつある時期であるようだ。いざ一步を踏み出してみれば、その先に続く数歩の重みのみが伝わって来るといふ思いが深いからである。

その先には慶應義塾の一環としての SFC、しかもその慶應義塾のいわば先兵としての SFC という二重の位置付けを安定させ、さらに発展させていくという容易ならざる役割が待ち受けている。国際化という日本全体を洗う誤解を招き易い潮流とのツメもある。さらには、占領改革後半世紀近くを経てようやく蠢動を始めたかに見える大学制度の基本的な見直しも SFC を含む広い意味での教育・研究環境を規定するものとして看過するわけにはゆかないのである。

端的に言えば SFC を巨大で複雑な全体の一部として位置付け、そこで SFC のアイデンティティを刻み込むという作業はまだ始まったばかりだと

いえる。

ここで紹介する外国語で出版された日本関係の文献 (Japan in Foreign Languages) の収集 (略して JiF) もそうした作業の一環として考えてよい。研究及び教育環境の整備をすすめる拠点の一つとして多様な機能を任されている SFC メディアセンターの活動の中で JiF は決して大きな規模のプロジェクトとはいえない。しかしその意図するものの意義、完成に要される様々な配慮などを考慮すると決しておろそかにはできない作業の一つである。

JiF は文字通り日本語以外の言語で出版された日本関係の文献を SFC メディアセンターに集積することを目的としている。とはいえ、時間と経費の都合さえつけば事足りる作業ではありえない。

まず対象となる語種の多様性がやっかいな問題を突きつける。ここでは比較的出版事情が知られておりしかも近世以降の日本のあり方に深く関与してくる英・独・仏・蘭・露などの言語による出版物だけに収集を限らない。中・韓の東アジア言語による出版物も含まれてくる。従って、出版物の質の高低をある程度まで判断しうる最小限度の専門知識が必要となろう。またこの専門知識は出版側の歴史的背景、対象となる日本の状況、さらには筆者の日本との交流の背景の把握までもが含まれた多様な内容を持つものでなければならぬのである。

時間的にどの時期に特定化して文献を集積すべきなのかということも多くの問題を含んでいる。19世紀中盤以降に限るべきか、20世紀以降に限るべきか、といった判断も単に予算的考慮のみで下すわけにはいかない。時代の特定化 (時代区分) はそのまま歴史を動かす力の性格について特定の評価を下すことである。そうした時代区分はコレクションに含まれるべき文献の性格を決定してゆくことになろう。ひいてはコレクション全体の性格を左右することになりかねないのである。ここでもまたある種の専門知識 (国際同時代史的知識といったようなものを含めて) が不可欠となるのである。

---

第三に三田の図書館（福澤研究センターも含め）との整合性というテクニカルな面も決して軽視することはできない。三田の膨大な図書は SFC にとっても欠くべからざる知的資産である。しかし、JiF の存在は単に三田を補完するところにあるのではない。三田という資産を前提にして累積効果の幾何級数的な倍加を意図したい。これが基本的な立場であるとすれば、重複を辞さないとするだけの根拠を明確しておくことは自明であろう。

順序が逆になってしまったかもしれないが、このように繁雑で、担当者の緻密なモニターを必要とするプロジェクト全体の価値を一体どこに求めるべきなのか。

こうして集積される知識の活用から可能となるものを考えてみるとよい。「外」の目に映り「外」のコトバで描き出される「日本」との接触はそのまま「外」を識ることにつながるのである。外の目に映る「日本」は、また、そうした「目」自体に極めてダイナミックに働きかける日本の変遷を追うことに他ならない。高々 2~3 万冊の小規模のコレクションではあるが、このように JiF 全体が比較同時代史のための一つのテキストとなりうるといえるだろう。

また国際化が声高に叫ばれはじめて 10 年を越えているが、それに呼応する試みの内実はいたずらに日本デナイものを追い求めるだけに終わっている。極端な言い方をすれば形成期・成熟期を通して「非日本」的素材の占める割合の多い人間に国際人を見るが如きである。JiF が提供する知識体系はこうした潮流に抗するためのストイシズムの基礎素材となりうる。慶應の人間に限らずとも稀有の自己検索の場を提供するのである。

無論こうした知識体系の恩恵は日本人にのみ享受されるわけではない。外国人の日本研究者なども得るところは決して少なくないはずである。国外に出て研究活動に携わるとよく気が付くことであるが、現実には調査を進めていて意外な障害は使い慣れた自国語による文献が手の届くところに少ないということである。この点多種の言語で出版された日本関係の文献が一ヶ所に集積されている

JiF は、日本で日本研究を進めようと諸国から東京周辺に集まる外国人研究者にとっては抗しがたい魅力となるのである。そして JiF を求めて SFC に参集するそうした人々が私どもにとってかけがえのない資産となることも付け加えておいていだろう。

「日本」という媒介を通して表現される、あるいは競合する世界観・歴史観を理解することで、極めて今日的とされるような対外政策的課題が実は意匠を異にしてすでに過去の日本で何度か経験されていたものであった、ということもあろう。だとすれば、JiF の効用は単に地域研究者に限られることもないのである。

このように羅列してゆけばキリのない JiF の価値であるが、要はこのコレクションが作り出す世界に利用者がどのような学習効果を生ませるかであろう。一人でも多くの人間に足を踏み入れてもらいたいものである。

## CNS サービスの概要と展望

もちだひろと  
持田裕人

(湘南藤沢メディアセンター)

湘南藤沢キャンパス（SFC）では平成 2 年 4 月以来、教育研究用の本格的なキャンパスネットワークシステム（CNS）を築いてきました。SFC では究極のコンピュータ利用環境を構築し、それを教育・研究の支援、図書情報の管理とサービス、事務管理などあらゆる SFC の活動において有効に活用していくことを目標にしています。それでは CNS の特徴から説明していきましょう。

第一の特徴としては、ネットワークとワークステーションからなる分散処理系として、大規模にしかも本格的に構築されたシステムであるということがあげられます。このシステムは、エンドユーザの意思をもっとも尊重することができるため、今後の計算機利用環境の主流をなしていくものと思われま。



第二の特徴としては、電子文房具としていつでも誰でもが利用できる環境を提供していることがあげられます。SFC のメンバーは学生、教職員にかかわらず、日常的なキャンパスライフの中でこのネットワークシステムを電子文房具として使うことができます。また、学生一人一人が自分自身のラップトップコンピュータを持つことにより、この環境の有効利用をはかっています。

第三の特徴としては、ネットワーク社会の経験ができることがあげられます。本格的なキャンパスネットワークシステムを利用することは、すなわち将来の情報社会を先取りすることに他なりません。SFC の設立の趣旨にあった人材を養成することにもつながります。

第四の特徴としては、基本ソフトウェアとして UNIX オペレーティングシステムを採用していることがあげられます。高機能でかつオープンアーキテクチャを持つこのオペレーティングシステムは、柔軟なシステムを構築することができます。また、UNIX の上では、フリーまたはパブリックドメインのソフトウェアを利用しやすいことから経済的だともいえます。

次に CNS の提供するコンピュータ利用環境について説明します。

現在約 400 台のワークステーションで、次のような環境が標準的に提供されています。まずユーザーインターフェースとしてマルチウィンドウシステムが用いられており、その上で日本語文書処理、電子メール、電子ニュース（電子掲示板システム）が利用できます。それぞれの機能は次のソフトウェアを使用しています。

- マルチウィンドウシステム (X Window)
- 日本語文書処理 (Egg/Nemacs/LATEX)
- 電子メール (MHE)
- 電子ニュース (GNUS)

学生はこれらの機能を情報処理言語などコンピュータ関係の科目で使用するのはもちろんのこと、政治学、心理学、文化人類学、外国語などの科目でもレポート作成に使用しています。

また、これらの環境は自宅からの利用も可能となっています。現在、2400bps のモデムが16回線設置されており、学生及び教職員は自宅にある Dyna Book、PC9801 などのコンピュータから CNS にアクセスすることができます。

その他、ラップトップコンピュータを SFC に持参して直接 CNS にアクセスすることもできます。現在、3つのラップトップ室に合計90個の情報コンセントがあり、そこに持参したコンピュータを接続すればワークステーションの端末としての使用が可能になるわけです。レポート提出日が近づいてワークステーションが足りない時などに利用されています。

最後にメディアセンターの CNS に対するサポート体制について説明します。

利用者への直接的なサービスとしては、まずコンピュータコンサルティング及びホットラインがあげられます。学生コンサルタントがコンピュータに関する相談に応じるとともに、CNS のシステムトラブルに対応するために内線電話によるホットラインを開設しています。現在ホットラインの受付件数は、一日平均で約30件もあります。次に各種利用登録申請の受付、講習会の開催があげられます。現在 CNS、IBM 及び富士通のメインフレーム、メイリングリストのそれぞれ利用登録申請を受け付けており、CNS の利用登録者数は約2300名にもなっています。講習会については、平成2年12月に学生を対象とした Dyna Book 講習会を開き、公衆回線の利用方法、ファイル転送方法などを教えました。その他、以下の様な業務を行い CNS をサポートしています。

- ソフトウェアの環境整備
- ハードウェアの整備保守
- データのバックアップ
- 利用者への課金
- ドキュメントの作成整備
- メインフレームの起動および停止
- 停電対応 (WS の停止および起動)
- 開発作業の発注管理

---

また、平成3年10月からはメディアセンター1階事務室が「CNS サービス窓口」としてオープンし、CNS に対する要望や相談の窓口としても機能をはじめました。これからは、利用者の要望も取り入れたかたちでサービス体制の確立をはかっていきたいと思えます。

## メディアセンターにおける教材開発 サービスならびに AV 製作機能について

きの した かず ひこ  
木 下 和 彦

(湘南藤沢メディアセンター)

メディアセンターでは、塾内の他地区という情報センター、計算センター以外の機能として教材開発ならびに AV 製作機能を有しており、これらを生かしたサービスを行っています。こうしたサービスは、他地区では別の部署で行われていたり、あるいは全く行われていなかったサービスです。メディアセンターでもこれらのサービスはまだ始まったばかりなのですが、現在行っているサービスの状況とこれらの展望などについて、以下、若干ながら説明していくことにします。

### I. 教材開発サービス

メディアセンターでは新棟が完成した平成3年4月から、教員を対象とした教材開発サービスを開始しました。これは従来学事で行っていた授業用の資料作成をもう一步広げて、より深く教育に関わったサービスを行っていくとする試みでもあります。

#### 1. 教材開発サービスの現状

教材開発サービスの中で、現在一番大きなウェイトを占めているのはプリント教材の印刷です。メディアセンターには簡易印刷機(リソグラフ)が2台設置されており、主にこれを使用して印刷を行っています。現時点では教材開発専用の職員がいないため、印刷作業は主に学生のアルバイトに頼っています。しかも常に教員からの依頼があ

るわけではないので、依頼されたときに学生にアルバイトに来てもらうという形をとっています。そのため、アルバイトでは間に合わないような飛び込みの印刷の場合は、職員が印刷を行っています。何頁にもなるような教材の場合には、職員総出で丁合い作業をすることもあります。

今のところ、この印刷サービスは学事側と分担になっており、専任教員の依頼はメディアセンターで引き受け、非常勤などの教員の場合には学事が担当します。それでも平成3年度春学期(湘南藤沢キャンパスではカリキュラムの都合上、従来の前期・後期という名称をやめ、春学期・秋学期という名称を用いています)の間にメディアセンターだけでも合計72件、総枚数では約7万枚にも及ぶ依頼がありました。

また教材がかなり厚めのテキストになるような場合には印刷・製本を業者に委託して、きちんとした本にするということも行っています。このような場合には、費用を回収するために受益者負担という形をとらなければならないのが難点ですが、その分かなり質のよい教材が提供できます。またこうした教材はメディアセンター内での販売が困難なため、生協に委託して販売してもらっています。この春学期に行ってきた教材開発サービスは、ほとんどが今述べてきたような印刷サービスでしたが、特殊な例としては古くなったスライドのマウントの張り替えといったことも行いました。

#### 2. 教材開発の将来展望

1.でみてきたように、今のところはサービスの大半を印刷が占めているといっても過言ではない状況ですが、これらの展望としては次のようなことが考えられると思えます。

例えば、上述の印刷サービスを更に広げた「ミニ出版局」とでもいうべきサービスがまず考えられます。現在は教員から渡された原稿をそのまま印刷しているだけですが、これを下書きの状態を受け取り、清書や校正、編集をメディアセンターで行い、印刷、製本して一冊のテキストを作成するといったものです。これは授業用の教材に限らず研究発表の際などにも活用できるのではないで

しょうか。清書や校正は、SFC-CNS のワークステーション上で利用できる LATEX（「ラテフ」と読みます）という文書処理機能や、湘南藤沢キャンパスに設置されている J-Star という文書処理専用のワークステーションを用いることで、普通のワープロを使用するよりも格段に高度な作業を行うことができます。また各種ワークステーションや Macintosh などがつグラフィックス機能を活用した資料作成といったことも考えられます。これは上述のミニ出版の際に、文章に華を添えるグラフやイラスト等の作成にも使えますし、また高度な CG を作成すれば、授業の教材などに効果的な威力を発揮するのではないのでしょうか。

ほかには、AV 施設を活用した映像、音響製作といったことが考えられます。これは既に語学の授業用などで教員の方々が積極的に始められています。これについては後述します。

しかし、今まで述べてきたことは、むしろ教材「作成」に関わるサービスの展開というべきかもしれません。本当の教材「開発」はこれらを別々のものとして考えるのではなく、必要に応じて効果的な方法を選択し、かつ複合的に活用して教材を作成することだと考えます。そのためには、教員とメディアセンターとが授業についてお互いによく理解していかなければならないでしょう。

### 3. 教材開発のこれから

1.で述べたようにメディアセンターにおける教材開発サービスはまだ始まったばかりで、その力を十分に発揮するにはまだまだかなりの時間がかかりそうです。また、2.で述べたようなサービスを行うためにはもっと人手も必要ですし、これらを本格的に行うためにはそれに見合う人材や施設、そしてかなりの機材などが必要になってくると思います。したがって、当面はとにかく理想に向かってサービスを続けることしかないと考えています。

## II. AV 製作サービス

実はこれは正式名称ではなく、筆者が勝手につけたものですが、とりあえずこの名称で話を進めていきたいと思えます。

AV というと、すでに他地区情報センターにも AV ホールなどがありますが、メディアセンターには映像スタジオ、編集室、音響スタジオという3つの施設があり、映像資料や音響資料を製作する機能を有しています。ここに備えられている機材は①Uマチック、8ミリ、ベータ、VHS 間の任意のダビングが可能なダビング機、②8ミリビデオが同時に40本ダビング可能なダビング機、それに③Uマチックならびに8ミリビデオからUマチックへの自由度の高い編集が可能な編集機などがあり、それ以外にCGならびにコンピュータミュージック用として Macintosh LC、それに KORG の M1 というシンセサイザーが設置されています。

この AV 製作サービスも、新棟が完成した平成3年4月から徐々に開始しています。現在の利用は主に授業に関する利用のみに限定しており、語学の教員による授業用のオリジナルビデオ作成などに活用されています。実は新棟の建つ前の昨年度から、機材だけは共同研究室に仮設置されていたという経緯があるため、むしろ教員の方が使い方を熟知してしまい、メディアセンターが後追いでサービスを展開していくといった形になっているのが現状です。そのため、これらの機材を用いてどういったサービスを行っていくかについてはまだ具体的なことが何も確定していません。まずこの施設が誰にでも使えるような環境を整えることが先決であり、現在はその実現にむけて動きはじめています。将来的には、この AV 製作についても、こうした技術を熟知した職員がついて、利用者の要望に柔軟に答えていけるようなサービスを目指したいと考えています。

以上、ごく簡単に教材開発と AV 作成の2つのサービスについて説明してきました。どちらもまだこれからというサービスなので、将来展望ばかりになってしまいましたが、これからも利用者のためになるサービスを心掛けていきたいと思っています。

## メディアセンターに期待すること

楠 本 博 之

(環境情報学部助手)

本特集のほかの部分でも述べられているだろうが、湘南藤沢キャンパスメディアセンターは、従来からの情報センターと計算センターの両方の機能を統合したものであり、その機能が有機的に結びついたよりよい教育・研究に対するサービスが期待されている。SFC で期待されているサービスとしては、CNS と呼ばれる各種計算機利用サービス、データベースサービス、文献資料サービス、教材開発等、多岐に渡る。

計算機サービスとしては、UNIX を基本ソフトウェアとするワークステーションが数多く設置され、学生・教職員が自由に利用できるようになっている。国内外の他の大学、研究所等との電子メールの交換も多くなされている。また USENET と呼ばれる世界中を結ぶ電子掲示板システム（ニュースシステムと呼ばれる）にも接続しており、これらのワークステーションから利用することができる。

ニュースシステムでは、各記事（ニュース）は、話題に応じてニュースグループと呼ばれる記事を掲示（投稿）する場所が決まっており、グループ化がなされている。また配布範囲も、キャンパス内だけに伝搬するもの、慶應義塾の各キャンパスに伝搬するもの、日本中に伝搬するもの、世界中に伝搬するもの等に分かれている。

電子ニュース、電子メールの他に、文書処理システム、統計処理システム、その他のプログラミング言語というものがワークステーション上で利用可能である。また UNIX システムのほかに、いわゆる汎用の大型計算機も他のキャンパスの計算センターの大型計算機とネットワークで接続されている。さらに UNIX 以外のワークステーションも利用されている。

これらのコンピュータ利用のための教育体制を見てみる。湘南藤沢キャンパスの両学部、つまり総合政策学部と環境情報学部は、いわばふたごの学部であり、最初の一年半あるいは二年間はほぼ同じような学習をする。両学部の一年生とも必修で「情報処理言語Ⅰ」という講義・自習科目を受講する。そこでは、最初の半年は90分の講義が週に1回と、90分の自習が週に2回行なわれ、次の半年は週に1回の講義と1回の自習が行なわれる。春学期と書かずに最初の半年と書いたのは、湘南藤沢キャンパスでは、9月入学の制度があり、これらの学生にとって最初の半年というのは秋学期ということになるからである。

さて、その具体的な教育内容であるが、最初の半年は上記ツール、テキストエディタ、電子メール、電子ニュース、文書処理システムの使い方といったものを教えている。キーボードに触ったことがないという新入生も多いが、練習ソフトウェアによる自習により、2ヶ月もすれば、それなりにいわゆるタッチタイプ、つまり両手を使ってキートップを見ずにタイピングができるようになっている。

さらに、1年生および2年生に対するいくつかの科目では、SFC でよく使われる統計処理用の言語である S 言語を用いる授業もある（心理学、データ解析法等）。後述のように S 言語自体は2年生で選択科目で教えるようになっているが、1年生では単に必要な講義科目で必要な統計処理を行う方法しか教えていない。社会科学等で必要な統計処理言語を、今後カリキュラムの中でどのように扱っていくかは、検討課題である。

2年生になると全員が共通に受講する計算機関係の科目がなくなるので、共通に全員の力をレベルアップするというわけにはいかないのが現状である。2年生のために開講されている科目として、情報処理言語Ⅱというのがある。これはいくつかのコースがあり、システムコース、プログラミングコース、応用ソフトウェアコース、統計コース、グラフィックコース、アートコース、コンピュータミュージックコースといったものである。それぞ

れのコースにより、プログラミング言語を使ったり使わなかったりいろいろ視点から教えている。学生はこれらのコースのうちのひとつを情報処理言語Ⅱの単位として履修する。

3年次以降の科目については、科目名、担当者は決まっているものの、科目間相互の関係等、詳細は現在検討段階であり、はっきりしたことはいえない。

さて、メディアセンターにおける計算機利用者に対するサービスであるが、現在、電話によるトラブル対応（ホットラインと呼ばれている）、チュードントコンサルタントと呼ばれる上級生（といっても、要するに2年生であるが）による相談員制度が行われている。

計算機利用の面でのサポートはまだまだ立ち上げ段階ということで、基本的な計算機環境、つまり数百台のワークステーションで電子メール、電子ニュース、文書処理等ができるように維持し、プリンタを保守し、ファイルのバックアップ等を行うというところである。スタッフの少なさからきていることであるのでしかたないが、学生アルバイト、非常勤職員等の活用により、より一層優れたサービスを目指してがんばって欲しい。

将来提供してもらいたいサービスとして、計算機の利用に関する各種相談があげられる。これは必ずしも学生に対する単なるプログラム相談を意味はしない。学生に対して、プログラミングの宿題（人工言語）に関する相談を受け付けるというのは、英作文の宿題（自然言語）の質問を受け付けるというのとほぼ同等であり、ある意味で過剰サービスである。英作文で、表現方法がわからなければ辞書を引くか、誰かに相談する。プログラミングも同じである。プログラミング言語の文法書を読むか、アルゴリズムの本（修辞法、熟語集に相当する）等を読むかである。図書館に英作文のための相談員がいるというのはあまり聞いたことがない。ここで言っている利用に関する相談というのは、「新たにこういうことに計算機を利用したいがどのようにすればよいか？」とか、「こういうことをしたいのだがやってくれそうなアル

バイトは探せないか？」といったようなことを意図している。このようなサービスは教育支援といったものもあれば、研究支援といった性格のものもあるであろう。いずれにせよ何らかの形での参考となるサービスの提供が望まれる。この他、計算機利用に関する教育等、教員と協調して二重になったり等の無駄があまりないようにしなければならないものもある。

さらに研究・教育のためのサービスとして大切なものに、文献資料サービスがある。論文の検索、複写には時間をとられることも多い。これには各研究分野の国内外の学会の論文誌および国際会議等の Proceedings を揃えることが必要である。また、いわゆる文献だけではなく、学会によってはグラフィックスのデモのビデオテープなども配布されているので、このようなものもこれからは必要となってくる。また、文献・資料とならんで各種データベースの利用もあげられる。これらの情報収集には教員との協調が必須であるが、うまく体制づくりをして、これらのサービスを充実させて欲しい。

湘南藤沢メディアセンターはまだできたばかりであり、サービスを拡大、充実させていくという要素が強いが、教職員の協力により、よりよいものを目指してがんばって欲しい。

#### 参 考 文 献

- 1) 斎藤信男, 村井純, 楠本博之「慶應義塾大学——湘南藤沢キャンパス」(共立出版 bit 別冊「知のキャンパス——大学における情報処理教育——」) 1991
- 2) 楠本博之「慶應義塾大学」(共立出版 bit 別冊「キャンパス・ネットワークキング」) 1990
- 3) 加藤朗, 楠本博之「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスのネットワーク構築」17th JUS UNIX Symposium 論文集 1991
- 4) 安村通兎, 有澤誠, 斎藤信男「KEIO SFC におけるコンピュータリテラシー教育」(情報処理学会第32回プログラミングシンポジウム報告集) 1991

---

## SFC 学生の雑感 など

いちのせ かず ゆき  
一ノ瀬 和 之  
みや たけ ひろ ふみ  
宮 武 博 文  
(株 SRA)

昨年1年間を振り返り、SFCの学生さんのUNIXに関する学習について紹介します。

まず最初の試練は、ブラインドタッチツールを使用しての学習です。キーボードに初めて触れる学生さんは、最初のうち指が思うように動かせず、ブツブツ言いながらワークステーションに八つ当たりしている光景を見かけましたが、約2カ月後にはおおかたがブラインドタッチをできるようになっていました。

しかし、また次の試練（Emacs エディタ、メールニュースの学習）が大きく立ちはだかります。Emacs エディタの仮名漢字変換では、「を」や子音の入力方法の質問が多くありました。一方、メール & ニュースは、皆が興味を持っていたため短期間でほとんどマスターし、仲間同志の情報交換のためにメール & ニュースがSFCの中を飛び交っていました。この光景は、毎日夜遅くまで学習していた成果の現れだったようです。

次に待っているのはLaTeXの学習です。これは難問で理解するまでには時間がかかり、課題が出た時はエラーを自分で解決出来ず、ワラをも絶える気持ちでホットラインにかけてくる学生さんが多いのです。結果的にその課題をこちらが解決することになり、後はプリントして提出するのみで、学生さんにとってのホットラインは便利なお助けマンといった感じです。中には常連も何人かいて、LaTeXを理解するまではそれでもいいと思いましたが、本人のためにならないと考え直し、お助けマンを廃業して自立を促すことにしたところ、やっと70%の学生さんがLaTeXを理解するまでになりました。そして春学期終了を迎え長い夏休みに入り、SFCには学生さんの姿はほとんど見受けられなくなりました。

秋学期、夏休みをエンジョイした学生さんで再び賑やかな雰囲気は漂っていました。しかし、我々が心配していたことが現実になってしまいました。春学期に学習したことを忘れてしまっているのです。ホットラインに駆け込む学生さんが後を絶たず、中にはパスワードを忘れて授業が受けられない学生さんも数十人いて、ホットラインはトラブル対応で毎日が戦場のようでした。この状態は約1カ月も続きました。

秋学期最初の試練は、プログラム言語（Pascal 言語）をマスターしなければならないことです。初めてプログラム言語を学習するには授業だけでは時間が足りないためか、皆夜遅くまで取り組んでいました。

段々と複雑なプログラムを作成することが出来るようになった頃、授業では、数人がグループを組んでミニプロジェクトを作り、今まで授業で学習してきたことを生かしての色々なプログラム開発を行っていました。いよいよプログラム開発も終わり、各クラス別に発表会が盛大に行われました。作品の一部を紹介しますと、ゲーム、バスや電車の乗り継ぎダイヤ、湘南駅付近の美味しいお店マップ等さまざまでした。

さて、今年は新たに1年生が加わり、SFCは約2000人の学生達で活気に満ちあふれています。それもそのはず、やっと先輩後輩の関係がキャンパスの中に生まれ、先輩としての後輩の面倒をみる喜びが出来たというわけです。1年生が先輩達に色々アドバイスを受け、一日も早くキャンパスに溶け込もうとする光景があちらこちらで見受けられました。また1年生のUNIXの学習では、トラブルに落ち込み、自分で回避出来ずにパニック状態になる学生さんもいましたが、昨年と違い経験のある先輩達が身近にいるということで、1年生にとっては居心地の良い環境ではないかと思えます。

夏休みに入り、昨年の秋学期のパニック状態をふと思い出し、今年は昨年の倍近い学生がホットラインに駆けてくると思うと、頭の痛いことが続く今日この頃です。

## 珠玉の名盤

とお やま もと みち  
遠 山 元 道

長らくほとんど使っていなかった東芝のラップトップなのだが、ここのところ私のワークステーションの脇で朝から晩まで電源オンのまま、オレンジ色のプラズマディスプレイの画面を表示してスタンバイしている。「うーん、この原稿の例には何がいいかな？ん、まずは Salton 大先生から……。F2 salton っと、」

- 21 SALTON, G
- 4 SALTON, G.
- 3 SALTON, GERALD
- 4 SALTON, GERARD

あらら、日本人でなくても L と R が曖昧なのかなあ？まあ、他に Salton という人はいないようだし……。リターンキーを押すと AUTHOR: と表示された横に“SALTON, G”と出てくるのでこれを“SALTON, G\*”に直してもう一度リターンキーを押してやる。ハードディスクがブンとうなり、傍らの CD-ROM ドライブのランプが一瞬点灯すると、数秒後には Total: の欄に32と出る。今度は F3 を押すと、画面には最初の6件分の論文や著書のタイトルが現れる。カーソルをそのうちの1件に合わせてリターンキーを押せば、出典、ページ、出版年などの書誌情報が現れる。

計算機関係の最大の学会 ACM (Association for Computing Machinery) から毎年出ている Guide to Computing Literature の CD-ROM 版が出るという広告を会誌で見て、その日のうちに注文書を郵送した。2カ月ほどたって小包を受け取ってからあわてて CD-ROM ドライブを注文し、数日後には Computing Archive を動かすことができた。viva! IBM コンパチ!

とにかく威力は絶大。1981年以降の計算機関係の論文12万3千件の書誌情報が、ことごとくキーワードと ACM 独自のカテゴリコードつきで収録され

ている。内訳は単行本(18480)、ジャーナル(75270)、会議録(24320)、学位論文(470)で、これらが約130MBのファイルになっている。このうち約9千件に書評(Computing Reviewsの記事)がついていて、このイメージデータが約450MBもあり、さすがのCD-ROMもほぼ満杯である。ただ、会議録についてはACM主催のもの以外がほとんどないのが残念だ。

以前 Dialogなども試したことがあるが、秒単位で課金されるのだからメータのくるくる回るタクシーのようなもので、とても落ちついて使えなかった。それが、論文を読んでいる最中であれなんであれ、著書、キーワード等をもとに何度でも気の済むまで繰り返し検索できる。自分でハンドルを握って回り道をしたり裏道走ってみるように、手を変え品を変え検索を繰り返すと、世の中の研究の広がりや繋がりがどんどんと見えてくる。また検索結果はMS-DOSのファイルにして容易に印刷や再利用ができる。

CD-ROMのカタログをみると、Mathematical ReviewやNTISなどたくさんリストアップされている。いずれも相当高価である。また、あの巨大なSCIやINSPEC、CAなどはCD-ROMで入手できたとしても相当の枚数になるだろう。パソコンで一枚ずつ検索するのでは有難味が全く薄れてしまう。やはり餅は餅屋。矢上の図書館の一隅に何十台ものCD-ROMドライブを接続したUNIXマシンが設置され、自分のワークステーションからいつでもオンライン検索ができるようなサービスが提供されるようになると素晴らしいと思う。

「コンピュータ、ソフトなればただの箱」とは以前からよく言うが、私の部屋の「ただのパソコン」を、呼べば答える「魔法の鏡」に変えてくれたのは七色に輝く珠玉の名盤である。

(理工学部管理工学科助手)



# 情報センター職員研修について

一 研修委員会「情報センター職員研修  
ニーズ調査」アンケート結果から一

みや いり あき こ

(理工学情報センター  
情報サービス担当課長代理)

## I. はじめに

情報センター内に独自の研修委員会が1988年4月発足し、人事部職員研修の部門別研修として位置づけられている情報センター職員の専門研修を体系的に実施するようになって3年が経過した。

情報センター職員研修制度及び「情報センター職員研修計画(覚)」については、天野善雄研修委員会主査から報告<sup>1)</sup>がなされている。

研修委員会は現行プログラムを体系づけると共に、研修報告書の提出を義務化するなどの活動をした。更に、変貌する情報環境に対応する職員研修を推進するには、研修の対象になっている情報センター職員一人一人の研修への認識、問題点としてニーズの把握が不可欠と考えた。

情報センター組織が発足して20年、図書館トータルシステム KOSMOS 稼働に向け多忙時であり、更に将来に向け慶應義塾大学メディアネット計画が明確化しつつある。そして今日、慶應義塾及び情報センターを取り巻く環境の著しい変化の下、専門職教育で修得した知識・技術が急速に陳腐化する状況にある。こうした時期にただに職員研修について様々な意見があると考えられる。しかし研修への要望は、必要性を感じていないところからは出てこないと思われる。その必要性について、あるいは何故それを必要と考えるかについて少し思い巡らして欲しいと研修委員会は考え「情報センター職員研修ニーズ調査」を実施した。

この調査の報告は、集計結果が中間報告の形で1991年1月各センターにおいて同覧され、更に4月 KULIC 研究会において「調査結果報告」が研修委員会(報告者:石黒敦子委員)からなされた。そして塾外において、天野主査が1990年11月日本私立大学連盟業務別研修(図書館関係):政策課程及び12月私立大学図書館協会東地区研究部

会研修会において、研修及び調査結果に関連した発表を行った。なお今回のレポートは、研修委員会でのまとめを基に、私見も含まれていることをお断りしておく。

## II. 調査結果の概要・分析

1. 調査時期:1990年10月8日~10月末日
2. 調査対象:管理職を含む専任職員全員  
123名(男性55名,女性68名)
3. 回答総数:95名(男性38名,女性57名)  
うち有効回答93名(男性37名,女性56名)
4. 回答者の情報センター経験年数

	~5年	6~10年	11年~	不明	計
男性	18名	5名	13名	1名	37名
女性	22名	20名	13名	1名	56名

調査項目は以下の13項目からなる。集計数( )内は男性の回答分。

設問1「各種情報センター所管研修への参加の有無」は79名(30)が参加経験あり。情報センター経験年数5年以下の男性層は部局新人が多い為か参加経験が少ない傾向にある。全体的にA 本部所管, B:支部センター所管(本部調整)の参加経験が多く, C~G:各センター所管は現行プログラムがパブリック部門対象が多く, 経験所属部署による参加チャンスの偏りがあると推測された。

設問2「参加した研修が有意義だった場合、どのように有意義であったのか。研修名, 評価・感想を自由回答」は52名が記入。例として「海外図書館実務研修」は、参加経験者の多くが記入。日常業務から離れ、海外の図書館での体験は参加者に刺激を与え、良い意味でのリフレッシュとなっている。「図書館・情報学(大学院)研修課程」も数人が記入。反面、日常業務をこなしながらの長期(3~4年)にわたる研修の為、女性の修了者(複数)からは、家庭生活、健康面でのマイナスの指摘もあった。それは参加チャンスが男性には主として20代後半、女性には30代後半に巡ってくるという10年(職場での責任も増す)の開きが原因でもあるようだ。情報センター所管研修中、参加チャンス・時期に男女格差のある研修である。



長期にわたる研修の為、女性のライフサイクルにも係わる問題ではあるが今後検討を要するプログラムの一つである。「情報センターコンピュータ研修」は若手中心の参加経験者の多くが、人事部新人コンピュータ研修を基礎にし確実にステップアップを図れ、業務に即して実施される点を有効としている。全体的には、業務に直結するもの、自分自身が参加することで良い刺激となるものが多く、受身的な内容の研修を有意義としている人は、参加経験者の多さに比して余りにも少ない。

設問3「研修リスト外で、個人的に参加したいと考えた研修・講習会（塾内外の企画）があるか」（自由記入）は19名が記入。例として「マネジメント関係」「国内他大学図書館での実務研修」「大学の授業聴講」等。

設問4「情報センター職員研修は必要か」（選択式）

1. 必要である	2. 不必要である	3. わからない	無回答
84名(32)	0名	5名(1)	4名(4)

全体の90.3%が必要としている。

設問5「設問4の理由」（自由回答）例として「業務に役立つ知識・技術の修得」「自己啓発のきっかけ」「自己研修の限界をカバー」「学外の動向把握」「外からの刺激、視野が広がる」また中堅者以上から「マンネリからの脱出」「知識・技術のリフレッシュ」等。

設問6「現在の情報センター研修計画は図書館サービスの向上にとって有効か」（選択式）

1. 有効である	2. まあまあ有効である	3. それほど有効でない	4. 有効でない	無回答
18名(10)	45名(17)	16名(4)	1名(0)	13名(6)

1)2)で全体の67.7%が有効としている。

設問7「設問6の理由」（自由回答）“有効”の理由としては「研修を受けた結果、業務上非常に役に立っている」、「まあまあ」「それほど」の理由として「多くの研修内容が形骸化していると共に参加側の参加目的や業務との関連性が明確でないものがあり十分な効果が上がっていない」「各種研修に有効なものを受身的なものが混在」「個

人の研修に終わっている」等。研修方針・目的の不明確さとフィードバックの問題を指摘。

設問8「情報センター職員研修計画の問題点」（選択式、コメント可、複数回答可）①「研修方針・計画が明確でない」36名(10)例として「参加させる前に（特に若手に対して）その研修の主旨等を理解させる必要あり」等。②「研修プログラムがよくない」8名(2)例として「受身的なものが多い」等。③「人事計画との関連性が明確でない」22名(8)例として「最大の問題です」「残された者に大きな負担を強いる割には、海外図書館長期実務研修と人事計画との関連性が希薄ではないだろうか」等。④「その他」例として「誰に何を、いつ受けさせるか、又どう継続させるかがはっきりしない」等。

設問9「研修受講に係わる問題点」（選択式、複数回答可）①「業務繁忙で時間的余裕がない」49名(16)②「参加資格が明確でない」26名(8)③「現在の業務に直接関連がないと関心のあるテーマでも参加できない」29名(6)④「参加したくても言いにくい」9名(2)⑤「機会が均等でない」19名(4)⑥「その他」11名(5)。

設問10「今後必要な研修プログラムとその必要度」（選択式、コメント可、複数回答可、必要度5段階〔最高5以下4, 3……〕）なお必要度は加重平均として算出。④「図書館・情報学に関する一般的知識」39名(20)必要度3.31「特に部局新人の為に」等。⑤「図書館・情報産業の動向に関する情報」50名(23)必要度3.84 ⑥「図書館員の専門職としての有り方について」38名(19)必要度3.68 ⑦「他大学図書館員との交流・意見交換」54名(24)必要度3.61「自館を見つめ直すのがかりとなる」等。⑧「情報センターの組織・業務・資料全般」50名(21)必要度3.98 ⑨「特定業務に関するより専門的な知識」46名(18)必要度3.98 ⑩「書誌学および貴重書」36名(18)必要度3.31 ⑪「BI」31名(13)必要度3.71 ⑫「レファレンス・インタビュー」34名(15)必要度3.71 ⑬「語学」53名(21)必要度4.21「扱う資料の半分が外国語であるのをみても明らか、但し自己研修？」等。⑭「特殊形態資料」36名(17)必要度3.31 ⑮「特定主題資料について（統計、特

許、議会資料等)」44名(17) 必要度 3.66「利用者が使いにくい資料ほど指導できるよう把握する必要あり」等。㉓「主題知識」51名(19) 必要度 4.1 人事計画との関係大。慶應義塾のような法・文・経・商・医学・理工等の分野を持つ総合大学の図書館員にとり主題知識修得の問題は重要である。テクニカル部門は選書・分類により正確・迅速をきす為、又パブリック部門は専門的研究活動に対するサービスを展開・発展させる為に重要である。現行では語学と共に自己啓発に負うところが多い。㉔「情報検索」51名(19) 必要度 4.06 ㉕「ニューメディア」44名(20) 必要度 3.7「取捨選択する眼を養う程度には必要」等。㉖「コンピュータ」54名(22) 必要度 4.13「専門家にまかせることはまかせるべき」「新人向きのみでなく、中堅層対象も必要」等。㉗「経営学」29名(14) 必要度 3「管理職と管理予備群に必要」等。㉘「システム論」26名(13) 必要度 3.08 ㉙「その他」9名(5)。

必要度順位は、1位「語学」2位「コンピュータ」3位「主題知識」となる。なおこの項目は、今後の研修プログラムとしての必要度を問うものであったが、自己啓発を含めた視点からの回答も「語学」等の場合あった。

設問11「自己研修は必要か」(選択式)は必要78名(30)、不必要4名(0)、無回答11名(7)。

設問12「自己研修内容を自由回答」は「語学」「幅広い関連分野の雑誌を読む」「各自に自己研修意欲とその方法が確立していなければ、公的研修プログラムは、どれほど整備され、高度化していても生かされることはない」等。

設問13「研修に関する意見を補足」(自由回答)は、「自己研修が必要であるという共通認識を持ちたい。自己研修とプログラム化された研修の二本から研修は成り立つという認識がないと研修の肥大化がおこる」「研修はその人が一番必要とする時にチャンスが与えられることが肝要」等。

### Ⅲ. 研修に関する問題点—アンケート結果から—

#### 1. 研修計画の方針・目的が明確でない

##### ①個々のプログラムの研修目標設定と目的明

示の必要性、②どのようなキャリアの人がどのような研修をどのような時期(年齢)に受けるのか不明確。

#### 2. 研修計画案内・広報の不備

個々の研修プログラムが的確に把握できない。

#### 3. 受講前のアドバイスの必要性

能力の向上開発には、達成すべき目標が明確であればあるほど強く動機づけられ有効である。特に若手に対しては、その研修の主旨等を理解させる必要がある。所属長、先輩職員の役割の発揮が重要であると共に、参加者も積極的にその主旨等を理解する努力が必要である。

#### 4. 受講後のフィードバックの必要性

##### ①参加者へのフィードバックの必要性

「研修報告書」に対する所属長の評価等、研修受講後のフォローが重要である。

##### ②組織へのフィードバックの必要性

情報センターの仕事は、組織として機能的に運営されなければならない研修の成果は個人に留まるものでない。組織に還元されてこそ意味をなす。研修には効果測定が容易なものとそうでないものがあるが、研修に際しては、個人の受身的な姿勢ではない積極的な姿勢と共に、組織としては個人がフィードバックできる環境形成も不可欠となる。

#### 5. 人事計画とのつながりがない

研修計画立案のスタンスとしては①効果的・効率的プログラムを立案する研修計画と②職員技能の充実・向上により組織をつくる人事計画の2つがある。研修委員会は基本的には前者の立場にある。しかし方向性を持った人事計画が、効果的・効率的プログラム立案に不可欠なものであることを、本部、各センター副所長へ調査結果を以て提言する必要がある。どのようなキャリアの人がどの時点でどのような研修が必要か、図書館員の継続教育を考える意味でも個人ファイルが必要となってくるだろう。現在人事異動により、各情報センター内どこでもこなせる平均化されたジェネラリストが多くなっている。しかし将来において機械環境下でも、伝統ある慶應義塾の蔵書を駆使し又より高度な図書館サービスを行う為には、スペシャリストの

存在も不可欠である。あるキャリアの時点で針路の方向を確認する意味でも、研修の記録としての個人ファイルが必要になる。

#### 6. 研修受講に係わる問題点

「業務繁忙で時間的余裕がない」は、回答者の52.7%の人が指摘している。

#### IV. 今後必要とされるプログラムについて

長期的展望と短期的展望に立脚した組織のニーズと個人のニーズ、研修として効果の上がるものと業務で行うべきもの等の見極めが重要である。今後、慶應義塾大学メディアネット計画等により組織が変化し職員構成も変わるようになる。業務と研修と自己啓発がうまくみあわないと“研修の肥大化”を招き、“研修の為の研修”となってしまう。また業務繁忙の折り、業務と研修のバランスをとることも重要であろう。1位「語学」に関しては、英会話は人事部所管プログラムにもあり、また語学全般については自己啓発をしている人は多い。特殊言語については、金銭的援助（慶應外語以外）の必要性があるのではないかと。またカウンター用基本会話集の作成等が考えられる。2位「主題知識」に関しては、主題専門家の養成法の検討も大きな課題である。大学の授業聴講も考えられるが、“図書館員の為の化学”というように短時間で効率的に知識が修得できるプログラム開発の可能性をさぐる必要がある。3位「コンピュータ」に関しては、今後、仕事自体が機械環境の下で行われることになり、職場環境変化（研修と業務のボーダーラインがなくなる）を踏まえた対応が必要になる。今後トータルシステム開始により、情報や技術の標準化を目指して地区を越えた研修も必要である。業務に直結した、自前のプログラムの充実に努め、発表の場である KULIC 研究会と連動することも一案である。広報誌「KULIC」への投稿も、研修の一貫として書き手の層を広げるようにすれば、能動的研修となると共に発表・レポート作成の訓練として有効である。

#### V. 問題点解決に向けて

研修は、組織が“あるべき姿”を提示し、方

向性を持った人事計画の下、研修環境を整え、そして方針・目的を持ったプログラムが効率的に運用され、自己啓発に裏づけられた積極性を持った館員がその研修シナリオを演じ、組織に還元してこそ効果を発揮する。今後、研修委員会では年間計画の公表として1992年度研修プログラム全体（プログラム説明、目的付き）を副所長を通じ各センターへ配布する予定である。また研修のフィードバックとして研修を総評し年間計画へ反映させる。なお研修を通じて得た情報を参加者が組織に伝達することが必要である。そして研修前のアドバイス及び研修後のフォローを所属長や先輩職員が行うことも大切である。人事計画との関連性は、研修全体の成果を支える個人の研修意欲にも影響を与える問題であり、今後の課題となるだろう。

#### VI. おわりに

図書館トータルシステム KOSMOS 開発中の業務繁忙時のアンケート調査であっただけに、日常業務に立脚した様々な意見があった。演じる芝居の内容によって求められる役者が変わるように、変貌する情報環境の下、慶應義塾の職員として、かつ図書館員としての役割を見直すきっかけとなれば幸いと思っている。1988年アメリカでの ARL の調査<sup>2)</sup>によると、26館中14館に Staff Development Office があり、他館にも専任スタッフがいる例が多くあった。一方情報センターでは、本部指導の下、各センターから1～2名のスタッフが仕事の合間に行っている状況にある。研修委員会としては、今回の調査結果を参考にし、今後の研修プログラム立案等に役立てていきたい。

#### 参考文献

- 1) 天野善雄 “情報センター職員研修制度の発足” KULIC, 22, p. 31-35, 1988.
- 2) Weaver-Meyers, P. “ARL Libraries for Staff Development” College & Research Libraries News, Vol. 51, No. 3, p. 251-265, 1990.

## 魅せられて……!?

しば の まりこ  
柴 野 麻里子

三田の整理課に籍を置いて、早くも4回目の秋を迎えようとしている。

利用者と接する機会の多いパブリック部門に較べ「地味」なイメージがつきまとう整理課。しかし、目録作業を通して図書館の変化をつぶさに見て行ける、という点では、他のどこよりも魅力的で目が離せない。折りからの機械化の波に挑戦し、目まぐるしく変化し続ける整理課の、素顔と奮戦ぶりをご紹介します。

### 学情から OCLC へ

その当時、課では学術情報センターオンライン目録システム（通称学情）利用による目録作業が徐々に本格化しつつあった。全国の大学図書館と共同で「総合目録」を作成していく、という全く新しい試みである。配属されたばかりの新人達の仕事は、まずは学情端末の胸を借りて、機械による目録作成のイロハを学ぶことから始まった。（それにしても、よくダウンする相手ではあった……。）

しかし、平穏な日々は長くは続かない。数カ月後に早くも OCLC 導入による目録作業がスタートしたのである。システムに慣れるまでにはかなりの時間を要したものの、こうした世界レベルの各種ユーティリティに接することは、我々にとって大変なプラスであった。（整理課だけにある機械に触って、密かに優越感に浸ったものである……。）

### ファイリング地獄からカードレス化へ

こうして、日々端末に向かう時間が増える中、業務体系にも様々な変化が起って行った。洋書のカードレス化は、その中でも特筆すべき出来事であろう。基本目録だけは、従来通りカードという形で維持さ

れるものの、副出・仕分け・ファイリングという膨大な作業の省力化が、こんなにも早く実現しようとは。（学生アシスタント時代に苦しめられたファイリング地獄がウソのようだ……。）

しかし、感慨にふけてばかりもいられない。翌年の春には、カードレス計画の一環として、利用者向けのオンライン目録（通称 OPAC）を作る為、専従の開発チームが臨時編成されたのである。その結果、整理課の人員は大幅に削減され、業務に大きな支障をきたすことになった。（大きな不安と、小さな決意……。）

### 週及入力から全塾機械化へ

それから3カ月後、苦しい状況に更に追い討ちをかけるように、週及入力事業（通称 RECON）が開始となる。何しろ、洋書のうち約20万冊を総て機械可読化しようというのだから、一筋縄ではいかない。（正体不明の古いカード（？）にグチりつつも、歴史は繰り返すまい、と思わず心に誓った……。）

その後再び、藤沢開設準備に伴うスタッフの減少という試練を経て、整理課は約3年に亘った洋書の週及入力作業を終え、現在和書の RECON に移ろうとしている。また全塾トータルネットワークシステムの稼働も、いよいよ目前に迫った。（連日連夜の会議を経て、ようやく日の目を見るこのプロジェクト……是非とも成功して欲しい。）

### 激動の中で育つ若手スタッフ

こうして振り返ってみると、この3年半というものの、整理課では常に新しい業務が目白押しの状態で、息つく暇さえなかったように見える。課にとって、それは明らかに「激動の時代」であり、また慶大図書館全体にとっても、一つの大きな「転換期」であったことは確かである。

そのような時期にもかかわらず、整理課にはいつも活気があった。自主性を尊重するのびのびとした環境のもとで、今ゆっくりと、しかし確実に新人達が育ちつつある。そしてその中には、新しいプロジェクトの影におびえながらも、底知れぬ「整理課の魅力」に引き込まれて行く、私自身の姿もあった。

（三田情報センター整理課）



## 組織とライブラリアン

—UCLA の図書館で働いて—

たち 館            たづこ 子  
 (医学情報センター  
 情報サービス担当係主任)

## Peer Review

UCLA (University of California, Los Angeles) Biomedical Library のレファレンスデスクにこんな質問を持ってきた利用者(若い医師)がいた。「peer review について書かれた文献を探したい。」レファレンスライブラリアンは雑誌の peer review のことかと思い、Index Medicus を使っていくつかの論文を拾ったところ、彼の求めていたのは雑誌のそれではなく、病院で働く医師間の peer review についてであることがわかった。

筆者は、1990年10月より約10か月間の交換プログラムによって、UCLA East Asian Library に働く機会を得た。江戸期の日本文学、美術書より成る Julian Wright コレクションの目録をとり、OCLC CJK ターミナルを使って入力するのがその内容であった。と同時に、library school のクラスを聴講したり、同じキャンパス内にある Louise Darling Biomedical Library (以下 Biomed. と略す) で研修を受けた。先の質問は、その研修中に Biomed. のレファレンスデスクで経験したものである。これは、質問を受けたライブラリアンも意味を取り違える程珍しいものではあったが、筆者にはアメリカ社会だからこそ出てくる質問で、日本では考えられないという思いがあった。日本人から見ると、あまりにプライベートでインフォーマルなテーマである。

Peer review は仲間同士の評価を意味する。UCLA の図書館では、それを使ったシステムがプロモーションのための評価方法として採用されている。実際にどの様に運営されているのかを、ここで簡単に紹介する。

UCLA の Librarians Association では Peer Review Manual をまとめている。この方式を図書館で採用した理由は、大学が経験豊富な人材を長期的に確保するためであったが、州立大学ということも影響を与えているようである。ライブラリアンにとっては、公明正大な評価を期待できるし、仕事についてアドバイスを受ける良いチャンスともなる。このシステムの対象は、MLS の資格を持つプロフェッショナルライブラリアンである。また、UC システムのなかでもキャンパスごとに異なる評価方法を持つ。よって、ここに紹介するシステムは UCLA に特有なもので、決してアメリカの大学に一般的な方法ではないことを断っておく。

Peer review は Peer Review Committee によって運営される。Committee のメンバーは、30人のボランティアで賄われる。評価対象となるライブラリアンのレポートを30人のうちコーディネータの選んだ3人が読み、プロモーションに備えるかどうか判断し推薦する。これらの資料は University Librarian (大学図書館長) と Committee で再度検討され、最終的には University Librarian が昇格・昇給の決定を下す。評価を受ける側は、Committee のメンバーのうち自分のレポートを読まれない人を指示することができる。しかし、誰が自分のレポートを読んだかは知らされない。機密は厳重に守られる。また peer review の本来の意味から、3人のうち2人は同じランクの同僚から選ばれる。

提出するレポートは次の3種類である。Data Summary, Statement of Professional Achievements, Statement of Responsibilities。これにスーパーバイザの評価が加えられる。Professional Achievements には次のうち少なくとも1つを報告できればよい。外部団体、たとえば各種の Library Association で Committee の委員をしている、大学内外で講師をする、他機関へのコンサルタントをする、研究助成金を得て研究活動を行う、等である。また Statement of Responsibilities は、各ポジションの仕事内容を記述す

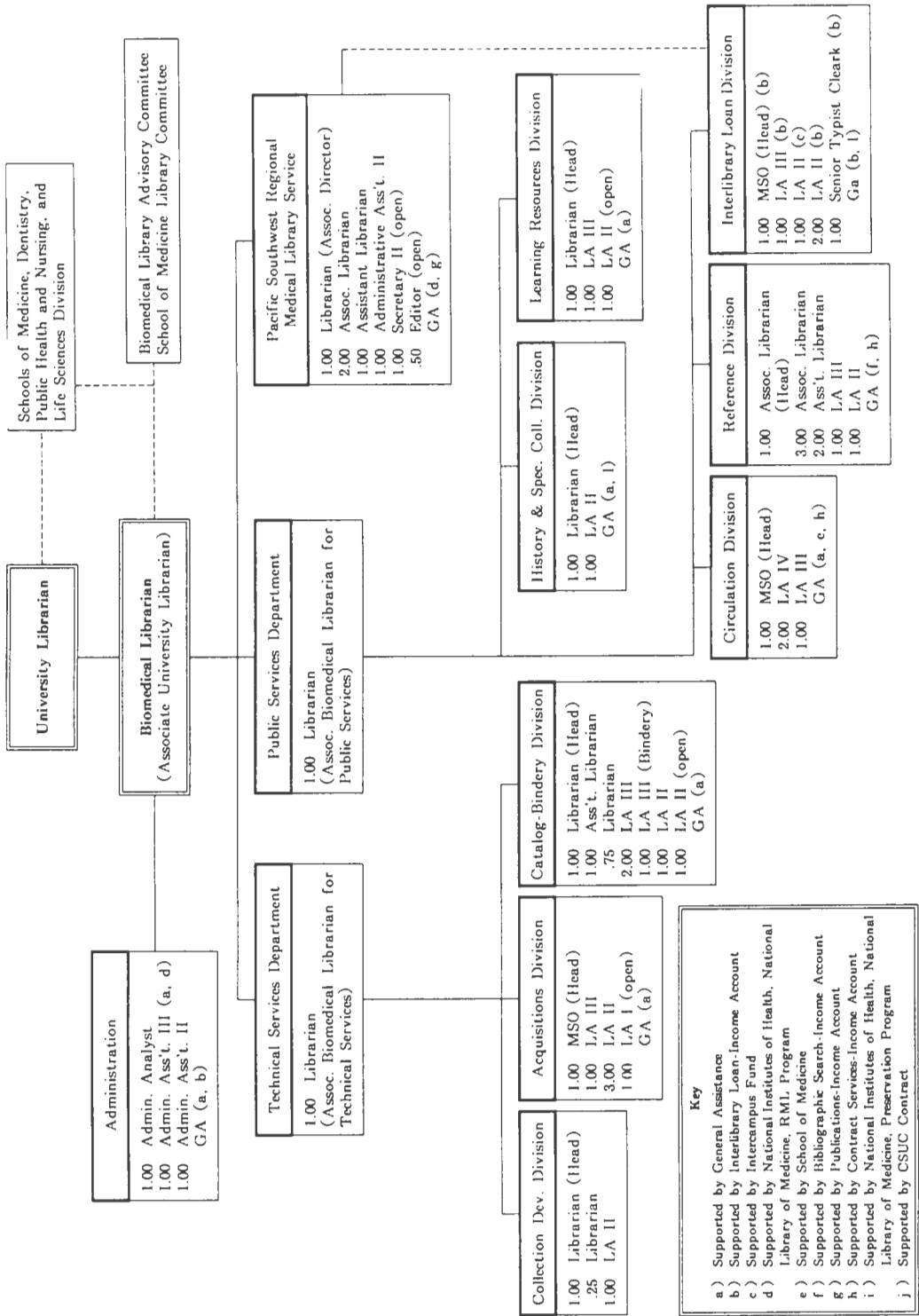


圖 1 UCLA Louise Darling Biomedical Library 組織圖

る。ここで、スーパーバイザの役目として、そのユニットで働くスタッフのプロモーションを促すような配慮や各自の能力を引き出す指導性が求められる。もしスーパーバイザがこれに対して消極的であると弊害を生むことになりかねない。UC システムでは統一の給与表を持つが、ランクとステップより成る給与体系はライブラリアン、ライブラリ・アシスタント (LA)、ジェネラル・アシスタント (GA) (多くは学生) で分かれる。

さらに、ライブラリアンには3つのランクがある。Assistant Librarian, Associate Librarian, Librarian の順に上のランクとなる。各ランクは各々6, 7, 5ステップに分かれ、上位ステップに移る際にレポート作成の義務がある。Assistant Librarian は毎年レポートを提出し、6年目の評価によって次のランクである Associate Librarian になるか、あるいはポジションが得られず退職することになる。Associate Librarian から Librarian への昇格は義務づけられていない。何年でも Associate のランクに留まることができるが、経験年数を積んでも、給与表の改定がない限り給料は上がらない。上位ステップへ移行する平均在籍年数は1~3年の開きがある。上位ランク程その期間は長くなる。大学側はこの方式により、必要に応じてキャリアのある専門家をより多く、長く確保できるメリットがある。さて、給料はこの様にランクとステップで決まるので、仕事の種類による訳ではない。しかし、仕事内容とポジション担当者のランクやステップは無関係ではない。UCLA Biomed. の組織図(図1参照)を参考にすると、Librarian から GA までのランクが、各 Department, Division 内に並んでいる。Division によってはライブラリアンではないノンプロフェッショナルがヘッドである。

以上が UCLA の peer review システムの概要である。次にこういった組織で働くライブラリアンの専門性や意識について、滞在中の経験を基に筆者の感じたことを述べる。

### Open Position

アメリカでは仕事は求めるものであり、与えられるものではない。またこういう言い方もできる。組織が人を育てるという意識がない。よって、働き手の意志が非常にはっきりしている。仕事を選ぶ際にどんな経験を積んだから次はこの仕事をしたい、あるいはこういうセミナーを受けて知識を身に付けたからそれを生かせる仕事をしたい、等である。大学の主催するセミナーからも career development への関心の高さが伺える。常に自分をアピールする習慣の強い国だけにダイナミックな人の動きにはかなりのエネルギーを必要とする社会といえよう。

筆者が UCLA に滞在中にも、AUL (Associate University Librarian) の open position に5人の候補者がおり、その採用のための委員会が数か月に亘って活動していた。University Librarian や他の AUL との数回にわたる面接だけではなく、一般スタッフの誰でも参加できる公聴演説会も開かれる。どんな考えの人なのか、どんな組織サービスを目指しているのかを聞くことができる。こういった面接と演説が1か月間行われた後、選出された人がそのポジションを得る。これは AUL という組織の要となるポジションの採用方法であるが、ユニット内のポジションでもユニットヘッドによる面接が時に行われていた。Open Position は広告によって知ることができる。Position available のサーキュラーは実に頻繁に回ってきた。そこに含まれる情報は、ランク、ポジション・タイトル、ユニット名、給料幅、仕事内容、望まれる資格・経験である。応募者の年齢は問われない。

### 転職とライブラリアン

実際にアメリカ内のいくつかの医学図書館を見学して多数のライブラリアンに会ったが、時に彼らのバックグラウンドに話が及び、次の様な転職経験を聞いた。口腔外科医から Information Services Head のライブラリアンになった人、Science Library から Medical Library に変わっ

た人、社会科学系の図書館で利用教育担当だった後、医学図書館に来て Learning Resource Center の仕事に就いた人、BRS のインストラクターから UCLA の Biomed. に事務室を持つ Regional Medical Library Service の Online Service Coordinator になった人、病院図書室での経験を生かして大学図書館のレファレンスライブラリアンになった人、等。地域、館種を越えた人事交流があることがわかった。また、NLM（米国立医学図書館）では採用の際に、むしろ BRS や DIALOG といった NLM と異なるシステムの経験者を歓迎する。何故なら他システムの教育は NLM 内ではできないから、という話も聞いた。

この様に書くと人事異動が頻繁にあるようだが勿論アメリカでも同じ図書館に長く勤めてキャリアを積む人もかなりいる。特に図書館に働くスタッフは女性が多いため、この傾向は強いと考えられる。しかしながら、国立、州立、私立といった組織の違いや、大学と民間企業の壁を越えて人事交流がある、という事実新鮮なものを感じ、その通気性の良さが組織の活力につながっている様に思えた。また、自分の意志で職場やポジションを自由に変えてリフレッシュを図れるのは良いことだと思う。勿論それには個人的な努力が必要であるが。

### 図書館を支える人々

アメリカの図書館組織のもうひとつの特徴は、全スタッフに占めるプロフェッショナルの割合が低い（平均で約1/3）ことである。さらに、プロフェッショナルのポジションを機能別にみると、約半数は information service, education service, administration に集中している。最近ではシステムの開発・分析・維持に関わるプロフェッショナルも徐々に増えている。特に IAIMS（統合型学術情報管理システム）を推進している医学図書館でこの傾向は顕著であり、パラプロフェッショナルと言われる人々も含めてコンピュータ、システム関連の仕事に従事し、ライブラリアンと共に働いて新しいサービスを支えている。

その一方で、従来通りの基本的な図書館サービス、たとえば貸出カウンターには多数の学生アシスタントを置いている。UCLA の Biomed. を例にすれば、常時14~5人の学生が授業の合間に働いている。彼らの仕事はカウンター業務と返本であるが、ORION と呼ばれる UCLA のシステムを使って見事に仕事をこなしている。彼らのパワー、そして彼らを教育し監督する立場にある Management Service Officer の手腕は素晴らしい。夜11時までの開館を支えているのも彼らの力である。この様に学生の一部とはいえ、勉強しながら自分たちの大学（他大学ではなく）の運営に直接関わっている姿には、日米の大学生活の違いを感じた。ただし、アメリカにおいても医学部学生が働く姿は図書館に見られなかった。学生アシスタントの活躍しているもうひとつの場所は ILL/DDS (Interlibrary Loan/Document Delivery Service) である。UCLA の Biomed. ではここにも10名程のアシスタントが ORION Express (UCLA の内部利用者への DDS) や Loansome Doc (学外の登録した個人利用者への同様のサービス。NLM が GRATEFUL MED の利用者用に開発したソフトを使った申込み方法) で申し込まれる文献コピー等の依頼に応じている。アメリカの主要な医学図書館では ORION Express の様にターミナルから直接、自館所蔵の文献について、コピーの申込みができるようになっている(有料)。こうした便宜は利用者にとって測り知れずありがたいものであるが、それを支えているのは多数のノンプロフェッショナルなスタッフであった。

また、ターミナルから直接申し込まれる以外にも、レファレンスデスクで相互貸借の依頼を受ける。これは書誌事項の確認が必要となるのでライブラリアンの手を介して、ILL へまわされる。そこから先は事務的な手続きが多くなり、担当は Management Service Officer や Library Assistant の仕事である。彼らが学生を使って、月に4,000~6,000件を処理している。この様に ILL でライブラリアンのいないスタッフ構成と



なったのも、ひとつは組織の合理化のため、もうひとつはコンピュータの力である。つまり、NLM/DOCLINE, MEDLINE, OCLC-ILL 等の導入による業務の簡素化、マニュアル化が進んだためであるといわれる。それ以前は、かなりの経験や知識が必要とされたが、今ではマニュアルに従えば、ある程度の教育は必要とするもののノンプロフェッショナルがこなせる仕事となった。

また、レファレンスデスクにおけるサービスについてもアシスタントを有効に使っている。UCLA では、ライブラリアン以外にも library school のヘルスサイエンスコースの受講者がデスクを担当し、週末と夜間のレファレンスサービスに貢献していた。Johns Hopkins 大学 William Welch Medical Library でもレファレンスデスクのスタッフは Library Assistant を置くことにしたと言う。これについて、レファレンスヘッドはこんな感想をもらしていた。「確かにサービスの姿勢はプロと違う。私達ライブラリアンであればもう少し違った答え方をするとすることもあ。けれども彼らは任せるに十分な仕事をしてくれているし、私達はデスクに出ている時間がない。」

こういう事情であるから、別の医学図書館でレファレンスデスクのコーディネータが「私が、伝統的なレファレンスサービスのコーディネータです。」と語ったそのことばに筆者は妙に納得のいく気分になったものである。というのは、医学図書館のパブリックサービスでプロフェッショナルといわれる人々が携わっている仕事が徐々にデスクを離れたところに移ってきているからである。

#### 図書館サービスの多様化と広がり

図書館システムが高度になる程、サービスは多様化する。それを利用者にわかりやすく説明して利用を促進しなくてはならない。たとえば OPAC と呼ばれる目録サービスとインハウスデータベースサービスはたとえ同じターミナルから検索できるように設計したとしても、そこに動くインターフェースは別々である。こういった単純な利用指導に始まり、1980年代のアメリカで流行となった

Microcomputer Laboratory Classroom の設置に伴う医学教育用プログラムの案内や使い方の説明、そして最近では情報管理技術の習得のためのセミナー、ワークショップの企画等、多種多様な教育プログラムを開発し実施するために Educational/Instructional Services や Microcomputer Resources のコーディネータが置かれている。どこの医学図書館でもこの分野のコーディネータからは、未知の可能性を追求する情熱を特に強く感じた。しかし、実際問題として Microcomputer Lab./Classroom のスペースや講師となる人員の確保には苦勞の跡が見え、サービス開始当初は思った様な効果が出ずに、教える方も教えられる方も共にストレスフルであったという話も聞いた。何事も新しい仕事には忍耐と努力、そして多少の困難はあってもあせらずにできる事から積み上げていく実践の精神が必要であると教えられた。

こういった新しいサービスを開拓する先見性もさることながら、それを可能とするための組織作りの上手さがあると思う。社会基盤が違うことは勿論であるが、助成金や寄付金も上手に入手する。慶應義塾大学で新しいシステムを稼働させようとしている今だからこそ、組織の目的、仕事の優先順位を明確にさせ、プロフェッショナルが何をすべきなのか考える時が来ている。

蛇足となるが、flexible time についても、避けて通れない問題ではないかと思う。プロフェッショナルであればなおさら、時間の管理は個人で行うべきものである。今後、労働時間の短縮に向かうためにもこの方法は有効であろうし、レファレンスデスクでは、医学部利用者の利用時間に合わせたサービス体制が組みやすくなる。

最後に、スタッフ不足のなか、心よく出張に出して下さった医学情報センターのスタッフ一同に、また交換プログラムの推進に尽力下さっている本部事務室に深く感謝いたします。この機会がひとりでも多くのライブラリアンに与えられることを切に祈っています。

## 三田情報センターにおける新刊和書の

### pH 値測定結果

かざ ま しげ ひこ  
風 間 茂 彦

(三田情報センター閲覧課課長代理)  
資料保存対策委員会

#### I. はじめに

御存知のように、「酸性紙問題」は、21世紀を目前に控えた今、学術図書館の抱える極めて深刻な問題である。19世紀半ば以降に出版された図書用の紙が酸性劣化によって朽ちてゆくというこの現象は、内容／形態の保存という図書館機能に対するの自然の挑戦である。対処のアプローチにはいくつかあるが、劣化したものに施す対策を考慮すると同時に、将来を見越して、劣化する資料を作りださないよう対策を講じる必要がある。用紙に中性紙を使用する運動は、そうした必要性のもとに展開してきたものである。

そうした動きを受けて、国立国会図書館では、継続的調査の一環として、1989年国内刊行図書のうち600冊を無作為抽出し、更にこのうちの一般図書（コート紙、更紙、文庫、新書を除く）390冊について用紙のpH測定を行った。この結果については、同図書館月報第357号（1990年12月）に詳しいが、慶應ではその結果に基づいて新刊和書の用紙調査を行い、三田情報センター収集分についての測定結果をまとめるに至った。ここではその結果について報告し、当センターに於ける新収和書の用紙のpH度を知る参考としたい。

#### II. 調査の方法

- ① 国立国会図書館が調査対象とした390冊を三田情報センターの1991年5月12日現在の受入ファイルと照合し、合致するもの52冊について調査した。（データA）
- ② ①でのサンプル数の不足を補うために①のサンプルに、その時点では選書されていない

が、三田情報センターの選書ポリシーの範囲内にあるもの55冊をさらに加え、それら107冊について調査した。（データB）

- ③ データは、A・B共に、民間の出版物と官庁の出版物に分けて分析した。

#### III. 結果の考察

国立国会図書館では、pH6.5以上を中性紙としているが、それを基本に今回の調査結果の考察をしてみよう。

民間出版物に関してはデータA・B共にほとんど同じ傾向を示している。それは量的にpH7.5とpH4.5の2つのピークを持っている。最大のピークはpH7.5であり、それを中心に全体の80%以上がpH6.5以上に分布していることがわかる。国立国会図書館の調査によると全体の約74%がpH6.5以上に分布し、今回の三田情報センターの結果はこれよりも若干中性紙寄りに分布していると見ることができる。一般的な図書も含めた全ての出版物を収集対象とする国立国会図書館と、アカデミックなものを中心とする慶應との間のこの相違は、アカデミックな図書の用紙の中性紙化が一般図書よりも比較の上で進んでいることを表しているといえよう。いずれにせよ、三田情報センターの受入れ民間出版物新刊和書をみた場合、その殆どに中性紙が使われているという傾向を読み取ることができる。しかしもう一方のpH4.5のピークの存在は、もし放置したならば100年後の資料保存状況に確実な影響を与えることは明白である。官庁出版物に関しては、サンプル不足のために必ずしもAとBが近似の値を表していない理由を検証することは難しいが、傾向として言えることは、どちらの場合も最高のピークはpH4.5にあるということである。今回の調査では、官庁出版物のデータがあまりにも少なすぎるので、この結果をそのまま三田情報センターの一般論と結びつけることは難しいが、この官庁出版物にpH値の低い用紙使用資料（酸性紙）が集中しているという傾向は国立国会図書館の調査でも裏付けられている傾向である。こうした傾向は官庁出版

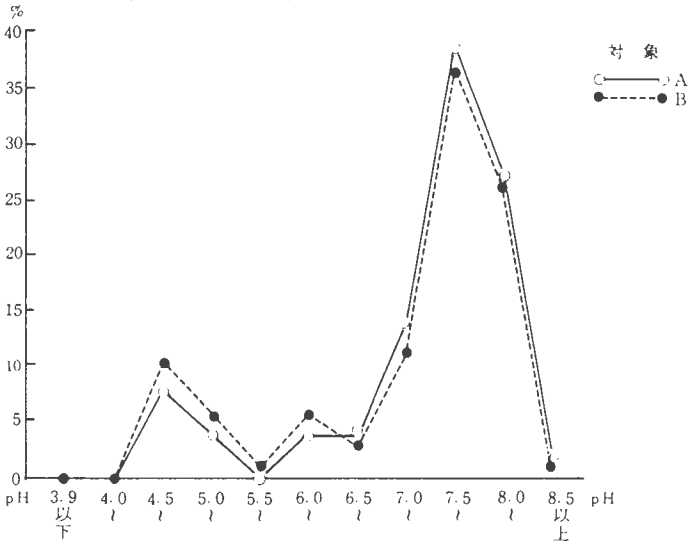
物の保存性の弱さを物語っており、取り分けその部分に対しての先取りした対策なしには、長期保存を保証し得ない現状を読み取ることができる。

#### IV. 結 語

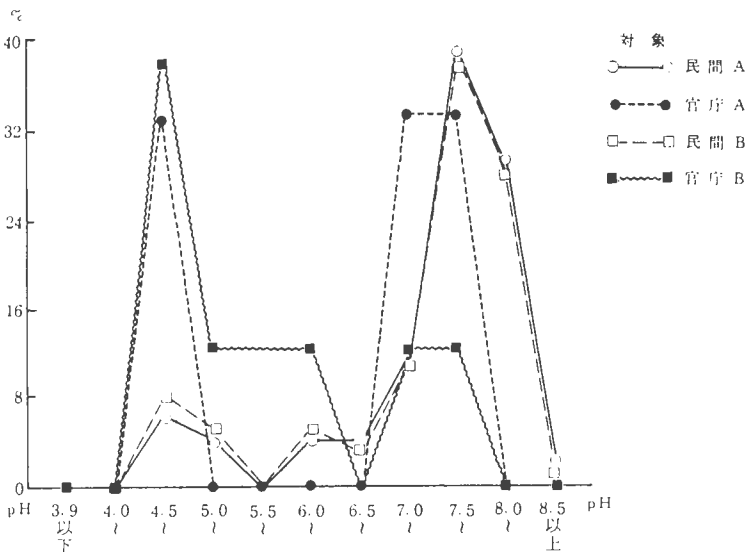
今回の調査は、新収和書の用紙の状況を確認する機会を与えてくれた。しかし重要なのは確認で

はなく把握した問題点への対応である。逆説的ではあるが、大学図書館といえども、その第一の使命は、収蔵資料の利用を保証することであろう。その意味での資料保存対策の策定の重要性は、資料へのアクセシビリティの増大と比例して重要度を増していくのである。

データA・B (民官全体)



データA・B (民間・官庁別)



## 三田及び日吉情報センターにおける CD-ROM サービスについて

いし はら とも こ  
石 原 智 子

(日吉情報センター  
パブリック・サービス課)

みや ぎさ やす こ  
宮 崎 康 子

(三田情報センター資料課)

近年、情報の多様化・情報量の増大にともない情報提供の場である図書館・情報センターでは、資料・情報の電子メディア化が進んでいる。このような状況に対応すべくニューメディアのひとつとしてCD-ROMは注目され、利用も徐々に広まりつつある。

慶應義塾の各情報センターでも、ここ数年間で多くのCD-ROMが導入されている。ここでは人文・社会科学分野に絞って三田及び日吉情報センター（以後、三田、日吉と省略）で導入しているCD-ROMについて、その概要と特色、利用の現状、問題点、今後の展望などを中心に述べてみたい。

### I. 導入しているCD-ROMの特色

表1は、三田と日吉で導入しているCD-ROMの概要である。この表を見ると、法学3種類、教育学1種類、経済ビジネス5種類、新聞記事2種類、学位論文1種類、図書館情報学2種類、書誌情報3種類、事典2種類、というように主題範囲が広いことに気付くと思う。また、表中の導入時期の欄を見ると、三田は年々増加し、特に1990年には9種類も導入しており著しく伸びていることがわかる。これに対し日吉はむしろ減少している。これは、利用者の要求の度合いや利用者層の違いからくると考えられる。また三田に比べて日吉の端末機の数が増えているということもCD-ROMの導入が促進されない原因のひとつであると思う。

この他に両者に共通していえることは、書誌情報データベースだけでなく、全文データベースも提供しているということだ。(BPO, CD-HIASK)

さらに、三田についてはCD-ROMの導入セッションにも特色がある。他センターの場合CD-ROMの導入は基本的に情報サービス担当(レファレンス担当のセッション)で行っているが、三田では他に資料課でもサービスを行っている。これは、三田における業務分担の特色からきている。資料課は雑誌・新聞などの逐次刊行物を扱うセッションであり、そのサービスの一環としてCD-ROMを導入している。特に総合資料室では、経済学、法学、政治学の専門資料室として、逐次刊行物に限らず社会科学系のCD-ROMサービスを行っている。一方情報サービス担当では、レファレンスサービスに必要な書誌情報のデータベースを中心に導入している。はっきりとした形ではないが、一応このようにCD-ROMの導入について役割分担を行っている。

### II. 利用の現状

CD-ROMの利用状況に関してはきちんとした統計をとっていないので、大まかな状況を述べる。

#### 1. 導入後の広報と利用指導

新しいCD-ROMを導入する場合、三田では「LIBRARY NEWS」の配布・掲示を行っている。デモンストレーションは行っておらず、利用者には利用の度に個別に説明している。その際、利用者がどの程度キーボードを使え、またCD-ROMを理解しているかを判断し、レベルにあった利用指導を行っている。三田ではCD-ROM専用の端末機を置き、利用者に完全に解放している。そして、端末機のそばには図書館員が整備したひとりでも検索できるようなマニュアルが置いてあり、代行検索は行っていない。日吉では、「使ってみようCD-ROM」と題した図書館活用セミナーを催し、解説とデモンストレーションを何回か行ったことがある。日吉はCD-ROM端末機が業務用の端末機と兼用なので、立ち上げと終了は図書館員

表1 三田と日吉で導入している CD-ROM の概要

	タイトル	主題・内容	ハードウェア	設置場所	導入(年)
新聞記事情報	CD-HIASK	朝日新聞記事	日立グーテンベルグ	三田雑誌室 日吉	1989
	Newspaper Abstracts Ondisc	米国新聞記事	Sony Quarter L (IBM PC/AT)	三田雑誌室	1990
法律文献情報	リーガルベース	国内判例要旨	日立グーテンベルグ	三田雑誌室	1988
	判例 MASTER	国内民事判例要旨・書誌情報	NEC-PC 9801 ES	"	1990
	Index to Legal Periodicals	外国法律文献	Sony Quarter L	三田総合資料室	1990
ビジネス文献情報	ABI/INFORM	英文雑誌記事抄録	専用 WS, Information Delivery System 2000 (IDS 2000, UMI)	三田総合資料室	1990
	Business Periodicals Ondisc (BPO)	ABI/INFORM のうちの約 300 誌の全文	"	"	1990
	Compact Disclosure	米国企業情報 株式情報	Sony Quarter L	"	1990
海外産業情報	JETRO-ACE	国民経済・貿易情報	日立グーテンベルグ	三田雑誌室	1988
	KSK-SCANNER	新聞・雑誌記事情報	"	"	1988
図書館・情報学	Library Literature	図書館・情報学文献情報	ACER MPF-PC 1500 (IBM PC/A 互換機)	三田図書館・情報学資料室	1989
	ERIC	教育関係文献情報	"	"	1989
	CA-CATSS	書誌情報・目録検索システム	"	"	1990
書誌情報	CD-BOOK	新刊情報(図書内容)	FM-R 60	日吉	1988
	J-BISC (Japan MARC on Disc)	国内書誌情報	"	"	1988
	NACSIS-CD	"	"	"	1988
人物情報	CD- 現代日本科学技術者大事典	事典	FM-R 60	日吉	1988
	CD- 現代日本執筆者大事典	"	"	"	1988
博士論文	Dissertation Abstracts Ondisc	博士・修士論文	専用 WS IDS 1000 (UMI)	三田情報サービス担当	1991

が行っている。代行検索も可能であるが、使い方  
を指導した後は本人に検索してもらう場合が多い。

## 2. 利用の目的

利用の目的としては、特定のテーマに関する新聞記事を探す場合、統計数値を必要として来る場合、判例を探しに来る場合が多いようである。三田の場合「LIBRARY NEWS」を読んで興味を持ち、使いに来るという利用者は少ない。現状は、実際に利用した人や教員から紹介された場合が多いようである。また日吉の場合、学部の授業（法学情報処理・研究情報処理）と関連して利用される場合も多い。

## 3. 利用者について

利用者層は、三田の雑誌室、図書館情報学資料室、日吉では学部生が大半を占めている。三田の情報サービス担当では、図書館員が使う場合が多い。三田の総合資料室では、教員と大学院生が大半を占める。

では、利用者の CD-ROM に対する反応はどうだろうか。欲しい情報がすぐ手に入り便利だという声や朝日新聞以外の新聞記事情報もあれば良い等の希望もあり、有用性は認識されているとあってよいであろう。事実、判例マスターや CD-HIASK, J-BISC, ABI/INFORM などは、利用頻度が高く、ほぼ毎日利用されている。

## 4. オンライン情報検索との関係

CD-ROM を導入することによって、オンライン情報検索の利用に影響を及ぼす図書館もあるが、我々の場合はどうであろうか。人文・社会科学分野におけるオンライン情報検索サービスの導入は自然科学分野に比べて遅く、しかも日経ニューステレコン（新聞・雑誌記事情報の国内オンラインサービス）の利用を除いて、特に海外オンラインデータベースサービスの利用は料金の高さが障害となって利用が定着していない状態である。またオンライン情報検索の場合は代行検索であるため自由に利用者が検索できない。一方 CD-ROM は、利用者に無料で公開している。そのため CD-ROM とオンライン情報検索の両方のサービスを行っていてもオンラインサービスの存在を知らず

に CD-ROM を利用している利用者がほとんどである。すなわち現在のオンライン情報検索の利用状況からいって、CD-ROM の導入によってオンライン情報検索の利用が減ったということは特にない。むしろ利用者には CD-ROM で得られなかった情報をオンラインサービスを利用して補うなど、両者をより有効に使ってもらいたい。参考までに三田と日吉においてオンライン情報検索と CD-ROM の両方で提供しているデータベースをあげておく。Dissertation abstracts, Newspaper abstracts, ABI/INFORM, ERIC は、三田の情報サービス担当で扱っているオンラインデータベースの DIALOG でも検索できる。CD-HIASK は日経ニューステレコン（三田の総合資料室と日吉で提供）でも検索できる。

次に、今まで述べてきたような CD-ROM の特色と利用の現状から生じる問題点を述べる。

## Ⅲ. 問題点

利用者に対し、図書館員は CD-ROM の検索結果が欲しい情報の全てではないことを教え、本や雑誌・新聞などの冊子体で探したほうが良い場合があることも必要に応じて指示しなければならない。そのために、図書館員は CD-ROM で検索できる範囲、或いはどこの部分が検索しにくいかなどということまで、あらかじめ知っておかなければならない。しかし、現在の利用指導はそこまで及んでいない。なぜなら、特に三田においてはデータベースの主題範囲が広いために、図書館員自身がハードウェアとソフトウェアを把握することが非常に難しいからである。図書館員のトレーニングについては、今後特に検討し、改めていかねばならない重要な問題点である。

第2の問題点として、ハードウェアとソフトウェアの数の不足があげられる。現状では一つのソフトウェアは1セットしか購入していないし、一つのハードウェアに対し数種類のソフトを利用するようにしているので、利用の希望が重なることもかなり多い。日によっては、利用者が待機する状態にもなる。日吉は CD-ROM 専用端末機がなく、

業務用と兼用なので、図書館員にとっても利用者にとっても使いにくい面が生じている。

第3に価格の問題である。便利なものなので購入の要求は数多いが、その価格は冊子体に比べて高く、予算の制約の中で今後何を追加していくか、選択が難しくなっている。資料によっては冊子体の購入を停止し、CD-ROM の購入だけに切り換えたものもある。例としては、Newspaper abstracts の中で検索できる New York Times の Index や、Dissertation abstracts などがある。

第4は検索結果の出力についてである。大量の印刷を希望したり、フロッピーにダウンロードするなど、三田も日吉もケースバイケースである。検索結果の印刷については、課金しようとの声もあり検討されてはいるが、現状では CD-ROM を定着させていくため、利用増大の PR も兼ねて利用者には無料で提供している。

以上は情報センター側の各事情から生じる問題点であるが、CD-ROM 自体の問題もある。使ってみた経験では、日本の CD-ROM 検索ソフトは初心者にとってわかりにくく使いにくい。それに比べて米国製の CD-ROM は、それぞれのデータベースの特性を生かして、多方面からのアプローチがしやすく初心者でもわかりやすい。この違いが生じるのは、米国製の CD-ROM はオンラインサービスを行って実績を積んだ上で開発されたものが多いため、利用者の検索しやすい方法をよく理解しているからであろう。しかしそのように優れた CD-ROM も直輸入のままであるため、マニュアルも英語版である。このことは、図書館員も利用者も海外 CD-ROM について完全に把握できない理由の一つでもある。英語版を日本語に翻訳する作業は、現在の我々の状況ではとてもカバーしきれないので、代理店などでそうしたサポートサービスを提供してくれると切実に感じている。

#### IV. 今後の展望

今後情報センターにおいて、迅速かつ莫大な量の情報を提供できる CD-ROM の需要は、ますます増加していくことであろう。しかし、各 CD-

ROM はソフトウェアごとにハードウェアが決められているので、1枚の CD-ROM を購入するのにハードウェアについても考慮しなくてはならない。また、CD-ROM の数が増えればそれだけその管理も大変になってくる。現在では、増加する需要に対し、簡単には応じられない状況なのである。そこで真剣に考えられているのが CD サーバの導入である。CD サーバ (CD-NET) とは、複数のパソコンで構成された LAN (Local Area Network) と、CD-ROM 検索を結びつけることで、複数端末から1枚の CD-ROM への同時アクセスを可能にするものである。

東京工業大学図書館では、文部省から電子図書館構想の実験館に指定され、いち早くこの CD サーバを導入して利用に供している。同図書館の実調査により、複数の端末から1枚の CD-ROM へ同時にアクセスしても、検索スピードの低下は見られないということもわかっている。しかも、CD サーバ内に複数の CD-ROM を入れておけるので、CD-ROM の貸出をする必要もなく、管理が容易になる。さらに発展して、離れた場所から1枚の CD-ROM にアクセスできる CD サーバネットワークについても考察されている。国内ではまだその実現に至っている大学図書館は見られないが、海外では既の実現されたり、また今後実現していこうと考えているところも幾つかあるようだ。

将来は、国内でもこうした CD-ROM ネットワークが広がっていくことが望ましいが、コストの問題 (初期費用が高い、ソフトの価格が複数のパソコンで使うと割高になる、マルチユーザープライスになってしまう等) を始め、CD サーバで使えるソフトが限られている等、さまざまな問題が依然として残されている。

情報センターでは、『慶應義塾大学所蔵目録』の CD-ROM を開発し、湘南藤沢を拠点とした全塾的 CD-ROM 総合目録の形成を考えていた。そしてその開発もほぼ完成に近づいていたのだが、その後すぐ KOSMOS システム (全塾情報センターのトータルシステム) への移行の準備が始ま

り、KOSMOS システムの一環として、整合性があるような形に変えなくてはならなくなりました。そのため現在ではこの目録の二期開発が待たれるところである。このように、単なる商用のデータベースだけでなく独自の CD-ROM の研究・開発もなされている。

次に今後導入予定の CD-ROM について述べたい。既に三田の資料課で購入が決定しているものには次の2点である。

- (1) LISA (Library and Information Science Abstracts) ……図書館・情報学
- (2) Economic Census Report Series on CD-ROM (US Bureau of Census)

(2)は、1987年度の米国の膨大なセンサス統計データで、これらのセンサス類が今後急速に CD-ROM 化されることは注目に値する。利用者も CD-ROM から統計データをダウンロードして、パソコンの表計算ソフトを使って加工し、レポートや卒論に使うといったことは今後2～3年の間に広がっていくと考えられる。さらに、(1)法律判例文献情報 CD-ROM 版、(2)リーガルベース判例要旨全文 CD-ROM 等の導入も検討している。現在(2)は、判例要旨のみのものを導入しているが、全文を収録したものに切り換えたいと考えている。

また三田の情報サービス担当で導入したいと考えているのが、日、英、独、仏、各国の全国書誌である。全国書誌の冊子体はかなり量が多いのでスペースをとるといふことと、CD になれば多方面から検索できるというのが希望の理由である。図書館員自身もかなり頻繁に使うものなのでぜひ導入したいが、データ量が多いためディスクが足りないなどハード面の問題があり、導入は遅れている。また、全国書誌の他に Pais on CD-ROM (欧米の索引誌)も導入したいと考えている。

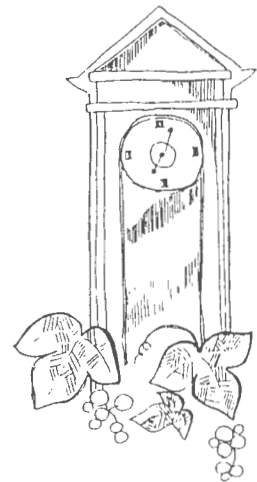
今後は、一人でも多くの利用者に有効な情報を手に入れてもらうよう PR に力を入れるとともに、図書館員自ら各 CD-ROM について完全に把握するよう努力しなければならない。また、日吉では CD-ROM 専用機を置き、利用者完全に開放できることを望んでいる。さらに、機会を設けて

利用者向けのセミナーの開催なども考えている。

図書館・情報センターは、単に資料・情報が置いてある場ではなく、利用者の調査・研究をサポートするために、利用者の最も必要とする情報を収集し提供する場である。我々図書館員はそのことを念頭に置き、利用者の要求の増大に伴って、研究・開発されてきた CD-ROM を始めとする電子メディアへの理解を深めていかなければならない。そしてスムーズなサービスに結びつけるためにはどうしたら良いかを常に考え、利用者と共に成長していかなければならないのである。

#### 参 考 文 献

- (1) Howard McQueen. "Remote dial-in patron access to CD-ROM LANs" CD-ROM Professional. July 1990, p. 20-23
- (2) James Harrington. "Searching SILVER-PLATTER" CD-ROM Professional. Nov. 1990, p. 12-15
- (3) Cheryl La Guardia. "CD-ROM networking in ARL academic libraries" CD-ROM Professional. March 1991, p. 36-39
- (4) 世界 CD-ROM 総覧 Vol. 3 1990
- (5) 松村多美子ほか "わが国の図書館における CD-ROM 利用の現状" 電子ライブラリー, 1(1): July 1991, p. 14-19
- (6) 大原寿人 "CD サーバの導入" 大学図書館研究集会記録 第11回, 1991. 4, p. 28-31





## 医学情報センターにおける CD-ROM の利用

いち こ  
市 古 みどり

(医学情報センター  
情報サービス担当)

なん の の こ  
南 野 典 子

(三田情報センター副所長付)

### I. CD-ROM の導入

医学情報センターでは、平成2年6月にCD-ROMによる文献検索サービスを開始した。この時点で、すでに国内のいくつかの医学図書館において、MEDLINE（米国国立医学図書館作成の生物医学分野における最も代表的な文献データベース）のCD-ROMは導入されており、これらの図書館における実際の運用方法や利用状況は当センターの導入に参考となった。

導入前の利用者の文献検索の状況は、MEDLINEの冊子形態であるIndex Medicusや、国内の医学文献を収録している医学中央雑誌によるマニュアル検索が浸透しており、また、オンラインによる代行検索は、平成元年度実績で月平均約120件程度あり、CD-ROMによる文献検索の要求度は高かったと思われる。

検索用のパソコン（ソニー QuarterL）は、CD-ROM 6枚を切り替えて検索できるようにするための装置（パイオニアCD-ROMチェンジャー）を付けた2台を用意し、今年度には新たに1台増設した。データベースとしては、Silver Platter社のMEDLINE、EXCERPTA MEDICA（医学・薬学）、PsycLIT（心理学）を購入している。

利用は、開館時から閉館30分前まで可能であり、検索項目、検索年の範囲、出力件数などを記録すること以外には特に規則もなく、自由に検索できるようにになっている。利用の予約は行っていない。

### II. CD-ROM 導入による変化

CD-ROM 導入後1か月間の利用状況は、「きたさとニュース」No. 138で紹介したが、1年以上経過した現在も、利用者の所属、利用時間帯、検索時間、検索年数、出力件数、検索結果の満足度等に大きな変化はない。利用者数は、利用記録用紙を置いてはいるものの完全な把握は難しい。回収数は1か月平均200件程度であり、実数を反映しているものではない。実際には、はるかにこの数を上まわっていると思われる。

CD-ROM 検索サービスの開始による大きな変化は、オンライン検索サービスの減少、利用指導の増加に現れた。当センターにおけるオンライン検索は、MEDLINEとJICST・医中誌国内医学文献ファイルの検索が中心となっている。平成元年度には、MEDLINEの検索は、1,282件行われていたが、昨年度は、544件となり、50%以上もの減少となった。利用指導数は、平成元年度は853件であったが、2年度は、1,283件となり、50%増となった。利用指導の増加はCD-ROMの利用指導の増加によるものである。

CD-ROMの利用の高さの要因としては、次のようなことが考えられる。

- ① 自分自身で検索することができる。
- ② マニュアル検索にくらべ、手軽に様々な角度から思いついた語で検索することができる。
- ③ 抄録を読むことができる。
- ④ EEP（Early Exposure Project: 医学部進学過程1年の後期から2年の前期にわたって行われる医療現場の体験学習）、自主学习（専門課程の2年および4年が、提示された研究テーマの中からテーマを選択して研究を行い、報告書としてまとめる）等カリキュラムの変化により、学生の文献検索の必要性が高くなっている。
- ⑤ 利用料金がかからない。
- ⑥ 操作方法が簡単である。
- ⑦ データのダウンロードができる。

### III. 利用指導

統計的な変化としては、上記のような数字に現

れているが、確実に参考系の業務は利用指導が中心になりつつあると実感している。利用指導は、  
a. 利用説明会（予約制） b. その都度 c. 図書館利用指導の一環として d. EEP などで行っている。

利用説明会は、昨年導入が決定した段階で広報活動を行い、予約制により、実際に検索を行いながら30分から1時間をかけて実施した。参加者は教職員のみであった。このとき、説明会に関するアンケート調査も行った。調査項目は、説明会の内容、説明会の長さ、配付資料、操作方法、今後の利用の可能性、オンライン検索の経験の有無である。その評価によれば、説明会は好評であったと思われる。また、オンライン検索に関しては、多くの参加者が、料金が高いことを指摘していた。

現在、CD-ROM 利用法の説明は、そのつど求められて一対一に対応することが多い。検索システムは、ユーザーフレンドリーであるとはいえ、利用者のパソコン経験やオンライン検索経験の有無により反応も異なり、また習熟するにつれて新しい機能の習得や、キーワード（Medical Subject Headings: MeSH）等にも関心がでてくることもあり、初心者に限らず、説明の必要が出てくる。こうした説明に関しても、導入時にアンケート調査を行った。調査項目は、利用説明会時の調査内容に加えて、利用目的と、オンライン検索を今後利用するかという項目を加えたものであった。この時の回答も、説明に関しては満足というものがほとんどであった。利用の目的に関する回答は、研究のためというものが最も多かったが、日頃検索過程を見ている限りにおいては、診断と治療に関するものも多い。オンライン検索は、個人的にアクセスしている人も含めて、今後も行いたいという人が大半を占めていた。

図書館利用指導や EEP での説明は、プログラムの1項目として行っている。そのため検索経験のない人が対象となることが多く、これをきっかけに検索を始めたり、もう一度説明を受けに来る人も出てくる。

利用指導を行う際には、指導者自身がまず機械

操作や検索技術、MEDLINE のシソーラスである MeSH および医学用語をよく理解しておく必要がある。さらにマニュアルの整備・説明方法の調整と練習などの準備も重要である。また、検索システムのバージョンアップは、利用指導や、マニュアルの改定に大きく影響する。

#### IV. 問題点と今後の課題

CD-ROM 検索サービスを始めて、1年半が経過した。CD-ROM は、研究・教育において大変重要な文献検索ツールとしてすっかり定着している。しかしながら、利用頻度が高い一方、機械的なトラブルも多くなっている。CD-ROM は、非常にほこりに弱いという欠点があり、しばしば検索の途中でパソコンを立ち上げ直すことがある。また、こちらが予想できないような使い方をされて止まってしまうこともある。最も頻繁に起こるのは紙づまりで、プリンタの警告音にすっかり敏感になっている。いずれにしても、検索機器類の保守は意外と大変なことであり、最低限のパソコンの知識は必要となる。

ある医学図書館へ見学に行った際、第一に MeSH の使用を勧めるということであった。先に触れたように CD-ROM の最大の長所は、思い付いた語から検索できることである。この便利さを抵抗なく理解し、利用してもらうためには、図書館員でさえ修得するのに時間を要する MeSH から入ることは得策ではないと思われる。思い付いた語で探したものがすべてではない、もっと違った探し方もあるのではないかというように、検索を利用者自身で広げたり試行錯誤しながら検索を進めて行くことができるようにするための利用指導の方法を追及したい。こうした利用指導の方法の改善のためには、利用記録にある検索項目の分析だけでなく、実際に行われている探索過程の観察結果なども重要な資料となろう。

文献検索ツールは、さまざまなメディアで提供されている。CD-ROM は、すでに多くの利用者にとっても最も重要なメディアとなりつつある。幸い医学分野においては、MEDLINE が信頼で

きるデータベースとして定着しているため、購入するデータベースの選択については、大きな問題もなく過ぎて来た。一方、文献検索に対する利用者の要求として、研究室や自宅からでも、アクセ

スできることを望む声が高い。このことは、すでに技術的には解決されていることである。今後は、こうしたサービスへの展開が必要となろう。

研究・教育情報センタースタッフの KULIC 研究会

第10回(平成2年11月14日)

於:三田情報センター

発表者 小川治之「差別価格問題について」

第11回(平成3年2月6日)

於:三田情報センター

発表者 原田 悟「全塾総合図書システムの運用について」

第12回(平成3年3月25日)

於:三田情報センター

発表者 大沢 充「義塾の蔵書管理について」

第13回(平成3年4月15日)

於:三田情報センター

発表者 石黒敦子「職員研修についてのアン

ケート集計結果」

第14回(平成3年5月27日)

於:三田情報センター

発表者 東田全義「ナショナル・ビブリオグラフィーについて」

第15回(平成3年6月24日)

於:三田情報センター

発表者 平尾行蔵「和書廻及入力事業について」

第16回(平成3年7月22日)

於:三田情報センター

発表者 渡部満彦「理工学情報センターの今後」

三田図書館・情報学会月例研究会

第64回(平成3年1月26日)

「図書館システム構築における電算機メーカーの役割」

発表者 浅田 格(ファコム・ハイタック株式会社)

第65回(平成3年3月16日)

「デンマークにおける図書館、情報サービスの現状」

発表者 Irene Wormell (GMD-Forschungsstelle für Informationswirtschaft)

第66回(平成3年7月13日)

「キャンパスネットワークと図書館——東京国際大学におけるデータベース形成」

発表者 芝野耕司(東京国際大学)

第67回(平成3年9月28日)

「日本の図書館における国際化——日米図書館会議をかえりみて」

発表者 Dr. T. F. Welch (慶應義塾大学客員教授, 前ノーザン・イリノイ大学図書館長)

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年刊の機関紙 Library and Information Science は、個人会費(年額 ¥3,000)、機関会費(年額 ¥5,000)を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学図書館・情報学科事務室(Tel.03-3453-4511 内線 3147)で受け付けている。

## 日吉情報センターにおける ライブラリー・オリエンテーション

やなぎ はる み  
柳 晴 美  
(日吉情報センター  
パブリック・サービス課)

### I. はじめに

現在利用者教育は、塾内の各センターで様々な形で行われていると思う。日吉でも1985年の新館開館以来、毎年、通年プログラムを作り取り組んでいる。本稿では、今年4月に行った新生生の為のライブラリー・オリエンテーションを取り上げて紹介したい。こうした活動において日吉は他のセンターと大きく違うと思われるからだ。

日吉では利用者のほとんどが教養課程の学生であり、その関心はあらゆる主題に向いている。また、毎年4月には、6,000人余りの新生生を迎えている。こうした学生は1～2年後、専門課程のキャンパスへ進学していく。従って常に、利用者に図書館を意識させる“ユーザー・アウェアネス”や、図書館の基本的な機能を理解させる基礎的な“オリエンテーション”が日吉の利用者教育の中心となっている。

悲しむべき事だが、日本の高等学校までの教育では、図書館の事はほとんど教えられていない。それ故、学生達は大学入学後、本がどのように並んでいるのかも知らずに、聞き慣れぬ用語にとまどう。私達は、できるだけ多数の利用者が短時間で図書館の機能を理解し、使いこなす事を望んでいる。また同時に公共施設を利用する際のマナーも守ってもらいたい。

しかし、こうした図書館側の希望はなかなか浸透しにくい。より効果的なアピールの方法はないか？ さらに、職員の欠員等で作業量に限界があるため、なるべく負担の少ない形で行えないかという事が、昨年までの反省点として挙げられていた。

### II. オリエンテーションの概略

4月のオリエンテーションに向け、前年11月中旬より準備を始める。企画やアイデアは日吉情報センター全体から募り、実際担当してもらう。また学生団体とも交渉し協力してもらうことになった。91年度のプログラムは次の通りである。

#### (1) トータル・テーマ「図書館のすすめ」

新生生に図書館が有益なものだということをアピールして利用を促す。このテーマは、ポスターやパンフレット類に共通キャッチフレーズとして入れる。

#### (2) 期間 1カ月(4月)

#### (3) 内容

##### A. ライブラリー・オリエンテーション

図書館の紹介ビデオ上映(15分)、館内ツアー(30分)。全13回。ここでは施設紹介、目録の使い方、図書や雑誌・その他の資料の所在、レファレンス・サービス、貸出・返却ルールの説明に重点を置き、それ以上複雑な内容は省く。ビデオの制作は学生団体「創造工房 In front of」に依頼する。筋立てはすべてまかせるが、盛り込む内容は、予め項目にして伝える。脚本もスタッフでチェックする。私語厳禁、利用券の携帯、飲食禁止、本を棚に正しく戻す事を特に強調する。撮影は3月に行い完成後試写会を行う。

##### B. 目録案内

Aでは盛り込めない、目録の説明や(テクニカル・サービス課と打ち合わせる)、雑誌記事索引の紹介をする。説明後にクイズや事例問題を出して、各自で探してもらう。全2回(各30分)。

##### C. 図書館活用セミナー

「図書資料の探し方」、「新聞雑誌資料の探し方」という題で文献探索の方法を紹介する。事例問題を使い資料としてレファレンス・ツール一覧を配布する。全3回(4～5月 各1時間)。

##### D. 映画上映……キャンパスものを4本。

##### E. 展示「福澤諭吉を味わう」

##### F. 広報

パンフレット……全体のスケジュールを盛り込んだものを入学式前、新生生に配布する。

ポスター……学生団体「広告学研究会」に制作を依頼する。「図書館のすすめ」をテーマとして利用を促すもの。

### Ⅲ. オリエンテーションの結果から

様々な企画を盛り込んだ、1カ月に及ぶオリエンテーションの参加総数は、400名余りであった。この数字は、昨年までの参加者数と較べるとかなり増えていることを示す。ツアー後にとったアンケート結果によれば、97%の人は参加してよかったと考えている。施設や本の所在、貸出ルール等は80%理解された。レファレンス・サービスについての理解は50%と低かったが、これに関しては、意図的に簡略にしておき、他の企画で説明するので問題はない。参加者の83%は、入学前に配られたパンフレットによる人で、ポスターを見ていない人が多いのは残念であった。恐らくサークル勧誘等のポスターにまぎれて目に止まらなかったであろう。しかし、ポスターを見た人の意見は賛否両論でなかなか興味深い。3人に2人は「斬新でシャレたデザインだ」、「参加しようという気にさせる」という良い印象を持っている。これに対し「病的」、「目にうるさい」という意見もあり、このポスターのインパクトの強さを示している。また学生達の持つ図書館への潜在的なイメージの一端もうかがえる。

ビデオについては、ほとんどの人が、有用性を認め好評であった。「去年よりストーリーが楽しい」、「自分もやってしまいそうな失敗が描かれていた」、「会話が自然だった」、「入門編として十分だった」、「自分も来年作ったり出演したい」という意見もたくさん寄せられた。あとは、技術に対する細かい批判や、ビデオ上映だけで十分とする意見もあった。この意見は、ビデオの内容が充実していることを語っている。ビデオは現在 AV コーナーにおかれ、随時利用できる状態にある。

文献の検索を案内した「目録案内」や「図書館活用セミナー」も、参加者の情報要求が同程度であるのでやり易かった。また、データベースや CD-ROM 検索も興味を持たれ、セミナー後は利

用が相次いだ。

昨年から、こうした企画を全館体制で立案し、しかも学生団体の協力を得て、良い結果を残せたと思う。彼らはこの企画に参加する事に、興味を持ち純粋に喜んでくれた。しかも、作成技術も私達よりはるかに優れており、こちらも作業量がかなり軽減された。何より図書館スタッフだけでは、どうしても管理的な視点で進めてしまいがちだが彼らもまた利用者であるため、私達と利用者の意識の差を埋めてくれ、その辺が学生達に受け入れられたように思う。しかし、作成者にあらかじめこちらの意図や基本的なガイドラインを完全に理解させ、作業過程でも随時、確認することは不可欠である。

オリエンテーション後の、利用者の反応は昨年までとかなり違うようだ。以前のように、1日に何度も本の借り方を聞かれることは少なくなったし、参考図書もさほど抵抗なく使用するようだ。館内飲食も随分減った。使った資料や椅子も放置されることは減ってきたように思う。一日数回の巡視、カウンターでのチェック、広報による呼びかけなど不断なく努力することもユーザー・アウェアネスにつながるのだと思う。

### Ⅳ. 終わりに

勿論、こういう形のオリエンテーションでは対応出来る数に限界があり、新入生全員を参加させるのが無理であることは否定できない。

すでに時代は電子メディアによる利用者教育を行うところに来ており、私達もそろそろその戸口に立とうとしている。これからは、要求があった時にいつでも対応出来るような新しい方法を目指していかなくてはならないだろう。今後も学生や教員と協力して活動をしていく姿勢を大切に、より良い利用者教育を目指して行きたい。

## 医学部史料について

なが きまき ゆきこ  
永 崎 由紀子  
(医学情報センター  
資料サービス担当係主任)

### I. 経 緯

医学部に関する史料(またはその情報)を収集、保管、展示するという事業は、安田健次郎医学部長(当時)の発案により1990年10月から始まった。これまでの主な活動は以下の通りである。

- 1990年10月 複製写真の受入  
史料寄贈の依頼
- 1991年1月 展示(新棟11階会議室前)
- 1991年2月 「医学部史料委員会」発足
- 1991年6月 定期展示開始  
(医学情報センター入口にて毎月)

そもものきっかけは、安田健次郎医学部長が、初代医学部長の北里柴三郎先生関係の写真を手にした事から始まる。これは現在も核となっているコレクションで、47種218点から成る写真は、すべて北里学園のご好意により同学園発行の「北里柴三郎記念館」(1987年)から複写させて頂いたものである。この写真の複製をきっかけに、慶應義塾大学医学部が創立からすでに70年を経過して、歴史的に重要な史料を散逸させないためには今をおいてないと感じ、医学部長から医学情報センターに史料の整理、保管の任を依頼してきたのである。現在のところ本の形態以外の「史料」を扱う博物館のような部署は医学部内にはなく、医学情報センターが最もその任に適しているという判断だったのである。さらに歴史を後輩に受け継ぐとともに、より多くの史料を集めるために展示を行えるよう、展示ケース2台が用意された。

要請を受けた医学情報センターでは医学部長室とも連絡をとりあい、資料サービス担当と総務担当で打ち合わせを続け、収集、保管、展示の処理手順を固めていった。

### II. 収集、整理、保管、展示の実際

現在この事業はようやく定期的な展示にまでこぎつけたところである。まずは史料の寄贈を呼びかけるということで1990年10月に、医学部長名で各教室、研究所、部局あてに文書を送付した。これに応え、卒業生を中心に続々と史料が提供された。史料の受付は医学部長室が窓口である。受付の際、現物の所有について3つの選択がある。登録(現所有者が所有のまま情報のみを登録する)、寄託(現物は医学部に置くものの所有権は現所有者のままとする)、と寄贈の3つだ。いずれの場合も登録・保管依頼書に史料についての由来、成立年代なども含めて記入してもらい、現物とともに受け付ける。

この後の事務手続き、整理、保管、展示等はすべて医学情報センターが担当している。様々な形態の史料の整理、保管については、図書、雑誌、またはせいぜいAV資料程度の経験しかない医学情報センターにとってはいまだ手探りの状態である。三田情報センターの貴重書室、東京江戸博物館などの作業を参考に、とりあえず簡単な手順書を作成しマニュアルとしている。登録順に登録番号を追込みで付し、登録台帳に登録する。前述の登録・保管依頼書も記録として受け付け順にファイルして残す。現物は封筒などの容器に納め、外側には内容を詳細に記録した史料票を貼付する。保管の際は整理番号順(形態ごとの分類に追込み番号)に並べている。史料票はコピーをとって現物と同一順序にファイルしシェルフリストとした。史料の検索のために人名や主題からひける簡単な目録カードも計画したが、全体数が少なく史料票ファイルまたは現物を見るだけで十分なのと、手間がかかるために現在のところ未作成である。いずれパソコンのデータベースにのせる計画もある。

保管場所は医学情報センター地下の倉庫部屋を片付け、スチールケースを備えこれにあてた。ややかび臭さはあるものの日陰で空調は行き届いており、いまだエアコンのない製本雑誌書庫よりはましな場所だ。

展示は資料サービス担当の2名が企画、実施に

あたっている。

最初の展示で苦労したのは写真の反りを押さえる、あるいは、ずれないための工夫、解説文の紙の質、レイアウトなどである。写真の安定には各種の両面テープなど試行錯誤を繰り返した結果、クリスタルの文鎮が見た目、効果ともに優れていたのをこれを現在も使用している。解説文はワープロでその都度レイアウトを考えながら厚手の艶消し上質紙に印刷して使っている。

当初展示は、1991年の新年祝賀会を最初の目標にすえたため、新棟11階の会議室前にケースを設置し、この会期中に最初の展示を行った。しかしこの場所は行事のある時以外は人通りのないところで、せっかくの展示の意味が薄らぐということで、医学情報センターに場所を移動することにした。ただし何分にもスペース不足の建物である。初回の展示対象の当本人、北里柴三郎先生の胸像に窮屈な思いをさせ、ようやく入口両脇に2台を設置した。

再開した展示は毎月内容を替え継続して行くことになった。最初の企画は冒頭に紹介した初代医学部長の北里柴三郎先生関係の写真を中心に先生の生涯を追うものである。一部は新棟の展示で公開済みだが、新生展示ということで初めからやり直すことにした。第1部は「生誕から熊本医学校時代」(6月)、第2部は「ドイツ留学(前編)」(7月)、第3部「ドイツ留学(後編)～帰国から北里研究所創設」(8月)と順調に実施中である。第2部では先生の論文が掲載された1890年のドイツの医学雑誌の現物も展示した。この雑誌は残念ながら当センターで所蔵しておらず、東京医科大学図書館から拝借した。今後も写真だけでなく様々な史料を積極的に展示に加えていく予定だ。

展示の場所が医学情報センター入口に移ったことで目論見通り多くの人の目に触れることになったようだ。実際たくさんの方が見物している姿を見かける。当センターへは塾の学生、教員のみならず、外部からも頻りに利用者が訪れる。それら学外の利用者にも当学部の歴史をアピールできるのは興味深いことである。また医学情報セン

ターの建物(北里記念医学図書館)は古いのが取柄(昭和12年竣工)で、少々薄暗いロビーもこの歴史的な展示には雰囲気があるともいえる。先進的な知識、技術を求める前に、先達の歴史を振り返るといった粋な趣向となっているのである。

### Ⅲ. 委員会

日常の活動とは別に、より活発な事業の推進のために「医学部史料委員会」が組織された。この分野に関心を持つ教員3名に医学情報センターから所長(委員長)、副所長と実務担当者2名を加えたメンバーから成る。

定期的な会合はなく、まだ発足委員会をもっただけだが、この事業のオブザーバーとして医学部当事者の発言が期待されている。この初回委員会では、今後広報を強化すること、将来は史料展示室での展示を目指すことが確認された。問題となったのは代価が必要な史料の予算、受け入れる史料の範囲(図書は医学情報センターで受け入れるか、評価により受け入れない史料もあるのか)等だったが、まだ結論は出さなかった。さらに、外来の患者に対しての展示も考えられる、データをコンピュータベースに載せられないか、新たな史料として医学部関係者の口述を録音してはどうかといった提案もされた。ただし、特別な人手や予算が保証されているわけではなく、いずれの提案も実現には至っていない。

### Ⅳ. 収 集 品

収集品は1991年8月現在整理済みのもので文書類2種2点、書跡1種1点、絵画類3種5点、写真53種236枚、その他2種2点、でほとんどが現物の寄贈である。一部を紹介すると、北里家から入手したという「第9回 伝染病講習生」の刻印のついた銀製のやかん、戦後間もない病院の焼け跡を描いた絵などがある。この他に未整理で、医学情報センターの蔵書とすべきか保留になっている図書9点、医学部病院ニュース編集部から預かっている旧中央事務棟地下から発掘された(?)写真類段ボール2箱分、さらに医学情報センターの

貴重書室に保存してきた卒業記念アルバムがある。いずれも眺めて飽きないものばかりで、特に卒業アルバムは医学部史料委員会のメンバーにも絶対的な人気があった。抜けている年のものはぜひ広く呼びかけて補充を計りたいと思っている。

## V. 今後の展開

とかく新しい知識にのみ目が向きがちな医学の世界だが、残すべき財産は確実に残していかなければならない。情報センターは特に機械化、メディアネット計画を推進中で、いわゆるニューメディ

アに注目が集まる。真に統合的な情報システムを目指すならこれら博物館的な史料もわれわれの扱う対象の範疇である。実際、東京慈恵会医科大学では「情報センター」は図書館、標本館、写真室で構成された複合的な組織として運営されている。義塾の現在の人手、予算の範囲ではなかなか積極的な展開はできない現状だが、最小限手遅れにならない内に集められる史料を集めておくということだけはしておかなければならない。これも医学情報センターの大切な任務のひとつと考えている。

## 小 展 示 ニ ュ ー ス

### <三田情報センター>

平成2年

7月16日～8月14日

稀本零葉集——古書零葉貼込帳——

8月15日～10月13日

日本における経済学の生誕と慶應義塾

10月16日～11月17日

我が国の近代法律学の確立と慶應義塾

11月26日～12月8日

『国富論』初期の諸版——アダム・スミス  
没後200年記念小展示

12月12日～平成3年1月12日

文学部開設百年記念出版『三田の文人』展

平成3年

1月14日～1月31日

近代日本社会学の草創と慶應義塾

2月25日～3月20日

江戸時代の一枚刷“寺社境内絵図”——  
『慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内

絵図 下 東海・関東・東北その他』刊行  
記念

3月22日～3月30日

『三色旗』表紙原画（矢内原勝画）展示

4月8日～4月30日

梅田晴夫展

5月9日～5月18日

ウェーランド講述記念日とブラウン大学

5月20日～5月31日

本の劣化——本は燃えている——

6月10日～6月25日

佐藤朔展

6月27日～7月2日

慶應義塾図書館蔵イギリス中世古写本

### <日吉情報センター>

平成3年

4月4日～4月26日

福澤諭吉を味わう



## 当世学生気質

こうのえっこ  
河野江津子

日吉情報センターのパブリック・サービス課員となって早一年余。学生時代、明るく開放的なこの図書館が気に入ってよく利用していたのが、今は図書館員としての立場から利用者である学生にサービスを提供している。

立場が変われば見方も変わるというわけで、仕事にも慣れ、余裕の出たところで周囲を見回してみると、やたらと目に付くのが図書館にやって来る学生のモラルの低さである。マナーの悪い学生は以前からいくらでもいたと思うが、やはり図書館員の側に立ってみると、その傍若無人ぶりが目立って見える。

まず、入館に際して利用券はおろか学生証さえも持っていない。館内を歩けば必ずジュースの缶に行き当たり、書架には(あるいは本にも)ガムが貼り付いている。グループ学習室と閲覧席の区別はないも同然、周りに勉強している人がいようがおかまひなしで、大声で私語を交わす。昼寝は椅子、ソファの上にとどまらず、階段踊り場のちょっとした段や床に直に横になっている姿も見られる(靴を脱ぎ、カパッと口を開けて熟睡している学生を見ると、本当にこれが慶大生かと情けなくなる)。また、オープンな造りになっているレファレンス・デスクでは、係員が席を外している隙にデスクの内側に学生が入り込み、当たり前のような顔をして文房具を使っていることもある。

大体マナー違反をしている学生に限って、それが悪いことだという意識が全くない。注意されて初めて自覚するか、なぜ怒られるんだろうとキョトンとする始末。一度、先輩図書館員が延々と続く私語をやめるよう注意したところ、その場は謝ったものの、「何でこういちいちうるせえんだろう」「自分達が働いてんの俺達がヒマそうだから、当たってるんじ

ないの」と小声でたまうのが聞こえて苦笑したこともある。注意するのは学生のためを思えばこそで、別に意地悪しているわけではないのだが。

そもそも私は、知的な専門職というイメージに憧れて大学図書館員になったのであるが、今のような状況ではアカデミックな雰囲気など何処へやら。「大学における研究教育活動の一助となるサービスを」と大仰に構えても、所詮学生が求めているのは図書館の資料ではなく、夏には涼しく冬には暖かい快適な空間だけなのではないかと思うとがっかりする。勿論、全部が全部このような学生ばかりではない。しっかりとした情報要求を持って質問にやって来る、礼儀正しい学生もいる。しかし、図書館利用の何たるかを知らない呑気な学生の方が、やはり大多数だと思う。

日吉キャンパスには、湘南藤沢の二学部を除く学部の教養課程の学生が在籍している。まだゼミ発表や卒論に縁のない学生相手にアカデミックな雰囲気を求めるのは、確かに無理かも知れない。しかし、いずれ彼らは専門課程に進級して、三田や矢上、四谷の図書館を利用することになる。日吉の図書館も満足に利用できない学生が、いざその段になっていったい何ができるのだろうか。

そう考えると、学生のモラルの低さにただ呆れかえってばかりはいられない。日吉の図書館は、学生が専門の勉強を始める前の基本的な利用教育を受け持っているわけであるから、マナーに反する行為には厳しく対処して、図書館利用の素養を身に付けさせなければならない。

といて、「ダメ」「できない」ばかりでは、学生は図書館にマイナスのイメージを抱いてしまう。学生の挙動に目を光らせてそのあら捜しをするような心境では、気持ちのよい対応はできない。学生の悪い点は当然注意すれど、その際にもサービス精神は失わないようにしたい。

カウンターから学生をながめつつ、こんなことを思う今日この頃である。

(日吉情報センター  
パブリック・サービス課)

## 国立大学複写料金支払いについて

たま い ゆう こ  
玉 井 裕 子

(日吉情報センター  
パブリック・サービス課係主任)

### I. はじめに

平成元年、文部省が「国立大学附属図書館における文献複写料金徴収猶予取扱要領」を定めた。従来、公私立大学が国立大学に複写を依頼する場合、ごく一部の国立大学を除いて、料金を前納で収めなければならなかったが、これにより実質的な後納が可能となった。この状況の変化に対応すべく、各センターから ILL 担当者と総務担当者が一同に会して「国立大学図書館に対する複写料金支払い方法に関する事務打合せについて」と題する会合を持ち、業務手順等について話し合いを重ねていった。本稿では徴収猶予制度に対して、慶應の情報センターがどのように対応し、どのような業務の流れを作り上げていったか、また、平成元年11月の実施以来二年を経過した各センターの現状と問題点について触れてみたい。

### II. 経 緯

国立大学の徴収猶予＝後納が私立大学の後納と大きく違うのは次の2点であろう。

#### ① 許可申請が必要であること

後納を希望する場合は、予め相手先の大学に徴収猶予の許可申請をしておく必要がある。許可がありると許可番号が通知される。申込みに際してこの番号を用紙に記入しないと前納扱いにされてしまう。許可番号は年度内有効で、従って申請は年度毎に更新しなければならない。

#### ② 納入告知書が発行されること

複写物には料金通知書が同封されるが、これは正式の請求書ではない。料金は徴収猶予の対象機関ごとに、ひと月分まとめて請求される。具体的には、国立大学は複写物発送日の属する月の翌月10日までに、当該月分の複写料金の合計を納入告知書（以下、告知書）の形で相手機関に通知する。告知書を受取った機関は、複写物発送日の属する

月の翌月末までに、告知された料金を指定金融機関に納入しなければならない。この支払期限に遅れると年利8.25%の延滞金が課される。

①の許可申請は、現在本部事務室が一括して年度末に行っているが、国立大学からの回答は以下のように全部で5つのタイプに分類される。数字は平成3年4月25日現在のものである。

A：1大学1許可番号（67校）

B：各センター毎に許可番号（19校）

C：寄贈（1校）

D：現行通り（1校）

E：現金書留希望（1校）

Cは複写申込みがあれば寄贈で送るというタイプ、Dは徴収猶予制度以前から後納だったタイプ、Eは現金書留での後納を希望するタイプである。いずれもこの徴収猶予制度には乗らず、従って許可番号も告知書も関係ない大学である。

さて、Aは慶應の5センターが1つの番号を共用するタイプだが、この場合、複写物と料金通知書は各センターに届き、告知書は5センターの分が一枚の告知書にまとめられて本部のある三田に届く。一方、Bは各センターに1つずつ許可番号が与えられ、複写物、料金通知書はもちろん、告知書も各センターに届くことになる。要するに1つの許可番号に対して1枚の告知書が発行される訳である。

Bタイプは、申込みから支払いまで各々のセンターで処理できるという点では、基本的に私立大学の後納と変わりはない。他方、Aタイプは支払いの段階で三田を通す必要がある。各地区から三田へお金をどう動かすか、それに伴う記録の処理はどうか、前述の会合で一番問題となったのはこの点である。当初は利用者から料金を徴収後、塾内書留で各センターから三田総務へ現金を送ることも検討されたが、結局、三田の経理と各地区の経理部門の理解と協力を仰いで次のような流れを作った。

すなわち、各センターはそれぞれの総務を通して毎月19日までに各地区経理部門に入金する（入金仕訳伝票が発生）。同時に、①料金通知書、②国立大学文献複写料金支払通知書（支払先別に支払金額、内訳を記入。Aタイプのために新たに作

成された様式、以下、支払通知書)、③入金仕訳伝票の3種類の記録を三田総務へ送る。三田総務は各センターから送られた記録と国立大学から送付された告知書を照合し、告知書と支払仕訳伝票を三田の経理に廻す。三田の経理は告知書に従って銀行振込で料金を各大学宛に振り込む。

こうした流れに乗せて平成元年11月から後納がスタートした。スタート直後は、告知書に記載されている納付期限と支払期限の意味するところが良く判らなかつたり、料金通知書が発行されなかつたり、延滞料の計算方法が相手大学によって違つたりというようにいろいろ問題があつたが、一年半を経過した現在の状況はどうであろうか。

### Ⅲ. 現 状

まず全複写依頼に占める国立大学への申込件数の割合が、徴収猶予制度の前と後でどう変化したかを各センターに尋ねたところ、三田は減少傾向、日吉と理工は増加傾向、医学は変化なしのことだつた。但し、三田の数字には徴収猶予の対象外の東大が含まれていたり、所蔵調査が含まれていたりして必ずしも正確ではないということ、スタッフの感触としてはむしろ増えているのではないかとのことだつた。日吉は前納と後納が混在しない昭和63年度と平成2年度の数字を比べると約4%強アップしている。理工は昭和63年度から平成2年度までに毎年1%ずつ増えている。医学の場合は、JMLA(日本医学図書館協会)加盟館の私立大学での充足率が極めて高く、国立大学へ申込みの必要性があまりない、などの理由で変化なしということだつた。

トラブルについては、申込みに際して、研究・教育情報センター所長印の押印を求められたり、告知書が必要な場合は、申込み時に備考欄にその旨明記するよう指示されたり、初めて徴収猶予扱いの申込みを受けたある大学が、告知書払いではなく、現金為替扱いにしてきた、というような国立大学側の対応のばらつきが目立つ。

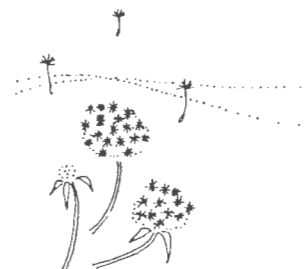
が、現場の担当者の感想として、文献入手までの時間が以前と比べ短くなつた、以前は申込先として国立は意識的に避ける傾向があつたが気軽に申し込めるようになった、NACSIS-CATの所蔵

情報を複写依頼に的確に反映できるようになつた、と概ね好評である。

一方、支払いを担当する総務、とりわけ全体の75%を占めるAタイプの支払いを一手に引き受けている三田総務は次のような問題を指摘している。告知書には金額しか記載されていない為、どの地区で依頼したものが判明するのは各地区からの入金と支払通知書や料金通知書の到着後である。ところが、各地区の入金が往々にしてぎりぎりになることと経理の銀行振込が水曜日に限られることが重なつて、振込が支払期限すれすれであつたり、へたをすると延滞日数にずれ込む可能性もあり得る。そのため相手大学からの入金催促の問い合わせがかなりあるとのことだ。また、Bタイプの告知書が三田に届いたり、Aタイプの告知書が各地区に届いたりするのは日常茶飯事で、国立大学側が必ずしも取決め通りに対応してくれていないようである。告知書も月末締めとは限らず、25日締めや五、十日(ごとうび)締めの大学もあるらしい。ただ、こうした問題はその都度、話し合ひで何とか解決しているとのことだ、因みに今までに延滞金を支払つたことはないそうである。

### Ⅳ. ま と め

徴収猶予が実施されて二年が経過している。その時々細かいトラブルはあるにせよ、Aタイプ、Bタイプといったタイプ別の対応はますます定着し軌道に乗っているようだ。複写料金の値下げと共に今回の徴収猶予はILLの現場に少なからぬメリットをもたらしてくれている。今後は、国立大学側の対応の統一化を望むとともに、毎年行わなければならない許可申請の簡素化、各センターで支払いが済むBタイプの増加を期待したいものである。



## 慶應義塾大学展示会に際して

丸善株式会社  
広報宣伝部一同

慶應義塾大学主催の展示会は、好評の内に回を重ね、合計5回を数える事になりました。昭和63年の(1)「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展を最初に、(2)「資料に見る日本食文化と食養史」展、(3)慶應義塾湘南藤沢キャンパス開設記念「広重・東海道錦絵日本橋より藤沢・箱根まで」展、(4)慶應義塾大学文学部開設百年記念「三田の文人」展、(5)目で見ると西洋写本文化と印刷文化「驚ペンから印刷機へ」展と、それぞれ特色のある展示会でした。

このような中身の濃い展示会の開催にあたって、丸善(株)広報宣伝部で協力出来る事は、貴学の研究、貴重な資料、文献を広く社会に発表するという文化活動の意義を正確に表現する事です。それには、先ず貴学の先生方との緊密な話し合いを行ない、その上で私たち広報宣伝部のスタッフで入念にプランを練ります。それで会場内の全体像を考え、会場レイアウトを作ります。私たちスタッフは資料全てに精通している訳ではありませんので、何をメインにどのような流れを作るのかというコンセプトづくりが、先生方と緊密な話し合いを行なっている、最も難しく苦勞するところです。

全体のイメージ、レイアウトが出来ると、次に展示ケースの選定、資料のキャプション、各種パネル等の製作に入ります。特にキャプション、パネルは誤字、脱字に神経を尖らせます。中でも年表などは、一字間違えれば歴史を変えてしまい折角の文化催事の意義を失ってしまう結果にもなりかねません。当然、ご担当の先生方には常に校正をお願いしていますが、私たちとしましても完全な物をと努力しています。

また、一人でも多くの人にこういった機会を見逃すことなく貴重な資料・文献をご覧頂けるような手法も検証し考えています。他にはポスター、DM

ハガキのデザイン及び丸善顧客リストによるダイレクトメール、新聞などマス媒体への広告の制作出稿等があります。ポスター、DMハガキの制作に当たっては、色校正の際に資料の色が正確に出ているか慎重にチェックを行ないませんが、何分にも現物の資料がある訳ではなく、カラーフィルムのみによる校正ですので刷り上がるまで心配のかぎりです。最後の仕上げとしてテレビ、新聞、雑誌等にパブリシティとして情報を提供するのも私たちの大切な仕事です。特にテレビによる紹介は、大きな効果が得られますので、色々な方面からアプローチをかけ実現に努めています。

こうして緊張のオープニングを迎える訳ですが、特に初めての展示会であった「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展の際に、石川塾長、清水図書館長のご列席もあり、失敗があつてはと15分間のオープニングセレモニーが倍以上に感じた思い出があります。

しかし、どの展示会の時にもご担当の先生方が非常に良く私たちを導いてくださり、原稿も切等、当方の依頼にも快く合わせて頂き、どの展示会も非常にスムーズに準備ができ、私たち広報宣伝部のスタッフ一同気持ち良く仕事をさせて頂くことができた事を心より感謝しております。更にこの様な素晴らしい文化催事が、丸善ギャラリーで行なわれた事は、ギャラリーのイメージアップと強いては丸善企業のイメージアップにもなる大変意義のある事と感謝いたしております。

一番最近、平成3年11月に催された「驚ペンから印刷機へ」展では、3,000人を超える入場者をお迎えしました。5人の講師の方による講演会や、カリグラフィー、印刷機の実演も好評で、盛況のうちに一週間の会期を終えることができました。

また次の企画の際にも、私たち広報宣伝部のスタッフ一同今まで以上の協力をお約束し、成功を収めるよう努力いたしたいと思っております。

## 続・広重東海道五十三次錦絵を読む

しろ いし かつ  
白石 克

(三田情報センター  
特殊資料担当課長代理)

これは、昨年「KULIC 第24号」に掲載され好評だった「広重東海道五十三次錦絵を読む」の続篇である。前回の日本橋から箱根に続き、三島から京都の中より十四の宿場が選ばれ、写真とその読解のための文章で綴ってある。残念ながら省略された宿があるため、順番を表わす数字は一連番号にはなっていない。前号と併せて読むことで、当時の旅の趣を味わって頂きたい。(編集委員)

### 12. 三島 朝霧 保永堂版

(天保3~4年頃刊)



東海道は箱根観光の中心地である芦ノ湖岸を通るが、当時の旅人たちは関所に向かう不安と無事通過できた興奮で、風景を賞でる余裕もなかったかもしれない。箱根外輪山を越える箱根峠(約1,000m)を過ぎると、三島宿まで10km以上もの長い下り道が続く。

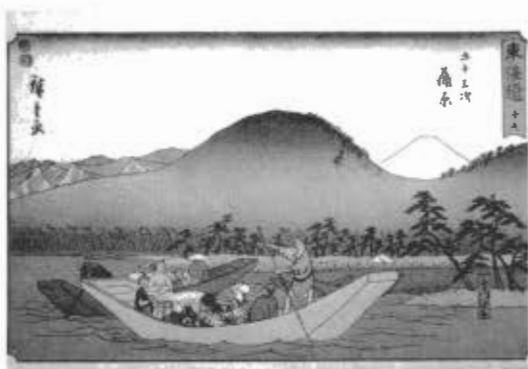
本図は箱根山の西麓にある三島宿の早朝の光景である。正面中央にある駕籠が山駕籠で、箱根の山道を越えるのに、都合よく作られている。底を丸くして広く編んでいるので、きつく揺すぶられても、客が足を痛めなかったともいう。前後の駕籠かきの担ぐ棒は丸竹で、屋根は網代に編まれていた。普通の宿駕籠に較べ丈夫にできているので、

見たところ粗野ではあるが、箱根のような険しい道には適していた。東海道の他では使用されなかったという。駕籠の背後の馬とともに、右方向に歩んでいるので、これから箱根越えに向かうことがわかる。馬は戸塚宿でふれた乗掛である。二つの荷の上には、道中合羽を着た男が乗っている。このマント型の合羽は“坊主合羽”或いは“引き回し(関西)”と呼ばれていた。馬の前には、むしろを巻きつけた男と、風呂敷包みを前に2つの荷物を棒で突き通し、振り分けに担ぐ男が歩いている。日常使う荷物は出しやすいように風呂敷に入れていたといわれている。箱根に向かう、この2人と馬や駕籠に乗る男は何れもうつつむいているので、寂しい表情に見える。広重は旅情の画家で旅の孤独を描いているともいわれているが、昔の人の姿勢の悪さを、そのまま写実したのかもしれない。

右に見える鳥居は宿場の中央北側にある三島神社である。源頼朝の故事により、代々の武家に信仰が厚く、現代でも境内は広い。三島暦が有名である。三島の町は富士山から流れ出る、清らかな湧水が多い。初冬に朝霧が多いのは、そのためという。図版がモノクロであるので、よくわからないが、背後の町並みは朝霧で影絵のように、ぼかされている。左には、後姿の寂しい巡礼3人が沼津に向かってる。

(沼津・原・吉原は略)

### 16. 蒲原 富士川渡舟 練書東海道(弘化刊)



富士川の渡しである。向かい側に富士山が見えるので、吉原方面である。現在では、製紙工場の

煙突が気になる市街であるが、当時の旅人は天に向かって聳えた、崇高な富士山の姿を見ることができたのである。

この絵は富士川西対岸の岩淵（現在の富士川町）近くである。岩淵は当時、茶屋が並ぶ休憩地であったが、室町時代は宿場であった。広重の東海道錦絵で“蒲原”というと、『夜の雪』と小題をつけ深々とした雪降る宿場を描く、保永堂版があまりにも有名である。しかしながら、他の東海道シリーズで、“蒲原”と題する絵はこの岩淵を描いたものばかりである。芸術的感動を別にして、広重は富士川の渡し場である岩淵が印象深い土地であったのかもしれない。

この川の渡し賃は当時1人24文（360円）であった。乗掛で乗った人の荷は29文（約430円）である。舳にいる頭に手ぬぐいを巻いた2人が駕籠かきであろう。旅人らしく、着物の上に埃よけの浴衣を着た女2人もこの前にいる。東西から出発した渡し舟が、今ちょうど川の中央で、すれ違ったところである。こちら側が西岸の岩淵で、富士川の河口でもある。ここから、内陸の甲斐国に向け沢山の荷物が舟で運ばれた。甲斐国側の河港は鯉沢である。また、日蓮宗の総本山身延山久遠寺への13里の道はここが追分でもあったので、沢山の信者の姿が見られた。このように岩淵は宿場ではなかったが、交通の要地であったので茶屋が立ち並び、そこでは名物の栗の粉餅・甲斐の龍王煙草・富士の芝海苔が売られていた。栗の粉餅は度々旅日記や道中記にその名が書かれている。

（由比・興津・江尻は略）

## 20. 府中 隸書東海道（弘化刊）

現在の静岡市である。徳川家康は將軍隠居後は、この地に居城して、天下に号令をかけていた。市街は大きく、東海地方の中心地であった。名物も多く、当時の道中記には、竹籠細工・紙子・藍鮫細工・茶などが見える。

この絵は町の中心部より、約2km西にある遊廓の二丁町である。町の入り口の大門は、東海道の道筋より少し南に入ったところにあった。この絵は大門外の華やいだ夜の姿である。今、馬に乗った客2人が二丁町に到着したところである。右側



の頬かぶりをして、刀をさした男の着物には紋が見えるので、武家であろうか。2頭とも、馬子がついているので、町から来た旅人と思われる。右側の駕籠も同様であろうか。或いは府中（静岡）の町内の人かもしれない。女たちが“おじゃれ。おじゃれ（お出であれ）。”と客を手招いている。提灯を持った女が門内に入って行く。中には男たちのたむろしている姿がある。その中央に女の後ろ姿が見える。客引き女と交渉しているのであろう。画面中央やや下方の按摩は、これから大事な稼ぎに大門に入るところである。この絵は「東海道中膝栗毛（十返舎一九）」にヒントを得て描いたものかもしれない。“弥二『空尻にのって、女郎買もおもしろい。おもしろい。』頓て爰より売尻馬に内乗、ゆくほどに、かの安部川まちといへるは、あべ川弥勒の手前にて、通筋よりすこし引こみて大門あり。爰にて馬をおり、（以下略）」に、この様子をかいま見ることができる。当時、遊廓で泊まることは禁止されていた。ここで遊んだ旅人はもう一度、2km東方の宿場までもどらなければならなかった。翌朝、眠い目をこすりながら、また二丁町の脇を通り、次宿の丸子に向かうとはお気の毒ともいえる。すぐ西方、安部川東詰めの茶店では名物の“あべかわ餅”が売られていた。

## 21. 鞠子 行書東海道（天保後期刊）

鞠子（丸子）は小さい宿場であるが、名物とろろ汁で知られていた。ほとんどの道中記や旅日記には書かれている。とろろ汁といえば、松尾芭蕉の“梅若菜まりこの宿のとろろ汁”（元禄4「猿



養」)が有名である。

この絵はまさにこの光景である。紅梅白梅の咲きほこる麗らかな春の一日、街道の茶店で二人の旅人がとろろ飯を食べている。手前の男は大口でかっこんでいるが、奥の男はもう一膳目はおわったらしく、椅子の上のお盆には空っぽのどんぶりがのっている。茶店のばあさんがおかわりを持ってくる。しわくちゃ顔のばあさんと二人は、大声で話し込んでいるのだろう。弥次郎兵衛と喜多(北)八のような、「膝栗毛」の世界の二人旅かもしれない。とろろ飯は一つまみの麦飯に、味噌でといた汁をかける仕立てようである。朝早く旅籠を出発した旅人は、丸子の宿場をただ休むだけでなく、旨いものが食べられると、楽しみにしていたのかもしれない。京都の食通の公家土御門泰邦は「宝暦十年庚辰正月東行の話説」で、『唯怨むらくは味噌のあしきに鼻も開きがたく……』といった。高貴な公家にはあまりに野趣すぎたのかもしれない。茶店の中を見てみよう。手前の壁に掛け軸のようなものが下がっているが、これは出版社の広告で、「馬喰町四丁目板元江崎屋」である。その隣には旅に必要不可欠のわらじと道中笠が掛けられている。わらじは当時茶店では16文(240円)ぐらいで売られていたようだ。本館所蔵の飛脚の旅日記をみると、毎日1足づつ買っていることがわかる。この飛脚は、普通の旅人と変わらない速度で歩いている。土壁の割れ目には、ぼろ隠しに絵が張られているが、これは広重の道中錦絵であろう。店の奥には、酒の肴に干魚が並んでいる。

(岡部・藤枝は略)

## 24. 島田 大井川駿岸 保永堂版 (天保3~4年頃刊)



島田は、東海道一の難所『越すに越されぬ大井川』の東岸に控えた大きな宿場であった。この絵は大井川の島田側(駿河側)鳥瞰図である。画面がロングであるので、人物はすっかり小さくなっているが、それでも河原の様子がわかる。この川はふだんは水量が少ないが、南アルプスから流れ落ちる川なので、一雨でも降ると、激しい流れとなることが多かった。この付近では流れが幾つにも分かれ、渡し船をおくことは難しかったともいわれている。また江戸幕府を守るために、不便な徒歩渡しを無理強いしていたともいわれているが、実際には島田や金谷の宿場や渡し人足を養うために、渡し船や橋をかけていなかったようでもある。人足だけでも、幕末には650人もいたという。

この絵は大名行列の川渡しである。身分に応じて肩車・輦ねんたいで行列は渡る。江戸後期でも、大名の一行は少なくとも60人、一番多い加賀前田家は2,000人もいたので、大変な騒ぎであったはずである。川越の料金は水量によって決められ、川岸の川番所で川札を売っていた。札1枚は水量の少ない「膝通」で38文(約500円)、常水(約76cm)の「帯通」で58文(約800円)、一番深い「脇通」は94文(約1,400円)であった。水深が常水(約76cm)を越えると、肩車でも手張り人足がつくので、札2枚が必要になる。画面に見える大人数は大名行列であるので、輦台を沢山使う。札には川札と台札があるが、川札の料金に換算して各種の輦台を計算(常水の「帯通」の深さで)してみると、かつぎ手4人の台は川札6枚で348文

(約5,200円), 手すりのついた4人の台は8枚で464文(約6,900円), 同様のかつぎ手10人の台は36枚で2,088文(約31,000円), 四方手すり四本棒(大高欄)の立派な台は52枚で3,016文(約45,000円)である。見栄はあっても内情のきびしい大名家にとって、川越だけでも大変な負担であったはずである。大名行列が渡るだけで、何十両(1両は約10万円)という出費がかかっていた。

“脇通”4尺5寸(約136cm)を越える水深となると、川止めとなり、川の前夜の宿場はいっぱいとなり、民家にまで泊まらなければ間に合わない状況になった。付近の住民にとっては、迷惑ではなく、かえって大事な現金収入になっていたのかもしれない。

(金谷・日坂・掛川・袋井・見付・浜松・舞坂は略)

### 32. 新居 狂歌入東海道(天保後期刊)



海上1里(約4km)の渡し船を降りると、新居の関所(今切の関)である。構内の一面に船着き場があるので、旅人はそのまま関所に入る構造になっていた。箱根と同様に、開門時間は明け六ツ(旧時刻午前6時)より暮れ六ツ(同午後6時)迄である。関所の建物が現存しているが、これは安政2年(1855)に3度目の場所に建て替えられたものである。この関所は慶長5年(1600)に設置されてから、地震や津波などの災害で改築と移転を繰り返している。画面左方の番所傍らには、旅人を威圧する刺叉・袖がらみ・突棒・長柄の捕物道具が立てられている。水ぎわの常夜灯の前を、今降りた旅人が番所に向かう。この関所は鉄砲と

女の調べがやかましかったので有名であった。江戸幕府は江戸に武器が大量に入ると、婦人の移動には神経質であった。始めは人質である大名の奥方の江戸出奔を阻止する手段でもあった。箱根の関所では江戸時代中期を過ぎると、鉄砲の調べをしなくなったが、この関所では後まで改めが続けられた。婦人の調べは厳しく、道中手形に押された印や記載(髪型・傷痕等)に違いが見つかり、関所を通ることができなかった。このほか、新居の港に入る船荷の調べも行っていた。この地は、奥深い浜名湖への海上の入り口に位置している。

帆をはらした船の背後に見える陸地は、対岸の舞坂であろう。舞坂から船賃は18文(270円)であった。雑談の花が咲いた1里の海上の乗合船から、関所の改めに入る様子が「膝栗毛」に見える。“……これをなだめるうち、ふねははや、あら井ちかくなる。せんどう『サアサアお関所まへでござる。笠をとって。ひざをなをさっしりませ。ソレソレ舟があたりますぞ。』のり合『ヤレヤレとどこほりなくついて、めでたいめでたい。』ほどなくふねはあら井のはまにつきければ、のり合みなみなふねをあがり、お関所を打ち過ぎける。弥次郎北八もふねをあがり……”。

(白須賀は略)

### 34. 二川 隸書東海道(弘化刊)



遠州灘上に広がる青い空をバックに、茶屋が立ち並ぶ風景である。中央遠方に家並みが見えるが、白須賀の宿はずれの建物であろうか。この絵には、『二川』の題があるが、白須賀の宿場を出てすぐ隣の猿ヶ馬場(現在の境宿)である。遠江と三河



の境“境川”も近い。広重の絵本「東海道風景図会」のはしがきに“一丁毎に五十三駅の署名あれども、ことごとく其駅を図するにあらず。駅の前左右にある所の名所旧跡、あるひは佳景の地を略図するなり”と書かれるように、広重の東海道錦絵は宿場でなく、途中の立場を描くことが多い。この猿ヶ馬場は、各道中記に記されるように、柏餅が名物であった。「東海道名所図会（寛政9-1797-刊）」を見ると、小豆を包んだ餅を柏の葉でくるんでいるので、現在我々の食べる柏餅と同じような作り方である。しかしながら、評判は芳しくなく、かなりの酷評をいう者もいた。左側の茶屋では、こちらを向いた男が左手に茶碗を持ち、パクついている。こちら側を背にした男は、もう食べ終わってしまったのか、たばこをふかしている。こちらの男は脚絆をつけておらず、股引きのままである。茶屋の中の看板は「名物柏餅」。

右側の茶屋の前に、いま駕籠が2丁到着している。駕籠かき2人と客の間はうまくいってないらしく、大声をあげているようにもみえる。どうやら、ここは「膝栗毛」を題材にした絵らしい。駕籠の下敷きの布団から四文銭1本を見つけだした喜多八が、前の客の忘れ物と大喜びして、猿ヶ馬場で駕籠かき4人に酒をはずみ、380文（約5,000円）も飲まれてしまう。ところが、すぐに駕籠かきから“ヲヲそれぞれ。モシ旦那。あなたの乗てござらしゃる、ふとんの間に四文銭一本いれておきました。あるか見てくださりませ。”といわれてしまったところであろうか。

（吉田は略）

### 36. 御油 旅人留女 保永堂版

（天保3～4年頃刊）

宿場町の夕暮れ時はあわただしい。ここ御油は特に騒がしいことで有名な宿であった。隣宿の赤坂とはわずか1.7kmしか離れていなかったため、両宿は客の取り合いが激しかった。1.7kmといっても宿場の中心からの距離のようである。実際には、御油と赤坂の間には約600mの松林があり、その外側まで、いずれも宿場の家並みが続いていた。実にすざましい光景である。顔を真っ白に塗りたぐった女2人が、がむしゃらに旅人をとらえ、



離すものかと一心に押さえている。毎日こんなことをしているせいか、2人とも肩の筋肉が盛り上がり、いかにも遅しい。前にいる男はまことにだらしない。首をしめられ、もはや逃げるすべもない。後ろの笠をかぶった男は必死にもがき逃げようとしているが、はてさて旨く逃れることができるだろうか。当時の規則では暮六ツ（夕6時）迄に旅籠に泊まらなければならなかった。客引きに“ここいらで泊まらないと日が暮れてしまいます。”といわれれば、先の不安が起きて、その宿に泊まるのが旅慣れない者の常であったのかもしれない。右側の旅籠の中にはすでに客が入り、婆さんのもってきた盥の水で足を洗っている。この男も少し前に客引き女に引き込まれたのだろう。いかにも無表情な顔に見えるが、捕まってしまったという、あきらめの境地なのかも知れない。

この町並みをよくみると、この絵には近くが大きく遠くが小さい、遠近法が使われていることがわかる。連子格子の背の低い二階屋が続く典型的な宿場の家並みである。右の旅籠の内壁には、「竹之内板」と版元名（保永堂の姓）、その上に掛けられた表札は、右から「東海道続絵」「彫工治郎兵衛」「摺師平兵衛」「一立斎図」と、本シリーズ制作者一同が掲げられている。この絵が広重の自信作であるため、関係者を全員並べたという説もあるが、むしろ東海道シリーズの出版が半分を越え、版元一同手綱を閉め直そうという心意気をしめしているのであろう。御油から京都まではまだ17宿もある。広重のもう一つの街道シリーズ『木曾街道六十九次』のうち、34“賢川”は本図同様、版元と製作関係者一同の名が書かれている

が、舞台を見ているような凡庸な構図である。  
(赤坂は略)

38. 藤川 棒鼻ノ図 保永堂版  
(天保3~4年頃刊)



宿場の東入口である。平塚で説明したように宿場の入口には案内板や表示板が立てられていたので、棒鼻と呼ばれていた。左右には石垣が組まれ、宿内は街道とは区別されていた。

今、御幣をつけた馬2頭を囲んだ行列が宿場に入ってくる。宿役人2人が土下座して、かしこまり、行列を迎える。おそらく江戸幕府が京都の御所に送る、八朔御馬献上の行列であろう。旧暦の8月1日には八朔の祝いが行われ、御所や公家の間には、贈り物のやりとりの習慣があった。幕府にとっても、この日は家康が江戸に入府した天正18年(1590)8月1日にちなみ、重要な祝日であった。広重は天保3年(1832)、絵師としてこの行列に同行し、京都に上がったといわれている。今ならば、同行カメラマンといったところであろう。馬の前に見える挟み箱の紋は五枚笹に似た、はっきりしない紋であるが、同じ構図の『狂歌東海道』池鯉鮒のかたばみ紋同様、徳川家の葵の紋を示したものではないだろうか。疑問はあるが、ともかく天保3年上洛説に従って、考えてみたい。8月1日は現行の8月26日に当たる。本館所蔵「二条家内々番所日記」をみると、この夏は暑かったらしく、6月18日(現行の7月15日)から8月29日まで1日の曇りもなく、晴天が続いたことが記録されている。八朔の前日夕刻4時頃に雷があったこともわかる。広重の東海道の旅は猛暑に責めら

れたことだろう。公務の旅であるので、遅れたら大変なことになる。平常なら、2週間あれば京都に到着するのが、大井川など大きな川の多い東海道は、どこで川止めに会うかわからない。随分早めに江戸を出発したのであろう。これだけ暑い晴天が続けば、まず川止めにあうことはなかったろう。広重の東海道錦絵シリーズには雪景色も多いが、実際には猛暑の旅であったといってもよいだろう。もう一度絵をみたい。土下座した人々の左には仔犬がころげまわる姿がある。その左にかしこまって座っている仔犬がいるのも愉快だ。この取り合わせこそ、現代の芸術観では解しえない錦絵の楽しさである。

(岡崎・知立は略)

41. 鳴海 名物有松絞り店 隸書東海道  
(弘化刊)



街道には、土蔵造りの店屋と倉が並んでいる。この絵は鳴海宿手前約2km有松の町並みである。店に掲げられた看板には『名物有松絞』と書かれている。紅や藍色に染められた美しい絞り木綿が店の中に掛けられている。当時の道中記はいずれも名産として記している。左側に山地、右側に有松絞りの問屋が並ぶ、街道は見事に遠近法で描かれている。中央には旅姿の婦人2人がいる。右側の婦人は絞りの浴衣を着ている。有松絞りは当時、江戸で流行していた。これだけ沢山絞り地が並んでいるのを見てしまっは、このまま店屋の前を通り過ぎていくはずはない。2人とも店に並ぶ絞り地に魅きつけられている。これから店に入り、買い物をしてしまうであろう。右側には風呂敷で

荷を背負った商人が歩く。その手前堀際には防火用水が置かれている。漆喰を塗り固めた土蔵造りの商家が並ぶこの町は、随分火災に気がかっていたのだろう。商人の前を見ると、店頭で旅の男がいる。店の中をのぞいている様子である。奥さんや娘の土産にほしいのだが、入るにはきまりが悪いという、中年男の姿を描いているのだろう。40代半ばの広重自信の姿かもしれない。この有松絞りと鳴海絞りは両者ともに江戸時代から知られていた。もとは有松で作られ、鳴海で販売されていたともいわれているが、両地で作られていた。「膝栗毛」の弥次郎兵衛はこの有松で、さんざん値段を聞いて、手ぬぐい1枚分だけ切ってもらっている。広重の鳴海宿の絵は他のシリーズも本図と同様、土蔵造りの町並みの絵ばかりである。古くから、この絵は有松なのか、鳴海なのか問題になっている。しかしながら、蔦屋吉蔵版(中判)には本図と同図柄で、「有松里」と題されている。この町並みは現在の有松とよく似ているので、この絵はやはり有松とするのが妥当であろう。本稿では、有松とした。

(宮・桑名は略)

#### 44. 四日市 日永村追分・参宮道

隸書東海道(弘化刊)



四日市宿、西はずれの日永で、東海道と伊勢神宮に向かう参宮道(伊勢道)は分かれている。ここを日永村追分という。中央の大きな鳥居から先が参宮道で、左右には茶店が並んでいる。この名物は鰻頭である。各道中記に記されている。左右の茶店の看板は「名物鰻頭」である。右側の茶

店には、大口を開いてぱくついている男の姿が見える。桜の花が満開で、旅をするのに最もよい季節である。この鳥居から、伊勢山田(下宮)まで16里(64km)ある。参宮道に入ると、伊勢の参拝客が目立ってくる。鳥居の下に子供が3人いる。江戸時代を通じ、何十年に一度は伊勢参りのブームが起こり、沢山の人が神宮へと向かった。この子どもたちは、伊勢へ伊勢へと親元や奉公先から、着のみ着のまま飛び出してきた抜け参りである。柄杓を持ち、背中にむしろを背負う格好は彼らのティピカルな姿である。この柄杓さえあれば、道中はなんとかなったようだ。人々からの施しを柄杓で受け、旅を続けていくのである。ブームの時には、参宮道に入れば、泊まりも食事も物持ちや街道の庶民が世話してくれたという。かわい子には旅をさせるために、親は見ぬふりをして旅立たせたというが、今と比べ当時の治安は非常に悪い。鳥居の手前には首に御幣をつけた犬がいる。犬の伊勢参りである。広重の「伊勢参宮宮川の渡し」には、大勢の人に混じって同様の白い犬の姿が描かれている。阿波徳島で飼われていた犬が、一匹で参詣したという話もある。家族の者が出かけられないので、犬が代参したこともあったのだろうか。犬なら近所の人たちと一緒に旅ができるかもしれない。今、犬に声をかけている男女がいるが、これも伊勢参りであろう。右側の茶店の前には従者に振り分けの荷物を持たせた武士がいる。このあたりは、一日中賑やかなところであつたらう。茶店の女の呼び声が聞こえてくるようだ。東海道は右の茶店の右方にある。

(石薬師より石部まで略)

#### 53. 草津 狂歌入東海道(天保後期刊)

草津は東海道と、上州や信州木曾路を越えて来た中山道との合流地であるので、繁盛した宿場であつた。本陣は2軒、脇本陣も2軒あつた。

大きく描かれた茶屋は名物の姥が餅屋である。宿場から約1kmばかり南方、次の宿場大津寄りの立場(保土ヶ谷宿参照)矢倉にあつた。鳥瞰図であるので、姥が餅屋のこちら側には木皮葺きの屋根に、石を乗せた民家も描かれている。茶屋の大屋根にかかる看板『うばもちや』、左の軒下に



は『うばが餅』が下がっている。姥が餅は戦国時代、佐々木家曾孫を育てた乳母うばに由来した餅であるので、小さな餠餅の上に乳首の形をした白餠をのせたお菓子である。現在では代が替わり、店は立場の矢倉から、国道1号線際に移っている。駅前にも店舗があるので、草津の代表的なみやげ物として知られている。店の中には、餅を食べている客が随分見える。各道中日記に見える菓子となると、旨いはずは別として、かなり客が入ったことだろう。今男女3人が出発しようとしている。背後の菓子桶には、できあがった餅がいっぱい入っている。その右側には重箱が積み上げられている。その手前の柱にも看板が下がっているが、これは『京橋仙女香』で、江戸のおしろいの広告である。その前には余りの重さに耐えかねて、足をふんばり頑張る馬がいる。休憩の駕籠も2挺いる。右側の駕籠では人足が汗を拭いている。相棒は店前にかがみ、履き換える新しいわらじを盛んにたたいている。左側に門が見えるが、こちら側から奥の座敷に入る。反対側、店の右側は東海道から琵琶湖岸の矢橋やばしに向かう道である。ここから約3kmである。矢橋から大津まで船便があった。1人15文(230円程)(弘化元年)かかる。矢橋の地は矢橋の帰帆で知られた景勝地であった。しかしながら、対岸の比良山(1174m)から吹きおろす寒風“比良の下風おいて”に悩まされたようだ。

#### 54. 大津 走井茶屋 保永堂版

(天保3~4年頃刊)

大津宿を出発すると、すぐ坂道となり、道は逢坂山おうさかに入っていく。旅人は山科の盆地まで山中

を歩かねばならない。この絵に見える走井茶屋は逢坂関跡を過ぎたところにあった。これから山科まで下り道になる。茶屋の前には綺麗な水が勢よく流れ出ている。これが本図小題の走井である。桶の水を取り替えたり、疲れを癒す人々が立ち寄っていた。井筒には『走井』と彫られ、茶屋の暖簾にも『走井』と書かれている。井筒はたびたび取り替えられたらしく、古い一つは現在でもこの付近で水道口として使われているようだ。この茶屋で作られている走井餅も、草津の姥が餅同様に当地の名物であった。明治になり東海道線が引かれると、この旧東海道に沿う店屋は寂れ、この茶屋も閉店してしまった。この走井餅の名は代替わりされ、よその店がその名を用い、今も販売されている。ただし明治時代に分家した一家が、現在も京都の石清水八幡宮の門前で走井餅を作っている。この広重の絵を見ると、この餅は白・黄・黄緑の三種が作られていることがわかる。白は大福、黄色は黄粉、黄緑は鶯黄粉にも見える。京都駅などで駅売りされている。代替わりして名を受け継いだ上記の餅はこの作りである。「東海道名所図会」に描かれた走井餅は白く細く小さな餅である。石清水八幡宮門前の走井餅はこの作り方に見える。この店のご主人にうかがったところ、広重は絵が綺麗になるようにこのように描いたとの由であるが、今となってはよくわからない。

茶屋の前を米や薪を満載した牛車が三台通っている。牛の上には日除けが掛けられている。大津と京都の間にはこの逢坂山と日岡峠(京都の東側)の二つの大きな峠があり、荷を乗せたこのような牛車が数多く通っていた。日本海側の米や産物が

琵琶湖から船で大津まで運ばれ、牛車に乗せ換えられ東海道を大阪に向かったためである。この絵には描かれていないが、坂道を登る牛車のために、二つの峠道には、車の轍の幅に溝が彫られた車石が敷かれていた。

### 55. 京 隸書東海道（弘化刊）

五十三次の旅も無事におわり、終着駅の京都三条大橋に到着した。広重は天保3年（1832）、京都に初上りしたといわれている。38. 藤川で述べたように、御所に献上する八朔馬の行列に随行す



る絵師としての旅であったようだ。天保3年の八朔は現行暦の8月26日に当たっているのだから、彼の旅は夏の真っ盛りであったろう。毎日かんかん照りで埃だらけの道を歩き、夜はクーラーもない部屋でうちわだけが冷房であるという旅は厳しいものであったろう。街道の両わきに植えられた並木の松の木陰は、旅人にとってどんなにか救いであったかと思われる。

広重はこの東海道の終着駅である三条大橋にたたずみ、江戸から500kmの苦しい長旅を想い起こしたことだろう。橋の上には沢山の人がいきかう。さすがに江戸と違い京都の風俗は雅びである。江戸育ちの広重には、目を見張るものばかりであったろう。公家の婦人達は絹被衣をかぶり、従者に日傘を差させた武士や婦人もいる。こういう姿は江戸ではとうの昔になくなってしまっていた。町を歩く婦人の着物の柄もすばらしい。絵師の広重はさっそく、この風景をスケッチしたことだろう。橋の上には竹の先に茶笥を差した茶笥売りもある。宇治の茶所をひかえた行商である。頭巾をかぶり、

小さな風呂敷を背負っている。その左には、京都の北郊外大原の里から来た大原女2人がいる。山地で作られる木地細工や、柴・黒木を頭にのせている。紺の木綿衣に、御所染めの帯をしめ、白い手甲と脚絆をつけている。広重の絵には見えないが、花売りの白川女の姿も町中で見られたはずである。三条大橋の背後の景色を見てみよう。東山の山並が続いている。中央の、山裾から中腹まで家並みが続くところは清水坂と清水寺である。左下には八坂の塔も見える。その左方の大きな屋根は知恩院であろうか。広重は初上りの天保3年（1832）から安政2年（1855）迄、出版社の依頼に応じて当たり役の東海道シリーズを二十数種類も描いた。この時描写したスケッチや「東海道名所図会」を参考にしたものと思われる。広重ほどの達者な絵師になれば、夏のスケッチから自由に春・秋・冬の景色に描きかえることができたのであろう。東海道錦絵シリーズには、四季折々の街道風景が描かれている。



参考1 池鯉鮒（知立） 狂歌入東海道（天保後期刊）



参考2 桑名 海上七里ノ渡口 行書東海道（天保後期刊）

## 資料 I

### 研究・教育情報センターに関する書誌 1990.8~1991.7

〔日吉〕

“ますます便利になる図書館を利用しよう” 慶應義塾  
大学報 No. 222, p. 2-3 (1991. 4. 1)

“悪質2名を無期停に——図書不正持出し、経済学部が  
処分” 慶應塾生新聞 No. 246, p. 2 (1991. 6. 10)

〔医学〕

“医学部の歴史的資料——保管委員会設置決まる” 慶  
應義塾医学部新聞 No. 476, p. 1 (1991. 2)

“学内専用線で医学情報提供——慶応大、米 NLM と  
提携” 日本経済新聞 1991. 5. 8 朝刊 p. 15

“医学部に関する歴史的資料の収集状況” 慶應義塾醫  
学部新聞 No. 480, p. 1 (1991. 6)

〔湘南藤沢〕

“大学・新しい波(8)時代に合った人材育成——慶應  
義塾大学” 信濃毎日新聞 1991. 6. 5 夕刊

“慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)で、新しい  
発想や発見を生みだしています。ソニーの開放型  
分散処理ワークステーション”(SONY 全面広告)  
日本経済新聞 1991. 6. 11 朝刊 p. 16 他

## 資料 II

### スタッフによる論文発表・研究発表 1990.8~1991.7

〔論文発表〕

〔三田〕

深沢華子 “図書館とおらがくん” 慶應義塾大学報  
No. 220, p. 2 (1991. 1)

東田全義 “秘蔵(35)ギョーム・ビュテ『ギリシャ語  
考』パリ1529年” 三田評論 No. 917, p. 120-121  
(1990. 8/9)

東田全義ほか “座談会「利用指導にペレストロイカを」  
図書館雑誌 Vol. 84. No. 9, p. 624-627 (1990.  
9)

東田全義 “西洋古版本研究における図書館員の役割”  
第10回西洋社会科学古典資料講習会レジメ (1990.  
10)

東田全義 “スミス『国富論』第4版ロンドン1786年”  
塾 Vol. 29, No. 2 表紙 p. 3 (1991. 4. 1)

樋口恵子 “大学図書館の将来に関するデルファイ調査”  
Library & Information No. 28, p. 21-59 (1990)

樋口恵子 “日米大学図書館員による大学図書館サービ

スの将来予測” 第11回大学図書館研究集会記録  
p. 75-79 (1991. 4)

平尾行蔵 “紙から磁性体への記録媒体の変化は典拠作  
業の本質に影響を及ぼすか” 情報の科学と技術  
Vol. 41, No. 2, p. 107-112 (1991. 2)

広田とし子 “文献探索とデータベースの利用——経済  
学分野の探索” 三色旗 No. 509, p. 8-11 (1990.  
8)

風間茂彦 “三田文学ライブラリーのマイクロフィルム  
化” ふみくら(早稲田大学図書館報) No. 27, p.  
8 (1990. 12)

宮木さえみ “文献探索とデータベースの利用——法律  
学分野の探索” 三色旗 No. 509, p. 11-14 (1990.  
8)

新倉利江子 “大学図書館における人文科学分野の研究  
者を対象とした情報サービスの可能性” Library  
and Information Science No. 28, p. 61-80  
(1990)

小川治之・宮木さえみほか 差別価格ワーキンググループ報告書 (1991. 6. 20)

佐藤友里恵ほか “わが国の図書館における CD-ROM 利用の現状” 電子ライブラリー Vol. 1, No. 1, p. 14-21 (1991. 7)

関口素子 “学術雑誌総目録と文編全国調査をオンラインで入力して” 逐次刊行物研究分科会報告 No. 48, p. 121-124 (1990. 9)

渋川雅俊ほか “Strengthening the U.S.-Japan library partnership in the global information flow: 4th U.S.-Japan Conference on Libraries and Information Science in Higher Education, Racine, Wis., October 3-6, 1988” Chicago: ALA, 1990, 182-180 p., p. 72-89, 71-90

渋川雅俊 “禁書目録—INDEX LIBRORUM PROHIBITUM—” 塾 Vol. 28, No. 6 表紙 p. 3 (1990. 12)

白石克 “室生寺朮塔” 塾 Vol. 28, No. 4 表紙 p. 3 (1990. 8)

〔日 吉〕

吉川智江 “英・仏・独の図書館事情” 塾監局紀要 No. 17, p. 74-75 (1990. 8)

〔理工学〕

瀧美恒二 “四人衆の謡い稽古” 矢上台ニュース No. 87, p. 8 (1990. 10. 20)

宮入暁子 “地図を作った人びと(私の薦める一冊の本)” 塾監局紀要 No. 17, p. 100 (1990. 8)

和田幸一 “一般職員研修合宿に参加して” 矢上台ニュース No. 88, p. 12 (1990. 11. 20)

〔医学〕

天野善雄 “A consideration of the cooperative activities between the National Center for Science Information System (NACSIS) and the Japan Medical Library Association” Proceedings of the 6th International Congress on Medical Librarianship Vol. 1, p. 15-19 (1990. 9)

天野善雄 “NACSIS-CAT に期待する” 医学図書館 Vol. 38, No. 2, p. 135-138 (1991)

天野善雄 “医学部関連史料の収集と利用” KEIO 医学部病院ニュース No. 102, p. 18 (1991. 3)

古沢賢一(文)・酒井明夫(イラスト) “図書館の機械

化について” KEIO 医学部病院ニュース No. 102, p. 8-11 (1991. 3)

五藤良子 “コジャーナルについての一考察—医学・経済学を比較して” 逐次刊行物研究分科会報告 No. 48, p. 50-60 (1990. 9)

市古みどり “疾病名における MeSH と国際的疾患分担との相関関係” 第17回医学図書館員セミナー論文集 p. 56-63 (1991. 2)

近藤真理子 “医学教育における情報利用教育のあり方—慶應義塾大学を素材として” 第25回医学図書館員研究会論文集 p. 182-187 (1991. 3)

窪田よし “表紙の写真『解体新書扉絵』の解説” KEIO 医学部病院ニュース No. 101 (1991)

村上篤太郎 “Q & A バーコードについて” 医学図書館 Vol. 37, No. 4, p. 315-317 (1990. 12)

永崎由紀子 “NACSIS-CAT を利用したオンライン目録作業” 医学図書館 Vol. 38, No. 2, p. 105-112 (1991. 1)

南野典子 “医学図書館における利用者教育実施案—慶應義塾大学医学情報センターの挑戦” 医学図書館 Vol. 38, No. 2, p. 118-123 (1991)

南野典子 “オンザスポット—医中誌 CD (テスト版)” 医学図書館 Vol. 38, No. 2, p. 187 (1991)

〔湘南藤沢〕

原田悟 “情報機関におけるコスト管理—固定費を中心として” 現代の図書館 Vol. 29, No. 1, p. 20-25 (1991)

金子康樹 “メディアセンターから” ΠANTHEON-SFC News Letter Vol. 1, No. 2, p. 8 (1990. 10. 13)

〔研究発表〕

〔三 田〕

東田全義 “(講演) 西洋古版本研究における図書館員の役割” 第10回西洋社会科学古典資料講習会 1990. 10. 3 於一橋大

東田全義 “レファレンス業務について” 国立国会図書館職員研修講義 1990. 10. 11 於慶應義塾大学三田情報センター

東田全義 “パッチョーリ『スムマ』の書誌学史” 私立大学図書館協会東地区部会研究部西洋古版本研究分科会 1991. 3. 16 於日本大学商学部

樋口恵子 “日米大学図書館員による大学図書館サービスの将来予測” 第11回大学図書館研修集会 1990.

11.29 於筑波大学

樋口洋子 “成長期における児童の読書形態の変化とモデル化” 日本図書館学会1991年度春季研究集会

1991.6.1 於東京大学教育学部

小川治之 “大学図書館の相互協力” 平成3年度大学図書館員長期研修 1991.7.22 於慶應義塾大学三田情報センター

〔日吉〕

齊藤憲一郎 “一般教養課程研究者用図書館にみられる研究者の情報蓄積” 三田図書館・情報学会1990年度研究大会 1991.11.10 於慶應義塾大学三田キャンパス

〔理工学〕

渡部満彦 “相互協力のきょうあした” 平成2年度全国図書館大会 1990.10.25 於静岡たちばな会館

〔医学〕

天野善雄 “学術情報センターと日本医学図書館協会との間の協力活動に関する考察” 第6回国際医学図書館会議 1990.9.25 於ニューデリー

天野善雄 “(パネルディスカッション) 大学図書館員の教育・研修” 平成2年度第2回私立大学図書館協会東地区研修会 1990.12.6 於上智大学中央図書館

天野善雄 “(パネルディスカッション) 学術情報センターに期待する” セミナー「学術情報センターに期待する」 1991.1.30 於慶應義塾大学医学部北里講堂

市古みどり “医中誌 CD テスト版の評価” 第8回図書館情報サービス研究大会 1991.6.23 於鳥取大学医学部

永崎由紀子 “NACSIS-CAT 接続事例報告” セミナー「学術情報センターに期待する」 1991.1.30 於慶應義塾大学医学部北里講堂

杉山良子 “国内医学雑誌の国際対応について” 第18回医学図書館員セミナー 1991.7.11 於九州大学附属図書館医学分館

〔湘南藤沢〕

金子康樹 “大学図書館とマーケティング” 私立大学図書館協会東地区部会研究会 1991.6.13 於明治大学

#### 研究・教育情報センター刊行物の案内

慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図 (一枚刷) 下 東海・関東その他 (文献シリーズ No. 20) 白石克執筆 三田情報センター 平成3年1月 13p. 図版23枚

慶應義塾図書館蔵松本文庫目録 —松本信廣名誉教授旧蔵書目録— 三田情報センター 平成3年1月 177p.

大阪北組旧蔵『大阪町絵図』(文献シリーズ No. 21) 白石克執筆 三田情報センター 平成4年1月刊行予定 36p. (図版22枚) B4版 (底本: 慶應義塾図書館所蔵(幸田成友旧蔵)彩色絵図 江戸中期書写 明和頃増補)



## 年次統計要覧 &lt;平成2年度&gt;

慶應義塾大学研究・教育情報センター

## I. 図書費 &lt;平成2年度実績及3年度予算&gt;

内 訳 支部センター	平成2年度実績 <単位：円>			平成3年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	638,270,162	3,762,907	642,033,069	656,254	3,895	660,149
図書館	342,163,000	3,762,907	345,925,907	344,394	3,895	348,289
学部*	294,980,962	—	294,980,962	311,860	—	311,860
指定寄付	1,126,200	—	1,126,200	—	—	—
(私大研究設備相当額)	(21,685,000)	—	**	(22,335)	—	**
日吉情報センター	150,883,000	3,994,448	154,877,448	155,718	2,114	157,832
図書館	59,418,000	2,249,902	61,667,902	61,418	2,114	63,532
学部*	91,465,000	1,744,546	93,209,546	94,300	—	94,300
(私大研究設備相当額)	(7,373,000)	—	**	(7,594)	—	**
医学情報センター	141,086,192	3,810,353	144,896,545	147,621	10,339	157,960
"	140,589,128	3,810,353	144,399,841	147,621	10,339	157,960
指定寄付	497,064	—	497,064	—	—	—
理工学情報センター	143,429,609	1,510,373	144,939,982	139,498	3,052	142,550
"	143,429,609	1,510,373	144,939,982	139,498	3,052	142,550
(私大研究設備相当額)	(1,287,675)	—	**	(1,300)	—	**
湘南藤沢 メディアセンター	370,636,506	6,386,526	377,023,032	117,646	6,844	124,490
"	72,396,506	6,386,526	78,783,032	117,646	6,844	124,490
創設費	298,240,000	—	298,240,000	—	—	—
合 計	1,444,305,469	19,464,607	1,463,770,076	1,216,737	26,244	1,242,981

注) \* 特別図書費は含まず。

\*\* ( ) 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したものの。

Ⅱ-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

内 訳 支部センター		単 行 本			製 本 雑 誌			非 図 書 資 料	合 計	
		和	洋	計	和	洋	計			
年 間 受 入 冊 数	三田情報センター	16,751	20,943	37,694	5,498	6,585	12,083	6,373	56,150	
	図 書 館	(9,367)	(10,464)	(19,831)	(3,467)	(1,717)	(5,184)	(3,168)	(28,183)	
	学 部	(7,384)	(10,479)	(17,863)	(2,031)	(4,868)	(6,899)	(3,205)	(27,967)	
	日吉情報センター	12,118	7,108	19,226	2,023	1,975	3,998	977	24,201	
	図 書 館	(9,322)	(960)	(10,282)	(1,373)	(109)	(1,482)	(557)	(12,321)	
	学 部	(2,796)	(6,148)	(8,944)	(650)	(1,866)	(2,516)	(420)	(11,880)	
	医学情報センター	1,443	1,054	2,497	2,215	4,289	6,504	975	9,976	
	理工学情報センター	1,934	1,072	3,006	1,490	2,864	4,354	151	7,511	
	湘南藤沢 メディアセンター	40,632	36,622	77,254	602	1,272	1,874	4,894	84,022	
	合 計	72,878	66,799	139,677	11,828	16,985	28,813	13,370	181,860	
	所 蔵 冊 数 累 計	三田情報センター	653,923	688,163	1,342,086	168,660	169,213	337,873	64,026	1,743,985
		図 書 館	(462,482)	(397,452)	(859,934)	(102,555)	(64,319)	(166,874)	(40,680)	(1,067,488)
		学 部	(191,441)	(290,711)	(482,152)	(66,105)	(104,894)	(170,999)	(23,346)	(676,497)
		日吉情報センター	267,972	135,549	403,521	32,333	43,118	75,451	9,403	488,375
		図 書 館	(196,717)	(21,111)	(217,828)	(20,448)	(1,178)	(21,626)	(3,608)	(243,062)
学 部		(71,255)	(114,438)	(185,693)	(11,885)	(41,940)	(53,825)	(5,795)	(245,313)	
医学情報センター		33,436	36,197	69,633	50,001	100,108	150,109	3,013	222,755	
理工学情報センター		49,365	30,113	79,478	36,689	105,296	141,985	716	222,179	
湘南藤沢 メディアセンター		40,632	36,622	77,254	602	1,272	1,874	4,894	84,022	
合 計		1,045,328	926,644	1,971,972	288,285	419,007	707,292	82,052	2,751,316	

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。

2) 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 学部	5,421 (2,253) (3,168)	4,127 (990) (3,137)	9,548 (3,243) (6,305)	5,274 (3,284) (1,990)	2,782 (1,425) (1,357)	8,056 (4,709) (3,347)	17,604 (7,952) (9,652)
日吉情報センター 図書館 学部	1,023 (610) (413)	809 (60) (749)	1,832 (670) (1,162)	579 (222) (357)	1,013 (18) (995)	1,592 (240) (1,352)	3,424 (910) (2,514)
医学情報センター	1,320	1,707	3,027	902	1,439	2,341	5,368
理工学情報センター	1,100	1,542	2,642	2,902	4,972	7,874	10,516
湘南藤沢 メディアセンター	290	581	871	-	-	-	871
合計	9,154	8,766	17,920	9,657	10,206	19,863	37,783

参考データ：非図書資料

内訳		種別	マイクロ資料 CD-ROM	A-V資料	合計	
年 間 新 規	三田情報センター	タイトル数	169	38	207	
		箇所数	5,717	657	6,374	
	日吉情報センター	タイトル数	13	155	168	
		箇所数	726	251	977	
	医学情報センター	タイトル数	10	32	42	
		箇所数	438	537	975	
	理工学情報センター	タイトル数	1	5	6	
		箇所数	80	71	151	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	2	380	382	
		箇所数	3,947	947	4,894	
	累 計	三田情報センター	タイトル数	1,035	7,586	8,621
			箇所数	51,337	12,689	64,026
日吉情報センター		タイトル数	340	2,370	2,710	
		箇所数	4,791	4,612	9,403	
医学情報センター		タイトル数	17	788	805	
		箇所数	445	2,568	3,013	
理工学情報センター		タイトル数	19	27	46	
		箇所数	555	161	716	
湘南藤沢メディアセンター		タイトル数	2	380	382	
		箇所数	3,947	947	4,894	

### Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内 訳 支部センター	館 外 貸 出				館 内 閲 覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学 生	そ の 他	計	一般図書	貴重書	
三田情報センター	16,178	134,115	7,907	158 200	*	1,135	1.04
日吉情報センター	6,427	102,682	0	109 109	*	-	1.01
医学情報センター	46,442	11,005	76	57 493	*	-	0.98
理工学情報センター	2,639	49,799	15	52 453	*	-	1.12
湘南藤沢メディアセンター	-	-	-	13 605	*	-	-
合 計	-	-	-	390 860	*	1,135	1.07

\* 開架のため実数不明。

### Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内 訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合 計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田情報センター	3,000	11	3,011	941	206	1,147	4,158
日吉情報センター	281	0	281	169	78	247	528
医学情報センター	9,730	306	10,036	2,017	96	2,113	12,149
理工学情報センター	34,431	0	34,431	1,416	77	1,493	35,924
湘南藤沢メディアセンター	580	0	580	53	0	53	633
合 計	48,022	317	48,339	4,596	457	5,053	53,392

参考データ：早慶 ILL

内 訳 支部センター	貸	借
三田情報センター	683	353
日吉情報センター	35	45
医学情報センター	172	23
理工学情報センター	262	322
湘南藤沢メディアセンター	0	4
合 計	1,152	747

Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	電 子 コ ピ ー (オペレーター付)	4,225	115,034	2,489	3,807	6,714	153,841
	簡 易 印 刷	149	167,254	1	400	150	167,654
	OHP・スライド作製	41	223	-	-	41	223
	電 子 コ ピ ー (セルフ式)	-	-	-	-	-	1,553,363
	マイクロフィルム	6	1,863	17	4,457	23	3,320
	ファクシミリ	-	-	-	-	3,444 (送信)	3,140 (受信)
日吉情報センター	電 子 コ ピ ー (オペレーター付)	349	1,661	2	3	351	1,664
	電 子 コ ピ ー (セルフ式)	-	-	-	-	-	250,310
	マイクロフィルム	24	1,434	-	-	24	1,434
医学情報センター	電 子 コ ピ ー (オペレーター付)	50,118	337,236	147,633	778,531	197,751	1,115,767
	OHP・スライド作製	1,258	5,439	-	-	1,258	5,439
	マイクロフィルム	17	353	-	-	17	153
	ファクシミリ	-	-	-	-	711 (送信)	2,903 (受信)
理工学情報センター	電 子 コ ピ ー (オペレーター付)	367	2,450	33,383	292,291	33,750	294,741
	OHP・スライド作製	347	1,518	-	-	347	1,518
	電 子 コ ピ ー (セルフ式)	22,967	376,240	1,028	34,542	23,995	410,782
	マイクロフィルム	69	1,750	5	209	74	1,959
湘南藤沢 メディアセンター	電 子 コ ピ ー (セルフ式)	26,950	27,327	-	-	26,950	27,327
	マイクロフィルム	1	58	-	-	1	58

参考：電子コピー枚数

内 訳 支部センター	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田情報センター	153,841	1,553,363	1,707,204
日吉情報センター	1,664	250,310	251,974
医学情報センター	1,115,767	-	1,115,767
理工学情報センター	294,741	410,782	705,523
湘南藤沢 メディアセンター	-	27,327	27,327
合 計	1,566,013	2,241,782	3,807,795

### Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

#### 利用者別

内 訳	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
支部センター				
三田情報センター	2,124	7,778	4,667	14,569
日吉情報センター	1,684	5,778	196	7,658
医学情報センター	1,632	529	2,380	4,541
理工学情報センター	1,121	3,676	2,578	7,375
湘南藤沢メディアセンター	18	786	0	804
合 計	6,579	18,547	9,821	34,947

#### 業務内容別

内 訳	文献所在調査	事項調査	利用指導	そ の 他	合 計
支部センター					
三田情報センター	6,279	562	7,649	79	14,569
日吉情報センター	1,547	733	5,374	4	7,658
医学情報センター	2,291	967	1,283	0	4,451
理工学情報センター	4,592	722	1,982	79	7,375
湘南藤沢メディアセンター	53	36	715	0	804
合 計	14,762	3,020	17,003	162	34,947

#### 編集後記

湘南藤沢メディアセンターの開設は、総合政策・環境情報両学部が開校した平成2年度4月であったが、平成3年4月M（ミュー）館の開設と7月センター規程の制定を以て実質的にその働きを開始することになった。同センターは規程にあるように、図書館サービス、電算サービスを包括し、さらにこれらの研究・教育支援サービスが未着手であったものを加えようとしている。

本号はこの新しい情報支援機関を第一の特集としたが、その立ち上がりは、いま、進行中の全図書館システム（KOSMOS）開発と並行し、多忙

を極めている。同センター所長はじめスタッフ面々原稿を期日通りに書き上げることができなかったのはやむを得ない。

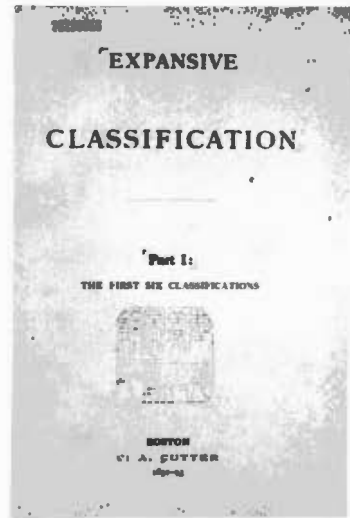
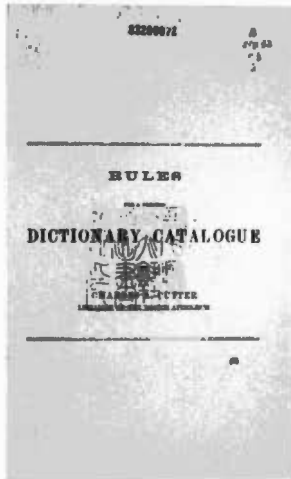
KULICは、本号から新しい表紙デザインを採用した。図書館内外の最近の変化を踏まえてのことだが、それをよく表わしているかどうか読者の判断を待ちたい。一時は年度内の発行が危ぶまれたが、編集委員諸姉の努力で、約二か月遅れで無事刊行。執筆者、編集委員、梅沢印刷に謝意を表したい。

（渋川雅俊）

編集委員＊情報センター本部 渋川雅俊＊三田情報センター 関口素子 柴田由紀子＊日吉情報センター  
酒井裕美子＊理工学情報センター 長谷川博子＊医学情報センター 南野典子 杉山良子＊湘南藤沢メディアセンター 松本和子

## CHARLES AMMI CUTTER : LIBRARY SYSTEMATIZER

ライブラリー  
システムタイザー  
は、図書館体系  
化の偉人という  
意味であろう。  
しかし、彼の場  
合には、この肩  
書の裏に、資料  
組織法の偉人と  
いう意味も込め  
られている。



1876年、カッターは現代目録法の源流となった RULES FOR A PRINTED DICTIONARY CATALOGUE (上図左) を提案している。この目録規則で彼は、記入法に件名標目に関する新しい提案をしているが、これが米国における件名目録法の基盤となった。このほかに、館長をしていたボストンアセニウムの分類法をもとにして、1881年、EXPANSION CLASSIFICATION (上図右) を発表した。



これは後の LC 分類、プリスの書誌分類法を経て UDC につながっている。また、同年、かれは、請求記号法に関し、著者記号表 ALPHABETIC-AUTHOR TABLE (左図) を考案している。なお、義塾所蔵のこの著者記号表の左上角には、彼が1888年4月28日にかつてデュイの図書館学校で同僚であったカトラーに献呈した時の自署名がある。なお同年、彼は米国図書館協会の会長でもあった。

しがわまさとし  
(渋川雅俊)